

秋田県文化財調査報告書第375集

大坪遺跡

—日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XVIII—

2004・3

秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田郡森吉町白坂(しろざか)遺跡
出土の「岩鏡」です。
縦文時代晚期初頭、1992年8月発見、高さ7cm、凝灰岩。

お　お　　つ　ば
大　坪　遺　跡

—日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XVIII—

2004・3

秋田県教育委員会

卷頭図版1 大坪遺跡調査区全景







序

本県には、これまでに発見された約4,600箇所の遺跡のほか、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の整備は、ゆとりと活力に満ちた新しいふるさと秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、日本海沿岸東北自動車道建設事業に先立って、平成14年度に本荘市内越地区において実施した大坪遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査では、溝跡などから中世の陶磁器が多く発見されました。この中には、中国から輸入された陶磁器や東海地方の渥美窯・常滑窯で焼かれた大甕などがふくまれており、当時の生活や交易の一端が明らかになりました。

本書が、ふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、ご協力いただきました日本道路公團東北支社秋田工事事務所、本荘市教育委員会など関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成16年3月

秋田県教育委員会

教育長 小野寺清

例　　言

1. 本書は、日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書の18冊目である。
2. 本書は、平成14（2002）年度に発掘調査した、秋田県本荘市畠谷字大坪に所在する大坪遺跡の調査成果を収めたものである。
3. 調査の内容については、すでにその一部が年報などによって公表されているが、本書の記載内容を正式なものとする。
4. 本書に使用した地図は、日本道路公団東北支社秋田工事事務所提供的工事路線計画図1,000分の1「日本海沿岸東北自動車道内越地区幅杭設計」及び建設省国土地理院発行の50,000分の1地形図「本荘」、25,000分の1地形図「本荘」・「前郷」である。
5. 本書に使用した空中写真撮影は株式会社ハイマーテックに委託した空中写真撮影による。
6. 第5章「自然科学分析」は、株式会社パレオ・ラボに委託した。
7. 本書の執筆にあたり、次の方々から御指導・御助言を賜った。記して感謝申し上げます。
(敬称略、五十音順)。穴澤義功・大橋康二・中野晴久・長谷川潤一・八重樫忠郎
8. 本書の草稿執筆は、第2章を油川龍一郎、その他を片岡稔彦・小納谷亮の協力を得て進藤紀が行った。編集は、小澤昌広・丸山涼子の協力を得て進藤紀が行った。

凡　　例

1. 遺構番号は、その種類ごとに略記号を付し、種別を問わず検出順に連番としたが、精査と整理作業の過程で欠番としたものもある。また、遺構の種類に用いた略記号は下記の通りである。

S A	柱穴列	S E	井戸跡	S S	鍛冶炉
S B	掘立柱建物跡	S K I	堅穴状遺構	S X	性格不明遺構
S D	溝跡	S K	土坑	S K P	柱穴様ピット
2. 遺跡基本層序と遺構土層図中の土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』1998年版に拠った。
3. 土層番号は、原則的に、ローマ数字を遺跡基本土層に、算用数字を遺構土層に使用して区別した。
4. 第3章の第2節及び第3節は、遺構毎→遺構外の順で遺物を掲載し、観察表を頁ごとに添付した。
5. 本文・挿図・図版中の遺物番号は、土器・鍛冶関連遺物・その他を通じて1から付し、観察表と対応させた。
6. 遺物の断面のうち、黒く塗りつぶしたものは須恵器である。
7. 遺構・遺物実測図で使用したスクリーントーンは下記のとおりである。



燒土範囲



陶器に付着した炭化物



土器の釉薬

目 次

卷頭図版

序

例言・凡例 ii

目次 iii

表・挿図・図版目次 iii

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過 1

第2節 調査要項 1

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と立地 3

第2節 歴史的環境 5

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観 9

第2節 調査の方法 9

第3節 調査の経過 10

第4節 整理作業の方法と経過 10

第4章 調査の記録

第1節 検出遺構 13

第2節 出土遺物 43

第3節 鋳冶関連遺物 58

第5章 自然科学的分析

第1節 放射性炭素年代測定 73

第2節 テフラ分析・屈折率測定 75

第6章 まとめ 78

図版

報告書抄録

挿図目次

第1図 日本海沿岸東北自動車道と関連遺跡 2	第8図 S K P構成グラフ 23
第2図 遺跡調査範囲図 2	第9図 柱穴列 24
第3図 遺跡の位置 3	第10図 挖立柱建物跡(1) 25
第4図 遺跡周辺の地形分類図 4	第11図 挖立柱建物跡(2) 26
第5図 周辺遺跡位置図 7	第12図 溝跡(1) 27
第6図 基本土層図 11	第13図 溝跡(2) 28
第7図 遺構配置図 12	第14図 溝跡(3) 29

第15図 溝跡(4)・土坑(1)	30	第36図 遺構外出土土器(5)	55
第16図 溝跡(5)	31	第37図 石器・石製品	56
第17図 溝跡(6)・土坑(2)	32	第38図 木製品・錢貨	57
第18図 溝跡(7)	33	第39図 鋳治関連遺物凡例	58
第19図 溝跡(8)	34	第40図 鋳治関連遺物構成図	59
第20図 溝跡(9)	35	第41図 遺構内出土鋳治関連遺物(1)	61
第21図 掘立柱建物跡(3)・井戸跡	37	第42図 遺構内出土鋳治関連遺物(2)	62
第22図 壓穴状遺構	38	第43図 遺構内出土鋳治関連遺物(3)	63
第23図 土坑(3)	39	第44図 遺構内出土鋳治関連遺物(4)	64
第24図 土坑(4)・鋳冶炉	40	第45図 遺構内出土鋳治関連遺物(5)	65
第25図 性格不明遺構	41	第46図 遺構内出土鋳治関連遺物(6)	66
第26図 柱穴様ピット配置図	42	第47図 遺構内出土鋳治関連遺物(7)	67
第27図 遺構内出土土器(1)	46	第48図 遺構内出土鋳治関連遺物(8)	68
第28図 遺構内出土土器(2)	47	第49図 遺構内出土鋳治関連遺物(9)・遺構外出土鋳治関連遺物(1)	69
第29図 遺構内出土土器(3)	48	第50図 遺構外出土鋳治関連遺物(2)	70
第30図 遺構内出土土器(4)	49	第51図 遺構外出土鋳治関連遺物(3)	71
第31図 遺構内出土土器(5)	50	第52図 遺構外出土鋳治関連遺物(4)	72
第32図 遺構内出土土器(6)・遺構外出土土器(1)	51	第53図 堆積物の鉱物組成	76
第33図 遺構外出土土器(2)	52	第54図 火山ガラスの屈折率とそのタイプ	77
第34図 遺構外出土土器(3)	53	第55図 堆積物中鉱物類の顕微鏡写真	77
第35図 遺構外出土土器(4)	54		

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧	8	第4表 堆積物の砂粒分析と鉱物分析	76
第2表 鋳治関連遺物構成比	58	第5表 火山ガラスの屈折率	77
第3表 放射性炭素年代測定及び暦年代較正	74		

図 版 目 次

卷頭図版1 大坪遺跡調査区全景	図版5 出土土器(2)
卷頭図版2 輸入陶磁器	図版6 出土土器(3)
卷頭図版3 常滑焼・瀬美焼	図版7 出土土器(4)
図版1 遺跡遠景・遺物出土状況(1)	図版8 錢貨・石製品・石器・木製品・鋳治関連遺物(1)
図版2 遺物出土状況(2)	図版9 鋳治関連遺物(2)
図版3 検出遺構	図版10 鋳治関連遺物(3)
図版4 出土土器(1)	

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

日本海沿岸東北自動車道は、新潟市から青森市にかけての日本海沿岸や県内の高速交通体系の改善など、地域の生産活動と県民生活に必要な情報や資源の交流を促進することを目的として計画された総延長340kmの高速道路である。このうち、秋田県内では、国土交通省によって一部事業化されている象潟仁賀保道路及び仁賀保本荘道路、秋田外環状道路、琴丘能代道路、大館西道路と連結して、小坂JCTで東北自動車道に接続する。1997(平成9)年2月に新潟市～青森市までが日本海沿岸東北自動車道として路線指定され、このうちの秋田南I・C～能代I・C間は2002(平成14)年9月、岩城I・C～秋田空港I・C間は同年10月に開通している。

大坪遺跡に係る本荘～岩城間の21.3kmについては、1997(平成9)年2月15日付の第13次施行命令を経て、路線が発表された。これに伴い、日本道路公団東北支社仙台建設局長から、秋田県教育委員会教育長あてに、計画路線内での埋蔵文化財の分布調査の実施依頼があった。

これを受け秋田県教育委員会は、路線上の埋蔵文化財確認のため、2001(平成13)年3・4月に分布調査を実施し、その結果、路線内に周知の遺跡である三条山遺跡と新たに発見した大坪遺跡・樋ノ口遺跡・堤沢山遺跡が存在することが明らかとなった。

大坪遺跡については、工事区域内の22,000m²を対象範囲として、2001(平成13)年11・12月に確認調査を行い、その結果、遺跡は古代の生産遺跡、中世の遺物包含地で、工事区域内の3,500m²について発掘調査が必要であることがわかった。発掘調査は、2002(平成14)年5～8月に3,600m²を対象にして行った。

大坪遺跡の発掘調査が行われた平成14年には、同事業に伴って上谷地遺跡・新谷地遺跡(いずれも本荘市)、平成15年には、岩倉館跡・芋種坂Ⅲ遺跡・堤沢山遺跡・樋ノ口遺跡(いずれも本荘市)の発掘調査も実施している。

第2節 調査要項

遺 跡 名 大坪遺跡(略記号: 6OT)

所 在 地 秋田県本荘市烟谷字大坪330外

調 査 期 間 平成14年5月20日～8月2日

調 査 目 的 日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査

調 査 面 積 3,600m²

調査主体者 秋田県教育委員会

調査担当者 進藤 紀(秋田県埋蔵文化財センター中央調査課学芸主事)

油川龍一郎(秋田県埋蔵文化財センター中央調査課学芸主事)

片岡 稔彦(秋田県埋蔵文化財センター中央調査課非常勤職員)

小納谷 亮（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課非常勤職員）

総務担当者 平成14年度

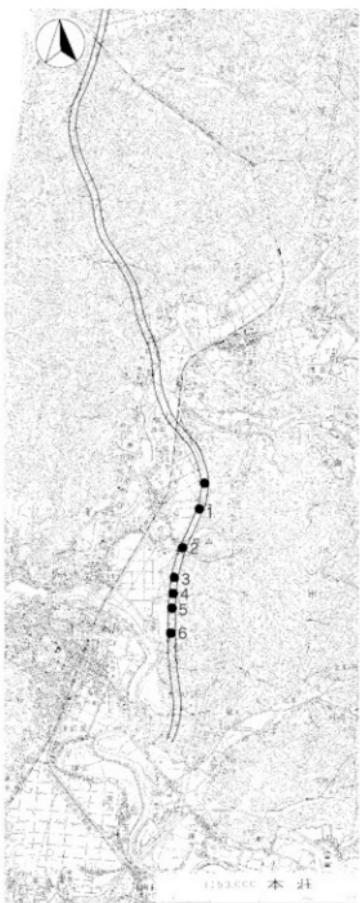
土橋 謙一（秋田県埋蔵文化財センター総務課主事）

平成15年度

藤原 康悦（秋田県埋蔵文化財センター総務課副幹）

調査協力機関 日本道路公団東北支社秋田工事事務所

本荘市教育委員会



第1図 日本海沿岸東北自動車道と関連遺跡



第2図 遺跡調査範囲図

No	遺跡名
1	芋種坂Ⅲ遺跡
2	樋ノ口遺跡
3	岩倉館跡
4	堤沢山遺跡
5	新谷地遺跡
6	上谷地遺跡

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と立地

大坪遺跡の所在する秋田県本荘市は、日本海に面する秋田県沿岸地方の南端寄りに位置し、市域は東西方向に約16km、南北方向に約20km、周囲約91.5km、総面積は約189.50km²である。海岸線に沿って国道7号線が延び、これから国道105号線、107号線、108号線が放射線状に延びており、秋田県内陸都市を結ぶ拠点、また、日本海側と太平洋側とを結ぶ交通の要となっている。市は、鳥海山を水源とする子吉川河口の本荘平野に広がり、元禄年間から記録に残る穀倉地帯であるとともに、日本海に面した港をもつ交易都市でもある。

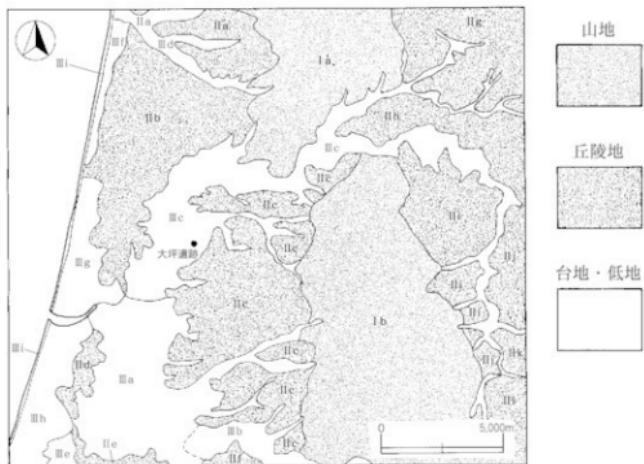
大坪遺跡は、JR羽越本線羽後本荘駅の北北東約4km、日本海から約10km、北緯39° 24' 47"、東経140° 15' 15" 本荘市北東部の内越地区に所在する。遺跡は、大内町から本荘市へ蛇行して南流する芋川左岸の沖積地に立地し、標高は10m前後である。標高25mほどの丘陵地に接し、西へ極めて緩く傾斜した水田の東端に位置する。遺跡の北に流れる赤田川と芋川は、遺跡の北北西約2kmの地点で合流し、さらに子吉川に合流して日本海に注いでいる。遺跡の所在する内越地区は、北西方向には北由利丘陵を望み、東に鬼倉山からの丘陵に接する。『土地分類基本調査本荘』によると、東から権現山山地(I a)鬼倉山山地(I b)、出羽丘陵に連なる中央丘陵(II c)、子吉川・芋川低地(III a・III c)、北由利・子吉川丘陵地(II b・II d)があり、その西に本荘・西目砂丘地(III g・III h)があつて海岸線に至っている。鬼倉山(601m)を中心とする山地は、南東-西北方向に僅かに屈曲して発達しており、等高線は西麓で約200m、東麓で約300mで囲まれた周縁は丘陵地形面に囲まれ、主分水嶺の鬼倉山、その北の笠森山、黒森山は山頂傾斜部が発達している。権現山(317m)を中心とする山地は、鬼倉山の北に位置し、200mの等高線で紡錘状に囲まれ発達している。主尾根の権現山、駒泣峠の北の独立三角点(317m)は全般に150~200mの中小起伏山地であるが、中張断層面が発達し最高位侵食面を形成する。



第3図 遺跡の位置

成しているため、中ノ俣丘陵地との変換部や不動ノ滝背斜は急傾斜となっている。この山地・丘陵部に源を発する中小河川が芋川、小友川、石沢川に注ぎ、子吉川に合流して日本海に達している。

子吉川・芋川低地に広がる本荘平野は、中新世から鮮新世にかけての第3系からなる低山地に囲まれており、南北に細長い形は周辺の第3系の背斜軸の方向に重なっている。子吉川低地は白幡、鎌倉向斜軸の本平野下底へ沈入収斂しつつ東西方向へのシーソー運動を随伴し、後氷期の海進との三因子に対応する地形変動を招来している。平野は、子吉川の旧流路によって低地の広い範囲に沖積地が構成されている。市街地周辺の標高約10mの平坦な地形面は、芋川と子吉川水系を通じて搬入された泥炭、泥炭質シルト、粘土及び砂の河成や湖沼堆積物が累積し、上流に向かって傾斜約1/1000で緩やかに高くなる堆積地形となっている。子吉川流域の南部では、氾濫原による砂やシルトが卓越している。遺跡は、芋川低地の東端に立地し、丘陵から流れ出す沢によって形成された扇状地形を呈しており、西側には水田が広がっている。



第4図 遺跡周辺の地形分類図

I 山地

(I a) 権現山山地 (I b) 鬼倉山山地

II 丘陵地

(II a) 岩城丘陵地 (II b) 北由利丘陵地 (II c) 中央丘陵地 (II d) 子吉丘陵地

(II e) 葛法丘陵地 (II f) 石橋丘陵地 (II g) 中ノ俣丘陵地 (II h) 扇守丘陵地

(II i) 上川大内丘陵地 (II j) 岩野目沢丘陵地 (II k) 小羽広丘陵地 (II l) 桧山丘陵地

III 台地・低地

(III a) 子吉低地 (III b) 石沢川低地 (III c) 芋川低地 (III d) 衣川低地

(III e) 西目低地 (III f) 由利砂丘地 (III g) 本荘砂丘地 (III h) 西目砂丘地

(III i) 海浜砂丘地

第2節 歴史的環境

由利本荘地域は、文献上「由理柵」「由理駅」「越方駅」があった地域として郷土史・考古学上大きな関心が寄せられているほか、縄文時代からの各時代にわたる遺跡が立地している。これらの遺跡について、秋田県教育委員会発行の『秋田県遺跡地図（由利地区版）』・『秋田県の中世城館』・『遺跡詳細分布調査報告書』に基づいて概観する。

現在までのところ、本荘市内においては旧石器時代の遺跡は確認されていないが、近接する大内町才ノ神や鳥海町国見等で旧石器時代の遺跡が確認されている。

縄文時代の遺跡としては、早期の菖蒲崎貝塚（19）・子吉川底遺跡（20）・神沢遺跡、前期の親川冷水遺跡（2）・深沢遺跡（4）・土谷白山遺跡（46）・菖蒲崎貝塚・子吉川底遺跡・船岡台遺跡、中期の薬師堂遺跡（27）・田尻遺跡（22）・鳴瀬遺跡・船岡台遺跡・梵天野遺跡、後期の親川フタノ沢遺跡（3）・大浦遺跡（16）・田尻野遺跡（23）・熊野神社遺跡（33）・上谷地遺跡（40）、晚期の長老沼遺跡（24）・東町遺跡（25）・小友金山遺跡（34）・大浦遺跡・田尻野遺跡等が確認されている。

菖蒲崎貝塚は、子吉川支流の芋川河口左岸に所在し、貝層の直上と直下で縄文時代早期末葉の土器片が出土し、貝層の99パーセントを汽水性のヤマトシジミが占めていた。他に、ウグイなどの魚類、ガン・カモ類に属する鳥類遺体も確認された。船岡台遺跡は、本荘市南西部の丘陵地に所在し、縄文中期の堅穴住居跡1軒、前期末の土坑8基が確認され、大木式土器、縄文前期円筒下層式土器、北陸系前期末葉の土器や魚形文刻石等が出土している。上谷地遺跡は、従来平安時代の遺跡とされてきたが、平成13・14年の調査で縄文時代後期のトチのアクリ抜きをした水さらし場遺構が確認された。

弥生時代の遺跡としては親川遺跡（1）・土花遺跡で遺物が確認されているのみで、当時の様子を解明するには至っていない。

古代の遺跡としては、新漆畠遺跡（7）・中ノ目遺跡（8）・土谷遺跡（21）・新ウルイノ遺跡（37）・横山遺跡（38）・大覚遺跡（39）・新谷地遺跡（41）・樋ノ口遺跡（49）・堤沢山遺跡（50）・葛法窯跡・雪車町遺跡・上谷地遺跡・立花遺跡・子吉大堤遺跡等が確認されている。葛法窯跡は、本荘市南西丘陵地の麓に所在し、8世紀末～9世紀初頭に操業の中心を置く半地下式の登り窯が3基検出された。遺物は全て須恵器で、壺・台付壺・台付碗・壺・甕が出土した。壺はロクロ水挽きによって成形され、切り離しは回転ヘラ切りで切り離し後の再調整のないものであった。横山遺跡は、本荘市北東の沖積地に所在し、10世紀の水田跡が住居跡等と共に発見されている。十和田a火山灰の堆積状態からこの水田跡は、915年以前に営まれたと考えられる。古代の水田は、県内では初の発見例である。上谷地遺跡の所在する土谷地区は、古くから多数の遺物が出土しており、特に昭和6年6月13日の『本荘時報』では大正年間の耕地整理中の角材発見が伝られ、本荘市西部の古雪地区と共に由理柵の推定地の一つといわれている。本荘市教育委員会では、4次にわたって上谷地遺跡の分布調査を行い、北宋銭・土師器・須恵器・箸・加工痕の残る板材が出土した。また、平成13年度から3年にわたり秋田県教育委員会による調査も行われ、掘立柱建物跡、廃棄の際に祭祀が行われたと思われる井戸跡等から、北宋銭・土師器・須恵器・箸・大型の板材等の木製品、底部が回転ヘラ切りで胎土の状態や底部の形状が葛法窯の製品に類似した須恵器壺等が出土した。大覚遺跡からは祭祀用木製品、新漆畠遺跡からは羽口や大量の鉄滓、土谷遺跡からは羽口・大量の鉄滓や須恵器陶器、新谷地遺跡からは土師器・須

恵器や鉄滓が出土している。

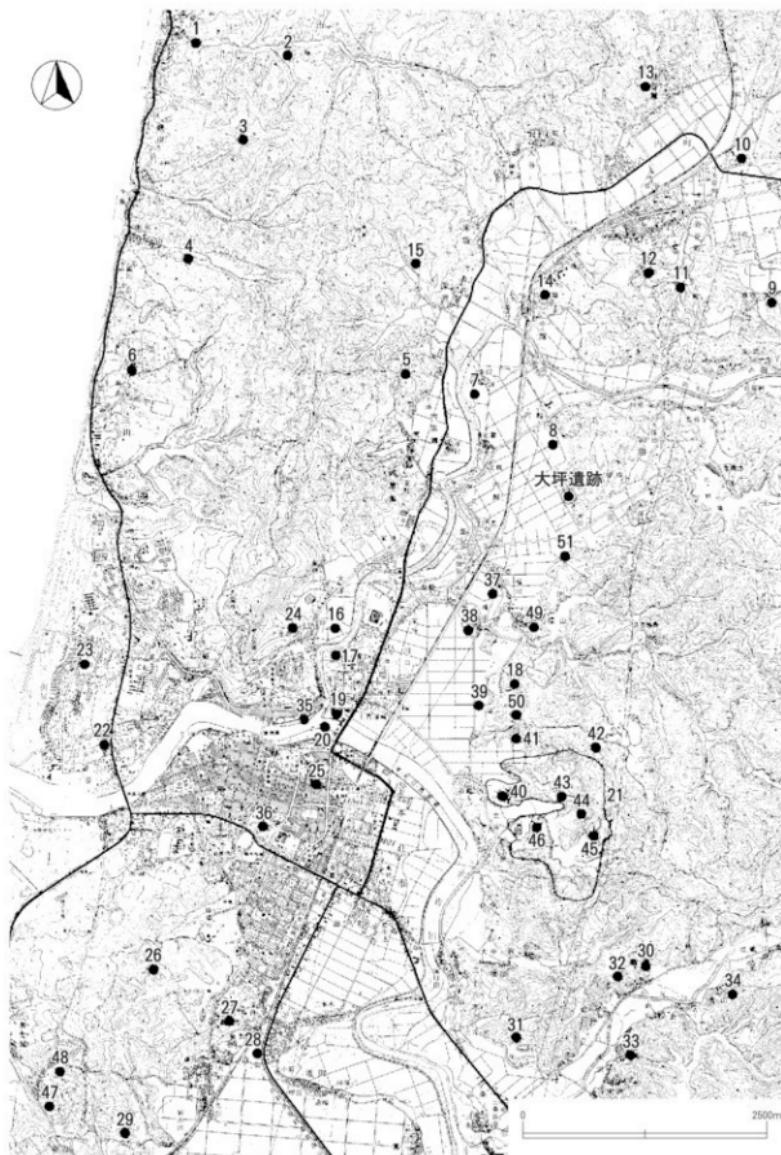
中世の遺跡には、集落跡として大浦遺跡・土花遺跡がある。大浦遺跡は芋川河口から900m 上流の右岸に位置する。13世紀から15世紀の陶磁器や銭貨と共に、掘立柱建物跡・鍛冶炉跡・堅穴状遺構、道路跡が検出された。立花遺跡は、万願寺地区の南部に所在し、珠洲系陶器や中国製の磁器と共に、建物跡・井戸跡や火葬墓が検出されている。また、黒瀬館（5）・元館（10）・岩谷古館（12）・岩谷麓古館（13）・中館（14）・川口館（17）・岩倉館（18）・子吉館（26）・埋田小館（28）・蝦夷館（29）・館前館（30）・株切館（32）・本荘城（36）・樋ノ口遺跡（49）など多くの館跡が発見されている。通説では、由利氏が平安時代末期から鎌倉時代の初期までこの地域を支配したとされ、『吾妻鏡』には文治5（1189）年の奥州合戦の際に、鎌倉方に捕らえられたがその立居が認められ、本領安堵された由利惟平の記事が見られる。建保元（1213）年の和田合戦の後は、幕府女房の大式局が由利郡地頭職となり、一族の小笠原氏に受け継がれ、分割譲渡を繰り返すなかで地縁的結合をもった庶子が党的性格の独立勢力になったものと推測される。北条得宗家の専制・鎌倉幕府滅亡・南北朝の争乱を経て、小豪族が割拠する「由利十二頭」の時代となる。

「由利十二頭」の時代は、天正18（1590）年の奥州仕置・太閤検地で終わりを迎える。中央政権の地域支配として由利五人衆が設定されたが、慶長7（1602）年には、関ヶ原の戦の功から最上義光の支配となり、重臣の楯岡満茂が入部した。この時に、満茂が統治の拠点として尾崎山に築いた本荘城を中心に、江戸期を通じて近代城下町として本荘は発展を遂げてきた。

* () 内の数字は第5図及び第1表と対応させた。

《参考文献》

- 秋田県 『土地分類基本調査 本荘』 1980(昭和55)年
- 秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図(由利地区版)』 2001(平成13)年
- 秋田県教育委員会 『秋田県の世紀城館』 秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和56)年
- 秋田県教育委員会 『大浦遺跡－芋川害復田等開拓緊急事業に係る理叢文化財発掘調査報告書－』 秋田県文化財調査報告書第336集 2002(平成14)年
- 秋田県教育委員会 『椎山遺跡－内緑地区における基盤整備事業に係る理叢文化財発掘調査報告書－』 秋田県文化財調査報告書第363集 2003(平成15)年
- 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第342集 2002(平成14)年
- 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第365集 2003(平成15)年
- 秋田県埋蔵文化財センター 『研究紀要』 第7号 1992(平成4)年
- 本荘市教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 1985(昭和60)年
- 本荘市教育委員会 『上谷地遺跡詳細分布調査報告書－第3次調査－』 本荘市文化財調査報告書第14集 1997(平成9)年
- 本荘市教育委員会 『上谷地遺跡詳細分布調査報告書－第4次調査－』 本荘市文化財調査報告書第15集 1998(平成10)年
- 本荘市 『本荘市史通史編・1』 1984(昭和59)年
- 本荘市 『本荘市史史料編・1上』 1984(昭和59)年
- 本荘市 『本荘市史史料編・1下』 1985(昭和60)年
- 奈良修介・豊島 誠 『秋田県の考古学』 吉川弘文館 1967(昭和42)年
- 大和久廣平・奈良修介 『秋田県史 考古編』 1977(昭和52)年



第5図 周辺遺跡位置図

番号	遺跡名	遺跡地図登録番号	所 在 地	種別	現状	主な遺構・遺物
1	親川	5-3	本荘市親川字ツバチ山	遺物包含地	宅地	弥生土器片
2	親川冷水	5-4	本荘市親川字榎木林	遺物包含地	畠地	縄文土器片（前期）
3	親川フタノ沢	5-5	本荘市親川字金ヶ沢	遺物包含地	畠地	縄文土器片（後期）
4	深沢	5-6	本荘市深沢字深沢	遺物包含地	畠地	縄文土器片・中世鐵貨
5	黒瀬館	5-7	本荘市内黒瀬字駒ノ下	館跡	草地	腰郭
6	西大台	5-60	本荘市三川字西大台	遺物包含地	山林	鉄津
7	新塗畠	5-61	本荘市内越子新塗畠	遺物包含地	水田	土師器片
8	中ノ目	5-62	本荘市内越子中ノ目	遺物包含地	水田	須恵器片
9	飛川	44-33	由利郡大内町北郷田字沢入	遺物包含地	山林	縄文土器片・石匙
10	元館	44-35	由利郡大内町岩谷町字ハケノ下	館跡	山林	空堀
11	古館	44-37	由利郡大内町岩谷町字古館	遺物包含地	宅地・畠地	石斧・石鎌・石匙
12	岩谷古館	44-38	由利郡大内町岩谷町字古館	館跡	山林	空堀・腰郭
13	岩谷體古館	44-39	由利郡大内町岩谷町字古館	館跡	山林	
14	中館	44-40	由利郡大内町中館字堤岸	館跡	山林	
15	蜂長根	44-41	由利郡大内町深沢字横沢	遺物包含地	山林	石槍・石鎌・石匙
16	大浦	5-13	本荘市大浦字八走	集落跡	畠地・水田	縄文土器（後期・晩期）・石器 古代（土師器・須恵器・木器）
17	川口館	5-14	本荘市川口字愛宕山	館跡	学校地	空堀・須恵器片
18	岩倉館	5-15	本荘市川口字岩倉	館跡	山林・採石地	陶磁器片・五輪塔・坩埚
19	菖蒲崎貝塚	5-16	本荘市川口字下菖蒲崎	貝塚	河川敷	縄文土器（早期・前期）・シジミ貝・魚骨
20	子吉川底	5-17	本荘市川口字下菖蒲崎付近川底	遺物包含地	川底	縄文土器片
21	土谷	5-18	本荘市土谷字田ノ沢	遺物包含地	山林・畠地	製鐵伊賀・珠洲系陶器・袖津鏡・羽口・鉄津
22	田尻	5-19	本荘市石脇字田尻	遺物包含地	畠地	縄文土器片（中期末：大木9+10式）
23	田尻野	5-20	本荘市石脇字田尻野	遺物包含地	宅地・畠地	縄文土器片（後期・晩期）
24	長老沼	5-21	本荘市石脇字上長老沼	遺物包含地	宅地・畠地	縄文土器片（晩期）・石匙・石斧・石鎌
25	東町	5-22	本荘市東町	遺物包含地	宅地・畠地	縄文土器片（晩期）
26	子吉館	5-23	本荘市出戸町字水林	館跡	山林	空堀・土塁・馬場跡
27	薬師堂	5-24	本荘市薬師堂字駒ノ下	遺物包含地	原野・宅地・畠地	縄文土器片
28	埋田小館	5-25	本荘市埋田字小館	館跡	畠地・草地・雜木林	
29	鶴夷館	5-26	本荘市藤崎字苦沢	館跡	山林	
30	館前館	5-32	本荘市館前字館前	館跡	山林	腰郭・須恵器四耳壺
31	三条山	5-35	本荘市三条字定川沢	遺物包含地	山林	縄文土器片
32	株切館	5-50	本荘市館前字株切館	館跡	山林	
33	熊野神社	5-51	本荘市大沢字南闇	遺物包含地	草地・神社	縄文土器片（後期）
34	小友金山	5-52	本荘市金山	遺物包含地	山林	縄文土器片（晩期）・石斧・石鎌
35	石脇山中	5-63	本荘市石脇字石脇	遺物包含地	宅地・畠地	縄文土器片
36	本荘城	5-64	本荘市出戸町字牛崎	城跡	公園	縄文土器片・石器・陶器片・磁器片
37	新ウルイノ	5-65	本荘市畠谷字新ウルイノ	遺物包含地	水田	土師器片
38	横山	5-66	本荘市福山字横山	集落跡	水田	水田跡・堅穴住居跡・土師器片・須恵器片
39	大覚	5-67	本荘市川口字大覚	遺物包含地	水田	土師器片
40	上谷地	5-68	本荘市土谷字上谷地	集落跡	水田・山林	縄文後期（水きらし塙・土器・石器） 平安（井戸跡・施主柱跡物語・鶴跡・土師器・須恵器・木製品）
41	新谷地	5-69	本荘市土谷字新谷地	遺物包含地	水田	土師器片
42	岩瀬堤	5-70	本荘市土谷字曾沼	遺物包含地	水田	須恵器片
43	土谷田ノ沢	5-71	本荘市土谷字田ノ沢	遺物包含地	山林	鉄津
44	土谷堤下	5-72	本荘市土谷字堤下	遺物包含地	山林	
45	土谷堂ケ沢	5-73	本荘市土谷字堂ケ沢	遺物包含地	山林	
46	土谷白山	5-74	本荘市土谷字小瀬田	遺物包含地	山林	縄文土器（前期）
47	鉢沢	41-22	由利郡西目町海士削字鉢沢	遺物包含地	畠地	縄文土器片
48	北沢	41-32	由利郡西目町海士削字北沢	遺物包含地	水田	縄文土器片・石棒
49	穂ノ口		本荘市福山字穂ノ口	館跡	山林	空堀・櫛跡・炭窯・木製品・鉄製品
50	堤沢山		本荘市川口字大学堤沢山	鍛冶	山林	鍛冶型（仮具）・鉄津・炉壁
51	李稚坂		本荘市福山字李稚坂	製鉄	山林	縄文後期（土器）古代～中世（跳溝・鋸壁・羽口）
	大坪		本荘市畠谷字大坪	集落跡 鷄治生産	水田	調査・鍛冶炉・土師器・須恵器・須恵器陶器・常滑青磁・白磁・宋真・鍛冶炉・鋸壁・羽口

第1表 周辺遺跡一覧

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

大坪遺跡は、本荘市北部の内越地区にあり、JR羽後本荘駅の北北東約4kmに位置している。大内町から本荘市へ蛇行して南流する芋川左岸の冲積地に立地し、標高は10m前後である。

地形は、東側の山地から流れ出す沢によって形成された扇状地形を呈し、東から西へ緩く傾斜している。遺跡周辺の芋川沿いには、縄文時代から古代にかけての遺物包含地と岩倉館跡・樋ノ口遺跡等の中世城館跡が点在している。

第2節 調査の方法

1 調査区の設定

調査の方法は、日本海沿岸東北自動車道建設工事のセンター杭S.T.A.327を基点として真北方向をとり、4m×4mの方眼杭を打設して遺構・遺物の検出地点を把握するグリッド法を採用した。基点には、MA50の呼称を付し、西に行くに従いMB、MC、MD……というアルファベットを、北に行くに従い51、52、53……という二桁の算用数字を用い、これを組み合わせた記号で位置を示した。その際、4m方眼の南東隅に位置する杭を当該グリッドの名称とした。

2 発掘方法と記録作成

調査は確認調査成果に基づき、表土除去は重機によって行い、その後にグリッド杭を打設した。遺構の検出はグリッドごとに進め、V層の上面で検出した。

検出した遺構は、発見順に略記号及び番号を付して区別し、図面と写真により記録した。図面の縮尺は1/20を基本とし、遺物状況の微細図は1/10とした。

遺物は、遺跡名・出土グリッドまたは遺構名・遺物番号・層位・出土年月日を記入し、取り上げた。遺構内で出土した物については、一括もしくは遺物番号付を区別し、微細図・写真等の記録を行い取り上げをした。写真の撮影は、35mm判モノクロとリバーサルを合わせて使用した。

3 基本土層（第6図）

遺跡の基本土層は、東西方向・南北方向にベルトを設定し、以下の通り観察した。

第I層 灰黄褐色(10YR4/2) シルト質土 近年の水田耕作に由来する

第II層 黒褐色(2.5Y3/2) 粘質土 暗灰黄色(2.5Y4/2・5/2)の粘質土を含む

第III層 黄灰色(2.5Y4/1) 粘質土 炭化物を極少量含む 遺物包含層

第IV層 オリーブ黒色(5Y3/2) 腐植土 遺物包含層

第V層 オリーブ灰色(5GY5/1) 粘質土 地山層 下層はグライ化した明オリーブ灰色土(5GY7/1)

第3節 調査の経過

大坪遺跡の発掘調査は、平成14年5月20日から8月2日の期間に行った。発掘調査の経過は、以下の通りである。

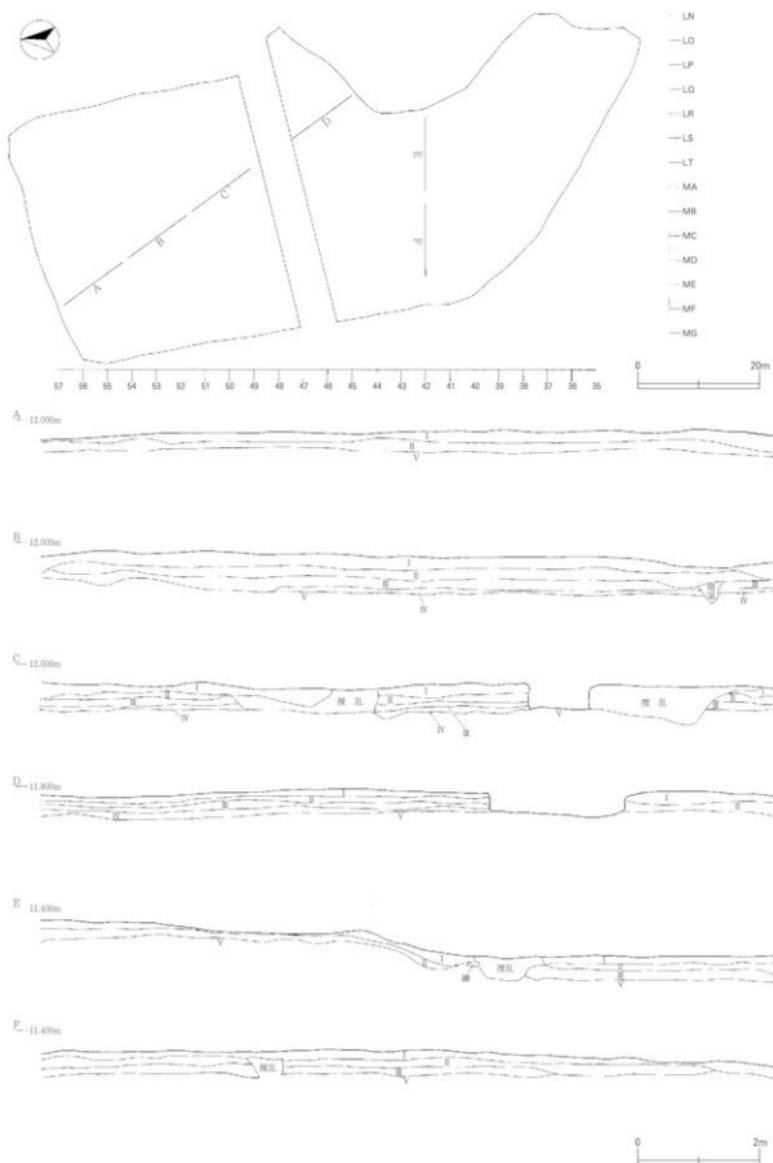
4月30日	本荘市文化会館において作業員説明会を行った。	7月5日	溝跡(SD230)を検出した。
5月7日	表土除去を開始した。	7月10日	溝跡から須恵系陶器が出土した。
5月11日	表土除去を終了した。	7月12日	溝跡から青磁が出土した。
5月20日	発掘器材の搬入、作業員への説明を終え、調査を開始した。	7月15日	基本土層の記録を終了した。
5月23日	溝跡(SD07)を検出した。	7月19日	溝跡(SD327)を検出した。溝跡(SD330)の精査を終了した。
5月24日	溝跡(SD24~26)を検出した。	7月23日	溝跡(SD382)の精査を終了した。
5月27日	溝跡(SD14)を検出した。	7月29日	鍛冶炉(SS461)を検出した。 溝跡(SD430)から大量の中世陶磁器と楕形滓が出土した。
5月28日	井戸跡(SE28)を検出した。	7月31日	溝跡(SD400・401・425・430)の精査を終了した。
5月29日	作業員の健康診断を行った。	8月1日	溝跡(SD414・416・488)の精査を終了した。
6月5日	溝跡(SD60・71)を検出した。	8月2日	遺跡全景等の空中撮影を行った。 溝跡(SD498)の精査を終了し、全遺構の調査を終了した。 日本道路公団の立ち会いのもと引渡しを行い、発掘調査の全日程を終了した。
6月6日	溝跡(SD90)を検出した。		
6月13日	溝跡(SD114~116)を検出した。		
6月20日	溝跡(SD168)を検出した。		
6月28日	溝跡(SD220)を検出した。		
7月1日	溝跡(SD216・218)、竪穴状遺構(SKI15)を検出した。溝跡(SD214)の精査を終了した。		

第4節 整理作業の方法と経過

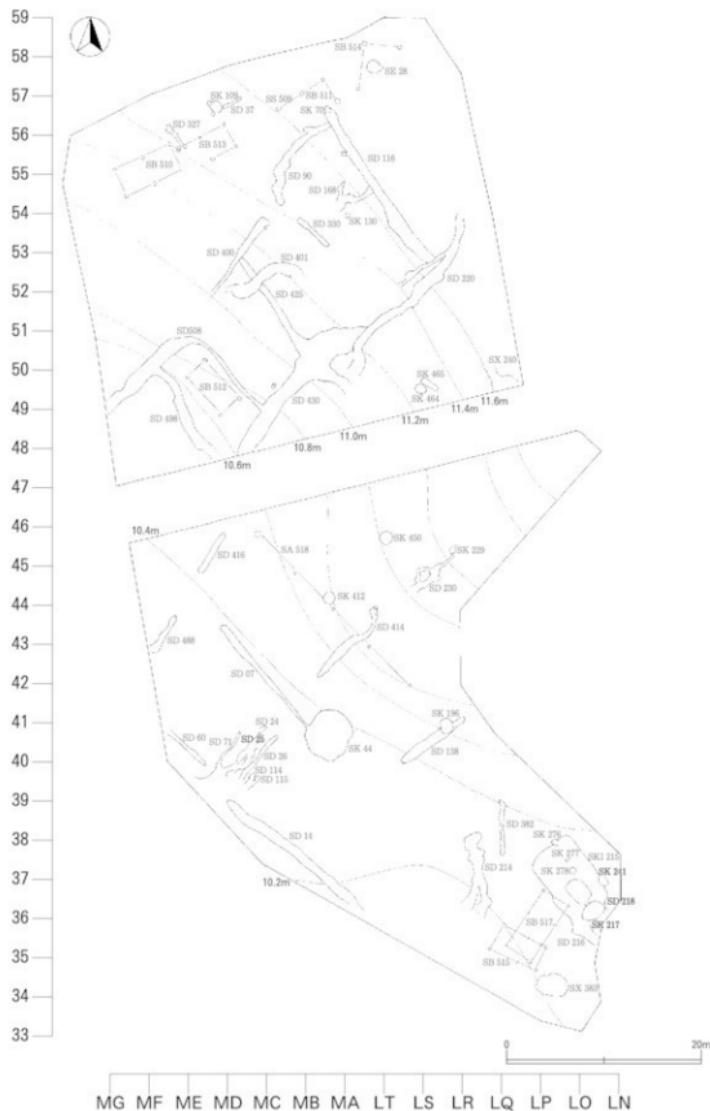
遺構は、現場で作成した平面図・断面図を点検・修正し、第2原図を作成し、これをトレースした。柱穴様ピットとそれ以外の遺構を別途扱うことにして、柱穴様ピットの記述はグラフとしてまとめた。

遺物は、一部を発掘調査と併行して洗浄を行い、調査終了後に秋田県埋蔵文化財センター中央調査課において残りを洗浄し、後に注記、土器・鍛冶関連遺物の接合復元作業を行った。その後、報告書掲載遺物を選択し、272点を図化し、必要に応じて採拓も行った。実測図は、残存状況を理解できるような作図を心がけ、残存状況の少ない遺物は180°回転で復元実測を行った。遺物の分類・選択の際、中世陶磁器は大橋康二氏・中野晴久氏・八重樫忠郎氏に、鍛冶関連遺物は穴澤義功氏の指導・助言をうけて進め、これらと併行して、炭化物・火山灰のサンプルを選択し、科学的分析を委託した。

報告書の作成に当たっては、出土遺物の記述を優先したため、遺構の記述・図版は最小限に留めた。以上の経過を経て、原稿を作成し編集作業を行った。



第6図 基本土層図



第7図 遺構配置図

第4章 調査の記録

第1節 検出遺構

調査の結果、大坪遺跡で検出した遺構は、柱穴列1列、掘立柱建物跡7棟、溝跡31条、井戸跡1基、竪穴状遺構1基、土坑11基、鍛冶炉2基、性格不明遺構2基、柱穴様ピット417基で、確認面は全て第V層である。これらの遺構は古代・中世に帰属する。縄文時代の遺構は確認されなかったことから、出土した遺物は、遺跡の東側に広がる丘陵等からの流れ込みと推測される。

1 柱穴列

S A518（第9図）

L S41、L T42、MA43、MB44、MC45グリッドに位置する。P 2～P 3間にS K412、P 3～P 4間にS D414の中世の遺構が存在するが、柱穴との直接の切り合いはない。P 1～P 5（北西～南東）で構成され、柱穴の上面形は全て円形である。規模（長軸×短軸×確認面からの深さ）は、P 1は径約0.6mで、確認面からの深さ0.07mまでは緩やかに傾斜し、ほぼ中央で $0.28 \times 0.24 \times 0.16$ mの大きさで更に掘り下げられている。P 2は $0.27 \times 0.23 \times 0.11$ m、P 3は $0.27 \times 0.25 \times 0.13$ m、P 4は $0.33 \times 0.31 \times 0.11$ m、P 5は $0.37 \times 0.30 \times 0.26$ mである。P 1の下部とP 2～P 5の底部はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がる。柱穴間の距離はP 1～P 2が5.46m、P 2～P 3が5.51m、P 3～P 4が5.16m、P 4～P 5が5.76mである。埋土はP 1とP 4の他は黄灰色土の單一層である。P 1は2種類の黒褐色土、P 4は黄灰色土と灰黄色土の2層からなる。遺物はP 1の1層から土師器が出土した。

2 掘立柱建物跡

S B510（第10図）

M E54・55、M F54・55グリッドに位置する。P 1～P 6で構成され、桁行（北東～南西）6.4m×梁行（南西～北東）3.0mで、桁行2間×梁行1間の規模である。柱穴の上面形はP 5が椭円形で、その他は全て円形である。規模（長軸×短軸×確認面からの深さ）は、P 1は $0.49 \times 0.49 \times 0.21$ m、P 2は $0.45 \times 0.45 \times 0.41$ m、P 3は $0.40 \times 0.40 \times 0.13$ m、P 4は $0.41 \times 0.41 \times 0.12$ m、P 5は $0.46 \times 0.35 \times 0.22$ m、P 6は $0.33 \times 0.33 \times 0.27$ mで、柱穴間の距離は2.50～2.79mである。埋土は全て黄灰色土の單一層で、P 2で礎石と思われる礫が出土した。遺物は周辺から土師器等が出土している。東側に位置するS B511・513と主軸を共にすることから同時期のものと考えられる。

S B511（第10図）

MA56・57、MB56・57グリッドに位置する。P 1～P 4で構成され、桁行（北東～南西）5.40m×梁行（北西～南東）2.60mで、桁行2間×梁行1間の規模である。柱穴の上面形はP 4が円形で、その他は全て不整円形である。規模（長軸×短軸×確認面からの深さ）は、P 1は $0.37 \times 0.30 \times 0.26$ m、P 2は $0.50 \times 0.43 \times 0.17$ m、P 3は $0.34 \times 0.32 \times 0.12$ m、P 4は $0.59 \times 0.53 \times 0.23$ mで、柱穴間の距離は、2.85～2.55mである。埋土はP 1が4層、P 3が3層からなり、その他は黄灰色土の單一層

である。遺物は周囲から土師器等が出土した。東西側に位置する S B510・513と主軸を共にすることから同時期のものと考えられる。P 1 は中世の S S 509と S K P 40に切られる。

S B512 (第10図)

M C 49、MD 48～50、ME 49グリッドに位置する。P 1～P 4で構成され、桁行（北東～南西）5.10m×梁行（北西～南東）2.60mで、桁行1間×梁行1間を確認したが、桁行については中間の柱穴が後世の削平によって失われている可能性がある。柱穴の上面形は、P 1 が不整円形、P 2・P 4 が円形、P 3 が梢円形である。規模（長軸×短軸×確認面からの深さ）は P 1 は $0.38 \times 0.30 \times 0.17\text{m}$ 、P 2 は $0.41 \times 0.40 \times 0.24\text{m}$ 、P 3 は $0.39 \times 0.30 \times 0.33\text{m}$ 、P 4 は $0.39 \times 0.35 \times 0.14\text{m}$ である。埋土は全て黒褐色の粘質土で單一層である。遺物は P 1 から土師器が出土したが、中世の溝跡に囲まれていること等から中世の遺構である可能性もある。

S B513 (第11図)

M C～M E 55、MD 56グリッドに位置する。P 1 は S K P 305を切っている。P 1～P 5で構成され、桁行（北東～南西）5.20m×梁行（北西～南東）2.60mで、桁行2間×梁行1間の規模である。柱穴の上面形は P 2 が不整円形、P 5 が梢円形で、その他は全て円形である。規模（長軸×短軸×確認面からの深さ）は P 1 は $0.35 \times 0.30 \times 0.22\text{m}$ 、P 2 は $0.23 \times 0.19 \times 0.04\text{m}$ 、P 3 は $0.31 \times 0.29 \times 0.11\text{m}$ 、P 4 は $0.32 \times 0.26 \times 0.37\text{m}$ 、P 5 は $0.48 \times 0.30 \times 0.16\text{m}$ で、柱穴間の距離は約2.60mである。埋土は全て黄灰色土の單一層である。西側に位置する S B510・511と主軸を共にすることから同時期のものと考えられる。

S B514 (第21図)

L S 58、L T 57・58グリッドに位置する。P 1～P 3で構成され、桁行（北東～南西）4.80m×梁行（北西～南東）3.80mで、桁行1間×梁行1間の規模である。柱穴の上面形は P 1・P 2 が不整円形、P 3 が円形である。規模（長軸×短軸×確認面からの深さ）は P 1 は $0.50 \times 0.36 \times 0.20\text{m}$ 、P 2 は $0.40 \times 0.35 \times 0.19\text{m}$ 、P 3 は $0.37 \times 0.35 \times 0.35\text{m}$ で、柱穴間の距離は、P 1～P 2 が3.80m、P 2～P 3 が4.80mである。埋土は全て黄灰色土の單一層である。遺物は、P 2 で礎石と思われる礫、P 3 で柱根が出土した。また、P 1 から検出した炭化物は自然科学分析の結果10～11世紀の数値が得られている。同時期に利用されたと思われる S E 28を囲むように設置されていることから関連した遺構の可能性が高い。

S B515 (第11図)

L O 35、L P 34・35、L Q 35グリッドに位置する。P 1～P 6で構成され、桁行（北西～南東）5.05m×梁行（北東～南西）2.91mで、桁行2間×梁行1間の規模である。柱穴の上面形は P 1・P 5 が梢円形で、その他は全て円形である。規模（長軸×短軸×確認面からの深さ）は、P 1 は $0.37 \times 0.30 \times 0.26\text{m}$ 、P 2 は $0.30 \times 0.28 \times 0.25\text{m}$ 、P 3 は $0.40 \times 0.37 \times 0.51\text{m}$ 、P 4 は $0.35 \times 0.30 \times 0.30\text{m}$ 、P 5 は $0.23 \times 0.18 \times 0.27\text{m}$ 、P 6 は $0.38 \times 0.35 \times 0.40\text{m}$ である。柱穴間の距離は、P 1～P 2 が3.21m、P 2～P 3 が1.84m、P 4～P 5 が2.85m、P 5～P 6 が2.04m、P 1～P 4 が2.91m、P 3～P 6 が2.58mである。埋土は全て黄灰色土の單一層である。P 2・P 4 から礫が出土したが、流れ込みの可能性もある。S B517と重なり合うが主軸がずれる。

S B517 (第11図)

L O35・36、L P34~36グリッドに位置する。P 1~P 7で構成され、桁行(北東~南西)6.97m×梁行(北西~南東)3.03mの規模である。柱穴の上面形はP 1・P 4が円形、その他は全て梢円形である。規模(長軸×短軸×確認面からの深さ)はP 1は $0.24 \times 0.24 \times 0.25$ m、P 2は $0.23 \times 0.18 \times 0.19$ m、P 3は $0.30 \times 0.22 \times 0.14$ m、P 4は $0.25 \times 0.20 \times 0.33$ m、P 5は $0.25 \times 0.21 \times 0.15$ m、P 6は $0.26 \times 0.20 \times 0.20$ m、P 7は $0.23 \times 0.17 \times 0.17$ mである。柱穴間の距離は、P 1~P 2が2.25m、P 2~P 3が2.25m、P 3~P 4が2.47m、P 5~P 6が4.16m、P 6~P 7が2.65m、P 1~P 5が3.03m、P 4~P 7が2.90mである。埋土はP 2・P 3が黒褐色土の單一層で、その他は全て黄灰色土の單一層である。遺物は周辺から土師器等が出土した。S B515と重なり合うが主軸がずれる。

3 溝跡

S D07 (第12図)

MA40、MB41・42、MC42・43グリッドに位置する。当初はSK44と関連した遺構と考えたが、遺物の出土状況などから同遺構に切られていると判断した。長さ(北西~南東)13.6m×幅(北東~南西)0.16~0.86mで、確認面からの深さは0.23mある。埋土は3層に分かれ、自然堆積と考えられる。1層は地山ブロックを多く含んだ黄褐色土、2層は暗灰黄色で十和田a火山灰を含む、3層はⅢ層に由来する地山ブロックを多く含んだ黄灰色土である。遺物は土師器2点と須恵器1点が出土した。S A518やS D60等と主軸をともにし、沢に対して直交している。

S D14 (第12・27・41図、図版4・8)

LT・MA36、MA・MB37、MB・MC38グリッドに位置する。長さ(北西~南東)17.54m×幅(北東~南西)0.92~1.10mで、確認面からの深さは0.53mである。埋土は3層に分かれ、自然堆積と考えられ、1層はⅡ層に由来する黒褐色土、2層は地山ブロックを少量含んだオリーブ褐色土、3層はⅢ層に由来する炭化物を少量含んだ黄灰色土である。遺物は、土師器(壺・甌)・須恵器(壺(1))、須恵器系陶器(壺)、羽口(159)などが出土した。削平のために切合については確認できなかったが、主軸をともにするSD60や直交したと思われるSD24~26と関連した遺構の可能性が高い。

S D24 (第13・27図、図版2・4)

MB・MC40、MC・MD39グリッドに位置する。長さ(北東~南西)9.2m×幅(北西~南東)0.26~2.9mで、確認面からの深さは0.36mである。埋土は4層に分かれ、自然堆積と考えられる。1・2層は黒褐色土で、3層は地山ブロックの混入状況から分層した。4層はⅢ層に由来する黄灰色土で、炭化物は自然科学分析の結果15世紀の数値が得られている。4層はⅢ層に由来する黄灰色土で、地山ブロックを少量含む。遺物は、3・4層の境目で出土した須恵器系陶器(壺(2))等の中世陶器・鍛冶津のほか、土師器・須恵器、石器の剥片等が出土した。隣接する溝跡との関係は、SD25は当遺構から分岐したと考えられる。SD26は、SD25を切っていることや埋土が当遺構の3層・SD25の1層と同質であることから、同時期の遺構と考えられる。SD71は、当遺構に切られている。SD114・115との関係は搅乱のため不明である。これらのうち、当遺構のみ底面付近で礫が出土した。これらの遺構は南端が搅乱を受けていること、調査区外まで延びていることから全長は不明である。

S D25 (第13図)

MC39・40グリッドに位置する。長さ(北東~南西)3.5m×幅(北西~南東)0.33~0.46mで、確

認面からの深さは0.3mである。S D24から東側に分岐し、再び合流する。埋土は2層に分かれ、自然堆積と考えられる。1層はS D24の3層と同質の暗灰色土、2層はオリーブ褐色土である。遺物は土師器・須恵器が出土した。

S D26（第13図）

M B・M C 40、M C 39グリッドに位置する。長さ（北東－南西）6.0m×幅（北西－南東）0.32～0.52mで、確認面からの深さは0.17mである。V層精査中にS D24と平行する溝状のプランを確認した。埋土はS D24の3層と同質の暗灰色土の単一層である。遺物は土師器が出土した。

S D37（第13・27図、図版4）

M C・M D 56グリッドに位置する。長さ（北西－南東）3.7m×幅（北東－南西）0.22～0.41mで、確認面からの深さは0.12～0.16mで、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は炭化物を含んだ黒色土の単一層で、炭化物は自然科学分析の結果9～10世紀の数値が得られている。遺物は土師器（壺（3））が出土した。S K 109に切られれていることと合わせて古代に帰属すると判断した。隣接するS Bと主軸をともにする。

S D60（第13図）

M D39・40、M E 40グリッドに位置する。長さ（北西－南東）4.8m×幅（北東－南西）0.34～0.51mで、確認面からの深さは0.09mである。埋土はⅢ層に由来する黄灰色土の単一層である。遺物は土師器（壺）と須恵器（壺・甕）が出土した。削平のため掘り込みは浅く、北西側は失われているが、S D07と主軸をともにする。

S D71（第13図）

M C 40、MD 39・40グリッドに位置する。長さ（北東－南西）4.58m×幅（北西－南東）0.17～0.66mで、確認面からの深さは0.06mである。埋土はⅢ層に由来する黄灰色土の単一層で、S D24に切られている。遺物は土師器が1点出土した。

S D90（第14・30・41図、図版4・8）

MA 55・56、MB 54～56グリッドに位置する。長さ（東－南）8.8m×幅0.3～0.9mで、確認面からの深さは0.1～0.22mで、湾曲しつつ南側にいくほど深くなる。埋土は3カ所で観察を行い、1層である黄灰色土を主として4層に分かれた。SP.A-Bでは自然堆積の単一層、SP.C-DではP 1の埋土と考えられる2・3層を1層が切っている。SP.E-Fでは両側が崩れたように2・4層が1層を挟んで堆積している。遺物は、主に土師器が出土したほか、須恵系陶器（擂鉢（45）・羽口（160）や鍛冶滓も少量出土した。また、底面から径3～15cmの礫が多数出土し、当遺構を切っているS D116等と類似する傾向を示すことから、S D168と共にS D116と一連の遺構であった可能性が高い。須恵系陶器（擂鉢）はS D430で出土したものと同一個体である。

S D114（第13図）

M C 39グリッドに位置する。S D115と合流するまでの長さ（北東－南西）0.90m×幅（北西－南東）1.03mで、確認面からの深さは0.13mである。埋土はⅢ層に由来する黄灰色土の単一層である。遺物は出土しなかった。搅乱のためS D24～26・71との関係は不明である。

S D115（第13図）

M C 39グリッドに位置する。S D114と合流するまでの長さ（北東－南西）0.90m×幅（北西－南

東) 0.22~0.3mで、確認面からの深さは0.13mである。埋土は、Ⅲ層に由来する黄灰色土の単一層である。遺物は出土しなかった。攪乱のため S D24~26・71との関係は不明である。

S D116 (第14・27・37・41図、巻頭図版2、図版2・4・8・9)

L S 53・54、L T 54・55、MA 55・56グリッドに位置する。遺構内に7基のピットがあり、その全てを切っていることから関連したものである可能性が高い。長さ(北西-南東) 18.0m×幅(南西-北東) 0.72~1.77mで、確認面からの深さは0.2~0.4mである。壁はやや急に立ち上がる。埋土は7層に分かれ、このうち6層はピットの埋土である。黄灰色土を主として澄・オリーブ灰色土等の地山ブロックと炭化物が多く混じり合って堆積していた。遺物は磨製石斧(143)、土師器(皿(4))・須恵器(壺(5))、かわらけ(6~8)・須恵系陶器(壺(9))・広東系の白磁(碗(10))・同安窯の青磁(碗(11))をはじめとする中世陶磁器のほか、鍛冶関連の遺物(161~168)がS D430に次いで多く出土した。また、遺構の中央~底部にかけて礫が多く出土した。

S D138 (第15図)

L S・L R 40、L Q 40・41、L R 41グリッドに位置する。長さ(北東-南西) 8.0m×幅(北西-南東) 0.6~1.1mで、確認面からの深さは0.34mである。当初は南西部部分が斜面上に確認されたことから、窯跡の可能性も考えたが、確たる痕跡は確認できなかった。埋土は4層に分かれ、基本的に4層(黄灰色土)と7層(黒褐色土)で構成され、5・6層はSK 196に切られる付近にのみ堆積している。遺物は、土師器(壺・甕)・須恵器3片のみの出土だが、7層から検出した炭化物は自然科学分析の結果13世紀の数値が得られている。

S D168 (第15・27図、図版2・4)

L T・MA 54グリッドに位置する。長さ(西-東) 4.0m×幅(北-南) 0.3~0.82mで、確認面からの深さは0.18mで、壁は緩やかに立ち上がる。遺構内に3基のピットを含み、そのうちP 2からは礫が多数出土した。埋土は、Ⅲ層に由来する黄灰色土で、P 1の部分で地山ブロックの混入状況から2層に分かれる。遺物は、土師器(壺)・須恵器(壺(12))が出土した。南西方向側が攪乱によって失われているが、北側に湾曲した流れであった場合、S D90と同一の施設であった可能性が高い。

S D214 (第16図)

L Q 36~38グリッドに位置する。長さ(北-南) 7.8m×幅(東-西) 0.73~1.62mで北から5.4mの地点で分岐し、南端は暗渠によって失われている。確認面からの深さは0.06~0.14mである。埋土はⅢ層に由来する黄灰色土の単一層である。底面付近で礫が出土した。遺跡の溝跡の大部分が北東-南西の方向性をもつかで、当遺構と隣接するS D382のみは南-北の方向性をもつ。

S D216 (第22・27・37図、巻頭図版2、図版4・8)

L N・L O 35、L N・L O 36グリッドに位置する。SK I 215から続く長さ(北西-南東)が6.3m×幅(北東-南西) 0.86~2.23mで、確認面からの深さは0.35mである。埋土はSK I 215と同質の黒褐色土の単一層である。遺物は石匙(141)、土師器・須恵器(壺(13))、龍泉窯の青磁(碗(14))が出土した。SK I 215との境界が不明瞭で、埋土の状況等からも一連の遺構であった可能性が高い。

S D218 (第22図)

L N 36・37グリッドに位置する。南側の大部分がSK 217によって切られている。SK I 215から続く長さ(北西-南東) 4.4m×幅(北東-南西) 1.47~1.70mで、確認面からの深さは0.17mである。

埋土はSK I 215と同質の黒褐色土の單一層である。遺物の出土はないが、埋土・形態からSD 216と同じ性格のものであると考えられる。

SD 220 (第16・27・37・41・42図、巻頭図版2、図版4・8・9)

L R52・53、L S51・52、L T50・51グリッドに位置する。北側にSD 116があるが搅乱のため新旧関係については不明である。また、SD 430を切っているが出土遺物の傾向からほぼ同時期の遺構であると考えられる。長さ(北東-南西)20.0m×幅(北西-南東)0.7~1.08mで、確認面からの深さは0.15~0.4mで、一部がLR 52で北側に細く分岐する。埋土は黒褐色土と黄灰色土を主体に炭化物・地山ブロックの混入から4層に分かれ。遺物は二次加工のある剥片(142)、龍泉窯の青磁(碗(16))、須恵系陶器(擂鉢)、鍛冶津(169・170)・羽口(171)等の中世遺物のほか、土師器(壺(15))・須恵器が出土した。底面付近からは礫が多数出土し、SD 116等と類似した傾向をもつ。

SD 230 (第17図)

LS・LR 44、LR 45グリッドに位置する。長さ(北東-南西)6.3m×幅(北西-南東)0.28~0.5mで、確認面からの深さは0.14mである。北東から3.5mの地点で一度分岐し、5.5mの地点で再び合流する不規則な形状をもち、南西端は暗渠によって失われている。埋土はⅢ層に由来する黄灰色土の單一層である。遺物は、土師器(壺・甕)が中心で、羽口1点が出土しているが埋土の上層である。

SD 327 (第17図)

ME 55・56グリッドに位置する。5基のピットと切合が関連性は不明である。長さ(北西-南東)3.08m×幅(北東-南西)0.16~0.5mで、確認面からの深さは0.16mである。埋土は黄灰色土の單一層である。遺物は土師器・須恵器(壺)が出土した。

SD 330 (第17・42図、図版9)

MA・MB 53グリッドに位置する。長さ(北西-南西)4.3m×幅(北東-南西)0.26~0.46m、確認面からの深さは0.2mで、底部は平らで、壁は緩やかに立ち上がる。埋土はⅢ層に由来する黄灰色の粘質土の單一層である。遺物は鍛冶津(172)・羽口(173)が出土した。南北両端は、後世の削平のため失われており、周辺の溝跡との関連は不明である。

SD 382 (第17図)

LP 37・38グリッドに位置する。長さ(北-南)5.72m×幅(東-西)0.2~0.52mで、確認面からの深さは0.13mで、北1.2~2.3mにかけて搅乱されている。埋土は2層に分かれ、自然堆積と考えられる。1層は黒褐色土、2層は地山ブロックを含んだⅢ層に由来する黄灰色土である。遺物は出土しなかったが、周囲からは土師器が出土している。遺跡の溝跡の大部分が北東-南西の方向性をもつ中で、SD 214とともに異なる方向性をもつ。

SD 400 (第18・42図、図版9)

MC 52・53、MD 52グリッドに位置する。長さ(北東-南西)9.4m×幅(北西-南東)0.4~1.0m、確認面からの深さは0.2mで、南西方向に向かって幅が狭まっていく。埋土は黄灰色土と黒褐色土が交じり合った單一層である。遺物は鍛冶津(174~177)が出土し、底面からは約10~20cmの礫が多く出土した。

SD 401 (第18・27・28・42・43図、図版4・9)

MB 52、MC 51・52グリッドに位置する。SD 425に切られている。長さ(西-東)6.6m×幅(南-

北) ~1.4m、確認面からの深さは0.44~0.73mで、緩くS字状に湾曲し、底面は平らで、壁はやや急に立ち上がる。埋土は3層に分かれ、1層は黄灰色土と灰黄色土が混ざり合ったもの、2層は黄灰色土で十和田a火山灰を含む、3層は黒褐色土である。遺物は土師器、常滑焼(大甕(17・18))・須恵系陶器(擂鉢(19~22)・壺(24))・鍛冶津(178~182)のほか、土鐘(23)が1点出土した。

S D414 (第19図)

L T42・43、MA41グリッドに位置する。長さ(北東ー南西)9.5m×幅(北西ー南東)0.38~0.98m、確認面からの深さは0.23mで、北約1.0mから蛇行している。埋土はⅢ層に由来する黄灰色土の単一層である。遺物は中世陶器1点と鍛冶津等の中世遺物のほか、土師器(壺・皿)・須恵器が出土した。また、礫も疎らに出土した。

S D416 (第19図)

M E44・45グリッドに位置する。長さ(北東ー南西)4.8m×幅(北西ー南東)0.49~0.7mで、確認面からの深さは0.12mである。埋土はⅢ層に由来する黄灰色土の単一層で、遺物は土師器が出土した。南西側で検出されたS D488と同一の施設である可能性が高い。

S D425 (第20・28・43図、巻頭図版2、図版4・9)

MA49・50、MB50~52、MC51・52グリッドに位置する。SD400に切られ、SD401・430を切っている。特にSD430は、溝の状態や出土遺物から関連深い施設と考えられる。長さ(北西ー南東)16.0m×幅(北東ー南西)0.64~0.8mで、確認面からの深さは0.12mである。埋土は黒色土の単一層である。遺物はかわらけ・常滑焼(大甕(25))・須恵系陶器(擂鉢(26・27))・龍泉窯の青磁(碗(28・29))・鍛冶津(183~186)・羽口(187・188)・被熱石(189・190)等が出土した。

S D430 (第20・28~31・37・38・44~48図、巻頭図版2・3、図版1・4~6・8~10)

L T50・51、MA49~51、MB49・50、MC48・49グリッドに位置する。SD220・425に切られ、SD508を切っている。長さ(北東ー南西)16.0m×幅(北西ー南東)0.64~1.2mで、確認面からの深さは0.3~0.35mである。埋土は黄灰色土を主として次のように観察された。SP.A-Bでは、1層は黄灰色土と灰黄色土が混ざり合った堆積、2層は地山ブロックを多く含んだ黄灰色土、3層は地山ブロックを僅かに含んだ黒褐色土で、SP.C-Dでは、黄灰色土と褐灰色土が混ざり合った単一層である。当構造は、今回の調査で最も遺物が出土した遺構で、須恵系陶器(擂鉢(34~46)・壺(57・58))・常滑焼(大甕(47~55))・渥美焼(大甕(56))・龍泉窯の青磁(碗(59~61))、炉壁(191・192・216・217)・羽口(218~225)・鍛冶津(193~215)・被熱石(226)等の鍛冶関連遺物、硯(149)・宋銭4点(元豊通宝(155・156)・皇宋通宝(157・158))等の中世遺物が多く出土したほか、磨製石斧(144)、土師器・須恵器(壺(30)・甕(31~33))も出土している。擂鉢は多様な個体が出土したがこのうちの3個体については、SD90・SD498・SK450から出土したものと、常滑焼(大甕)もSD498から出土したものと、それぞれ同一個体であることが分かった。また、これらの遺物とともに大量の礫が底面付近から検出されている。隣接する溝跡のうち、SD425は溝の状態や出土遺物から関連深い施設と考えられる。多くの溝跡は一連の施設であった可能性が高く、当構造は、規模・遺物の出土状態から中心的なものと考えられる。また、SS461と隣接しており、大量の鍛冶関連遺物の出土を裏付けている。

S D 488 (第19図)

ME 42・43グリッドに位置する。調査区内の長さ(北東-南西)4.85m×幅(北西-南東)0.43~1.07mで、確認面からの深さは0.1mである。埋土はⅢ層に由来する黄灰色土の單一層で、遺物は土師器(壺)が出土した。南西側で検出されたSD 416と同一の施設である可能性が高い。

S D 498 (第20・31・48図、図版6・9)

MD 47・48、ME 48~50グリッドに位置する。長さ(南東-北西)5.0m×幅(北東-南西)0.32~0.48mで、確認面からの深さは0.08mである。北側でSD 508と合流し、南側は調査区外まで延びる。埋土は黄灰色土の單一層である。遺物は土師器・須恵器(壺(62))、須恵系陶器(擂鉢(63)・甕(64・65))・常滑焼(大甕)、鍛冶津(227・228)・羽口が出土した。須恵系陶器の擂鉢と常滑焼の大甕は、SD 430で出土したものと同一個体である。

S D 508 (第20図)

MC 49、MD 49・50、ME 49・50、MF 49グリッドに位置する。SD 430に切られ、SD 498と合流する。長さ(南東-北西、北東-南西)10.4m×幅0.12~0.8m、確認面からの最深部は0.26mで、南東から4.6mの地点で大きく湾曲する。埋土は黄灰色土の單一層である。遺物は出土しなかった。

4 井戸跡

S E 28 (第21・48図、図版9)

LT 57グリッドに位置する。長軸1.5m×短軸1.4mの不整円形で、確認面からの深さは約1.0mである。壁はほぼ垂直に立ちあがる。埋土は6層に分かれ、1・3~5層は炭化物を少量含んだ黄灰色土を主とし暗黄灰色土・暗オリーブ灰色土・褐色土が混入する。2層は黄灰色土を少量含んだ黒色土、6層は大粒の炭化物を少量含んだオリーブ灰色土である。6層の炭化物は自然科学分析の結果10~11世紀の数値が得られた。遺物は深さ0.1~0.3mで木製品、同0.3~0.7mで土師器が多く出土した。また、径10~40cmの礫が全体から多く出土したが、特に5層では径30cm以上のものが多い。鍛冶津(229・230)も出土したが上層であり、流れ込みと考えられる。当遺構を囲む形で検出されたSB 514は、自然科学分析の結果からも、関連する遺構の可能性が高い。

5 積穴状遺構

S K I 215 (第22・37図、図版3・8)

LN 37、LO 36~38、LP 37グリッドに位置する。長軸(北東-南西)約5.0m×短軸(北西-南東)約4.0mの隅丸方形で、確認面からの深さは0.17mである。北側に約1.8×0.3mの張り出した部分をもつ。積穴住居跡を想定した調査を行ったが、カマド・壁溝などが検出されなかったことなどから積穴状遺構とした。埋土は黒褐色土の單一層である。また、十和田a火山灰が含まれていることが、自然科学分析の結果から分っており、堆積状況や遺物の出土状況から二次堆積したものと考えられる。遺物は土師器(壺)・須恵器(長頸瓶・甕)、石鐵(140)1点・剥片数点が出土した。SD 216・218との境界は不明瞭であり、埋土がほぼ同一であることから一連の施設であった可能性が極めて高い。また、18基の柱穴様ピットが床面で検出された。このうちSK P 287が当遺構と同じ黒褐色の埋土であるほかは、当遺構を切っているSK 217と同質の黄灰色土であるが、当遺構が切っている。このことからこれらの遺構には、3段階の時期差が想定される。

6 土坑

S K44 (第23・31図、巻頭図版2、図版6)

L T40・41、MA40・41グリッドに位置する。S D07とは、一連の施設であることも想定したが、出土遺物・埋土の堆積状況から同遺構を切っていると判断した。径2.1~2.7mの不整円形で、確認面からの深さは0.33mである。プランの形状・規模から堅穴住居跡を想定した調査を行ったが、掘形が擂鉢状の形状であったため土坑とした。埋土は11層に分かれ、自然堆積と考えられる。このうち3・5層はII層、6層はIII層に由来すると考えられる。また、4層はシルト質の黒色土で、砂を多く含んでいる。遺物は須恵系陶器（擂鉢（66）・龍泉窯の青磁（皿（67）・碗（68））のほか土師器・須恵器や礫が出土した。当遺構の青磁は、当遺跡で出土した青磁のうち最も新しい時期のものである。

S K70 (第23・32・49図、図版7・9)

M A56グリッドに位置する。S D116の北端部分を切っているが、埋土が同質土であることから、ほぼ同時期の遺構であると考えられる。長軸（南－北）0.6m×短軸（東－西）0.5mで、確認面からの深さは約0.4mである。埋土は3層に分かれ、自然堆積と考えられ、底面近くは粘性が強い。遺物は須恵系陶器（擂鉢（69）・鍛冶津（234）のほか土師器1点が出土した。

S K109 (第23図)

M D56グリッドに位置する。S D37を切り、S K P64・113に切られる。長軸（北西－南東）1.4m×短軸（南西－北東）1.14mの楕円形で、確認面からの深さは約0.25mである。南西側の壁は緩やかに立ち上がるが、北東側は垂直に近い。埋土は2層に分かれ、1層は黄灰色土に暗灰黄色土が混じり、2層は灰黄色土とオリーブ灰色土が混じり合い、ともに炭化物を含んでいる。遺物は土師器片1点が出土した。

S K196 (第15図)

L R40・41グリッドに位置する。S D138を切っている。長軸（南－北）1.8m×短軸（東－西）1.2mの楕円形で、確認面からの深さは0.5mである。埋土は3層に分かれ、1・3層はII層に由来する黒褐色土、2層は暗灰黄色土で、1層には炭化物が含まれている。遺物は鍛冶津が出土した。

S K217 (第22・32図、図版7)

L N35・36グリッドに位置する。S D216・218を切っている。長軸（北東－南西）2.5m×短軸（北西－南東）1.8mの不整円形で、確認面からの深さは0.7mである。埋土は5層に分かれ、3・4層はIII層に由来する黄灰色土、5層はIV層に由来するオリーブ黒色土で自然堆積と考えられる。遺物は3・4層から須恵器（环（70・71）・横瓶（72））が出土したほか、1・2層には径10cm以上の礫が多量に含まれていた。出土遺物・埋土の特徴から古代に帰属すると考えられるが、当遺構が切っているS D216からは、中世に帰属する青磁が出土している。

S K229 (第17図)

L R45グリッドに位置する。中世の羽口が出土したS D230を切っている。長軸（南－北）0.7m×短軸（東－西）0.6mの不整円形で、確認面からの深さは0.4mである。埋土は2層に分かれ、自然堆積と考えられる。1層はII層に由来する黒褐色土、2層は灰色土である。遺物は土師器のみの出土だが、埋土の特徴は中世の傾向を示している。

S K412 (第24図)

M A44グリッドに位置する。長軸（南—北）1.3m×短軸（東—西）1.15mの不整円形で、確認面からの深さは0.14mである。埋土はⅢ層に由来する黄灰色土の單一層である。遺物は須恵系陶器（擂鉢）・土師器が出土した。埋土は古代の特徴を示しているが、擂鉢の出土から中世に帰属する可能性もある。

S K450 (第24図)

L S・L T45グリッドに位置する。径約1.4mの円形で、確認面からの深さは0.67mである。埋土は4層に分かれ、1層はⅢ層、2・3層はⅡ層、4層はⅣ層にそれぞれ由来し、2～4層は自然堆積と考えられる。1層は地山ブロックの混入が他層に比べ多く人為堆積の可能性が高い。遺物は暗灰黄色土の2層から須恵系陶器（擂鉢）3点・鍛治滓が出土した。この他に土師器が出土している。埋土の特徴や擂鉢の出土から中世に帰属すると考えられる。須恵系陶器（擂鉢）は、S D430で出土したものと同一個体であった。

S K464 (第24・32図、図版7)

L S49グリッドに位置する。長軸（北西—南東）1.2m×短軸（南東—北西）0.98mの楕円形で、確認面からの深さは0.3～0.4mである。壁の立ち上がりは急で、底面は南西に向かって落ち込んでいる。埋土は3層に分かれ、1層はⅢ層に由来する黄灰色土、3層はⅡ層に由来する黒褐色土で、植物遺体を主とする2層が間に堆積する。遺物は常滑焼（大甕（73））・鍛治滓、土師器が出土した。埋土の特徴や出土遺物から中世に帰属すると考えられる。

S K465 (第24図)

L R49グリッドに位置する。長軸（南東—北西）1.96m×短軸（南西—北東）0.7mの楕円形で、確認面からの深さは0.09mである。壁は緩やかに立ち上がる。当初は周辺の溝跡の一部と考え調査を行ったが、形態から土坑と改めた。埋土は黄灰色土の單一層で、遺物は須恵器（壺）が出土した。埋土の特徴から古代に帰属すると思われるが、周辺には隣接するS K464をはじめ、中世のものと考えられる遺構・遺物が多いことから中世の可能性もある。

7 鍛冶炉

S S461 (第24・48図、図版3・9)

M B49グリッドに位置する。S K P462を切っている。径0.32mの円形で、確認面からの深さは0.07mである。壁は緩やかに立ち上がる。上部の大半が削平のために失われているが、埋土や周辺での遺物の出土状況から鍛冶炉と判断した。埋土は固くしまった明褐色の焼土が椀形状になり、その周りに黄灰色の埋土が堆積し、径約5mmの炭化物を含んでいる。S K P462からも炭化物が多く検出されたほか、径約20cmの礫が3点出土した。切り合いや礫の出土状況は、S S509と同様の傾向を示している。遺物は鍛治滓（231～233）が出土した。また、南側に隣接するS D430からは中世の陶磁器とともに大量の椀形鍛冶滓等が出土しており、当遺構に起因するものである可能性が極めて高い。また、鍛冶滓の分布状況から当遺構とS S509の他にも鍛冶炉があったと考えられるが、後世の削平のために失われた可能性が高い。

S S509 (第24図)

M B56グリッドに位置する。S K P21・40を切っている。径0.2mの円形で、確認面からの深さは

0.04mで断面は擂鉢状である。S S 461と同様に上部の大半が削平のために失われているが、埋土や周辺での遺物の出土状況から鍛冶炉と判断した。埋土は明褐色の砂状焼土の周りに黄灰色土が堆積し、炭化物を含んでいる。S K P 21・27からも炭化物が多く検出されたほか、径約30cmの礫が1点出土した。切り合いや礫の出土状況はS S 461と同様の傾向を示している。遺物は出土しなかったが、南西側で楕円形鍛冶溝等が多く出土している。

8 性格不明遺構

S X240 (第25・49図、図版9)

L P・L Q49グリッドに位置する。長軸(南東-北西)3.2m×短軸(南西-北東)2.4mの溝状で、確認面からの深さは0.48~0.66mである。埋土は3層に分かれ、3層は植物遺体を多く含み、ここで検出した炭化物は自然科学分析の結果、10~11世紀の数値が得られた。遺物は土器類(壺・甌)、鍛冶溝・羽口(236・237)が出土した。当遺構の北西には主軸をともにするS D116があり、関連した施設である可能性がある。

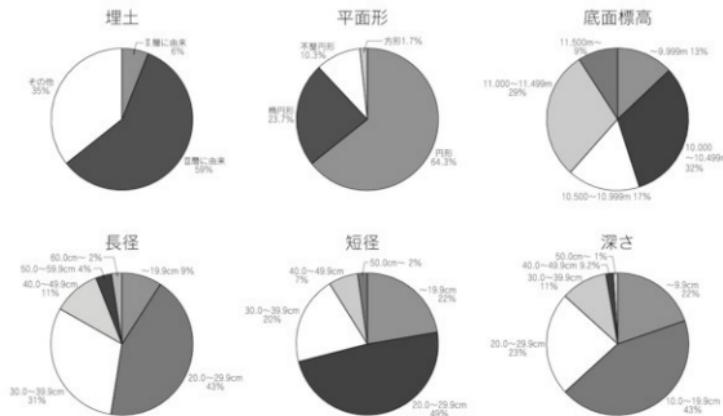
S X383 (第25・32図、図版7)

L O・L P34グリッドに位置する。長軸(東-西)3.3m×短軸(南-北)2.2mのかなり歪な不整形で、確認面からの深さは0.35mだが、底面は凹凸があり一定ではない。埋土は2層に分かれ、1層は黒色土、2層は暗灰黄色土で、礫の出土比率は1層が高い。遺物は石器、土器類・須恵器(壺)、須恵器系陶器(擂鉢(74))が出土した。

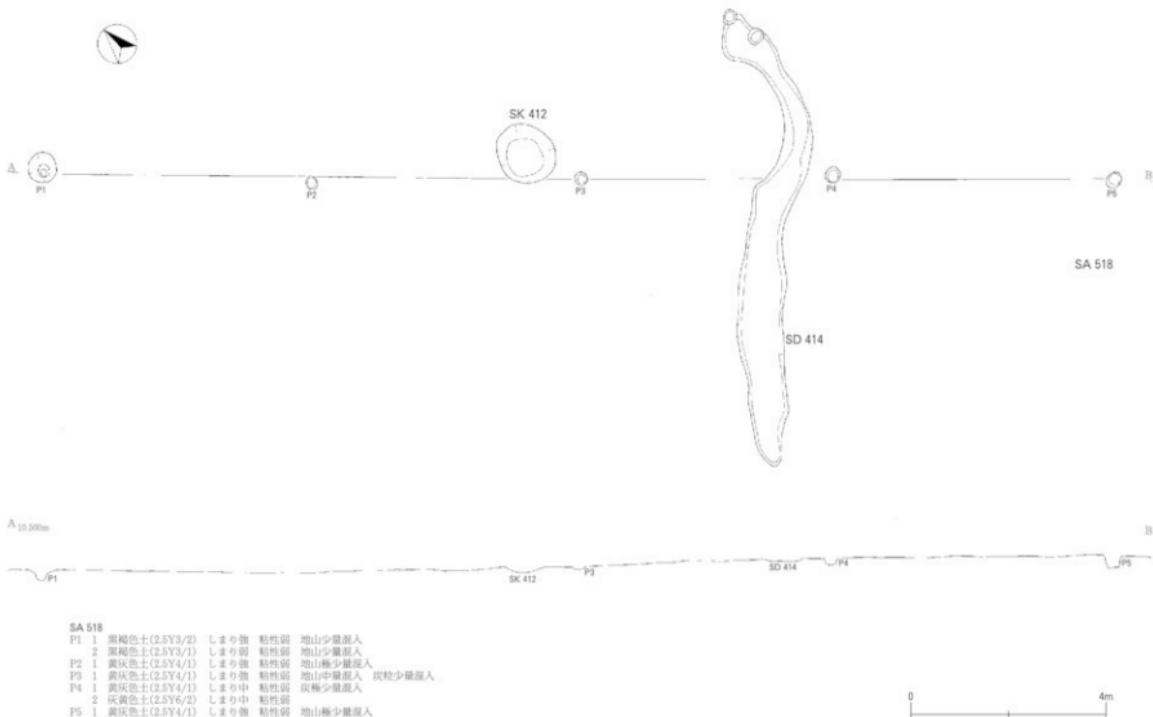
9 柱穴様ピット (第26図、図版3)

柱穴様ピットは、417基が検出された。多くは調査区の南端・北端の沢岸にあたる地域で検出された。調査区中央部の遺構は、後世の耕作等のため失われた可能性が高い。

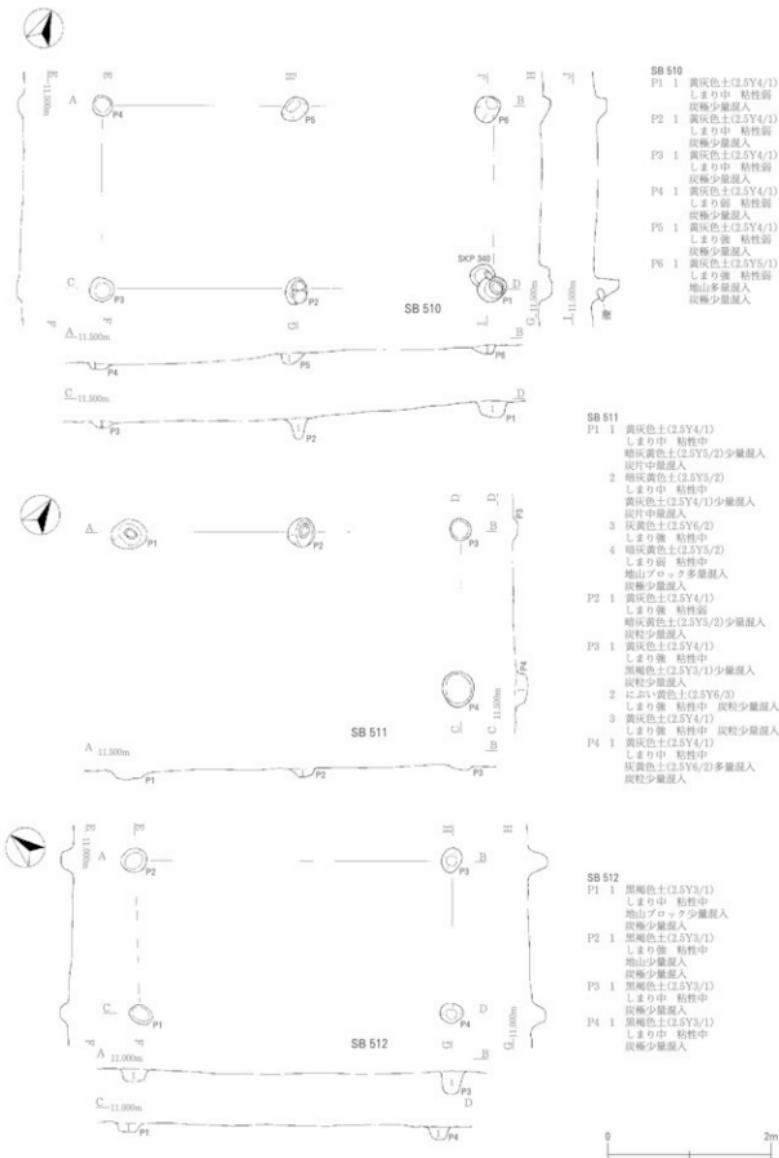
以下が、その構成を示すグラフである。



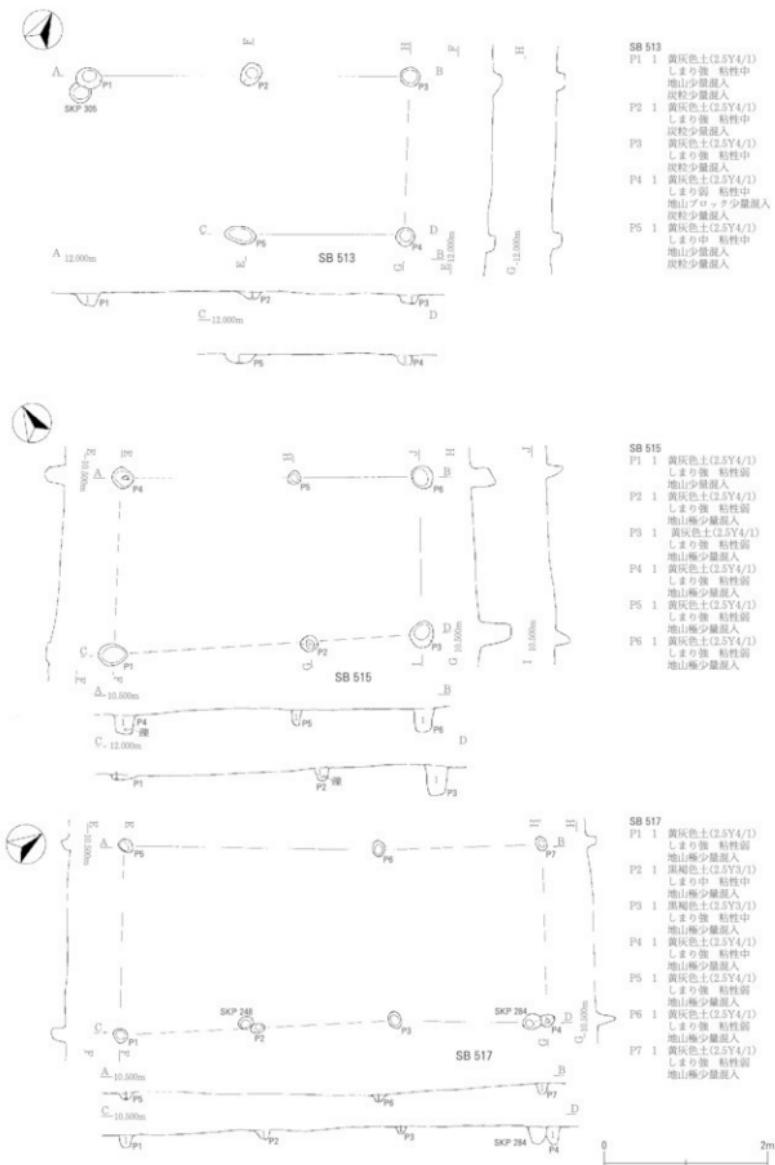
第8図 SKP構成グラフ



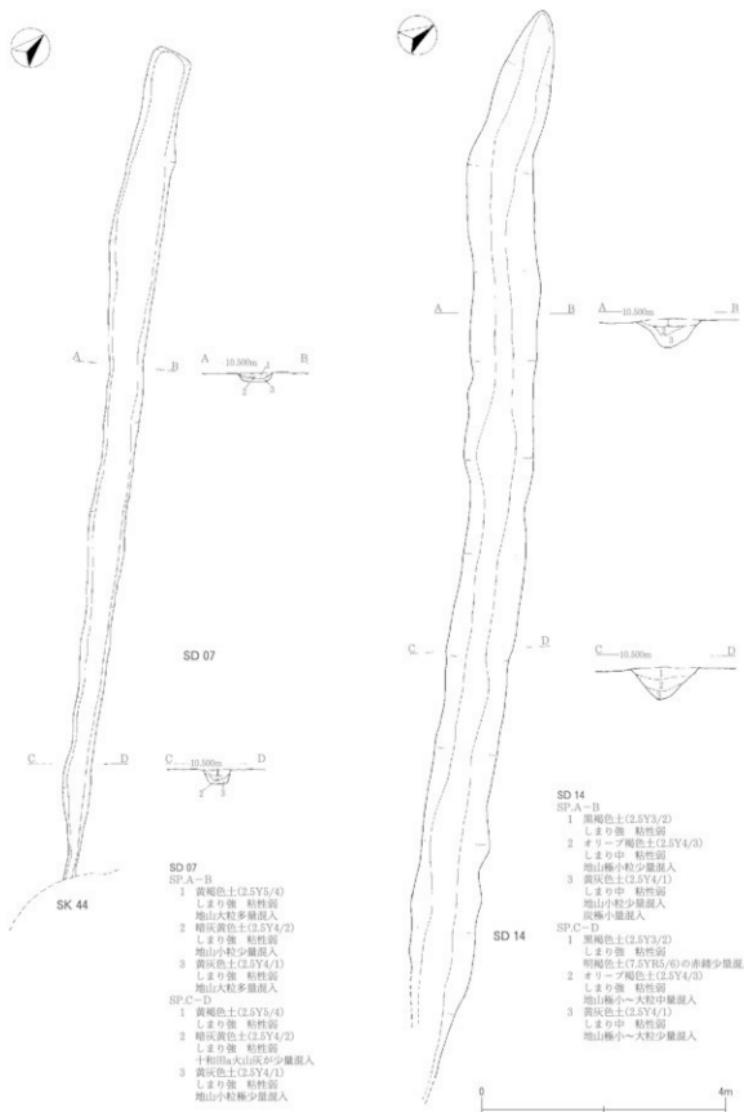
第9図 柱穴列



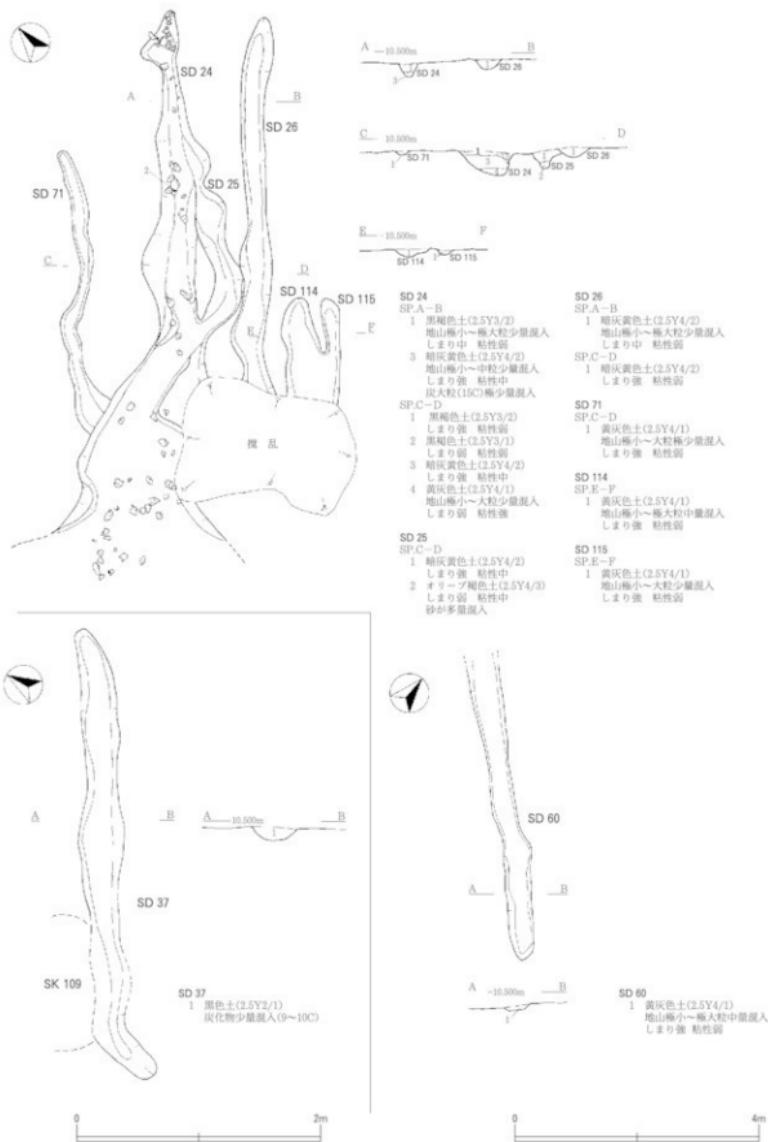
第10図 掘立柱建物跡(1)



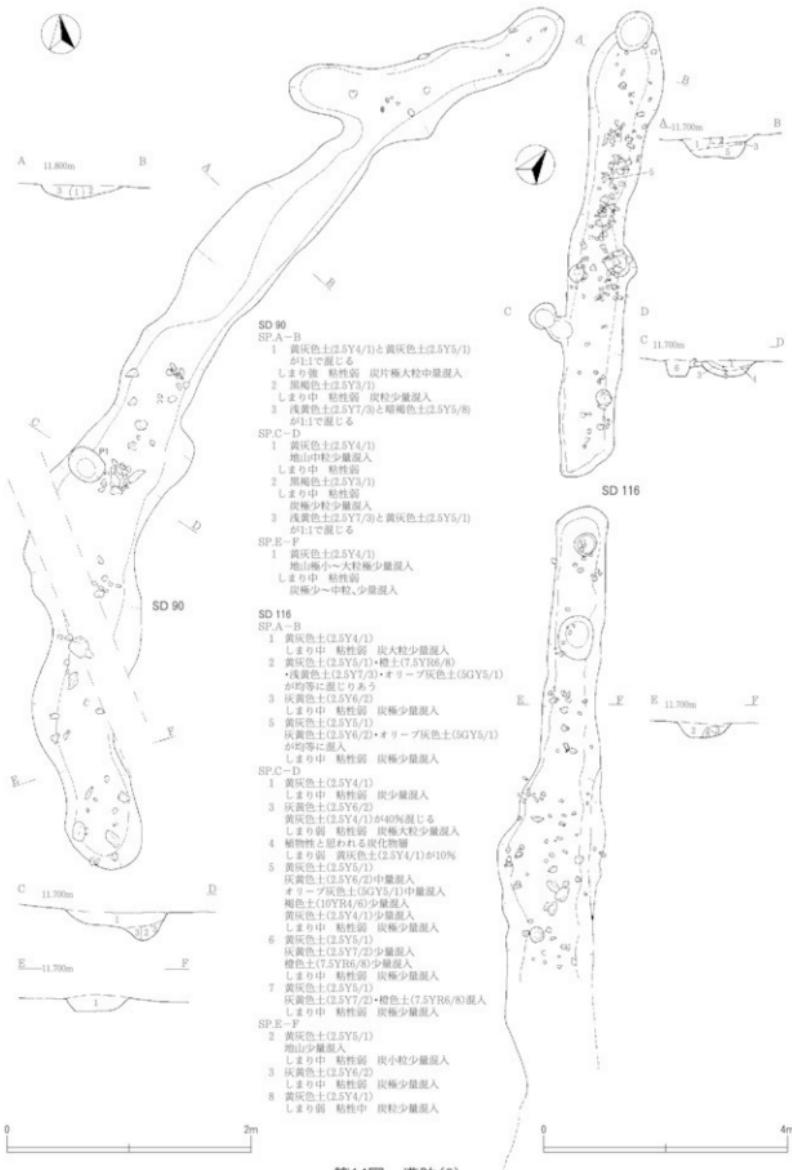
第11図 掘立柱建物跡(2)



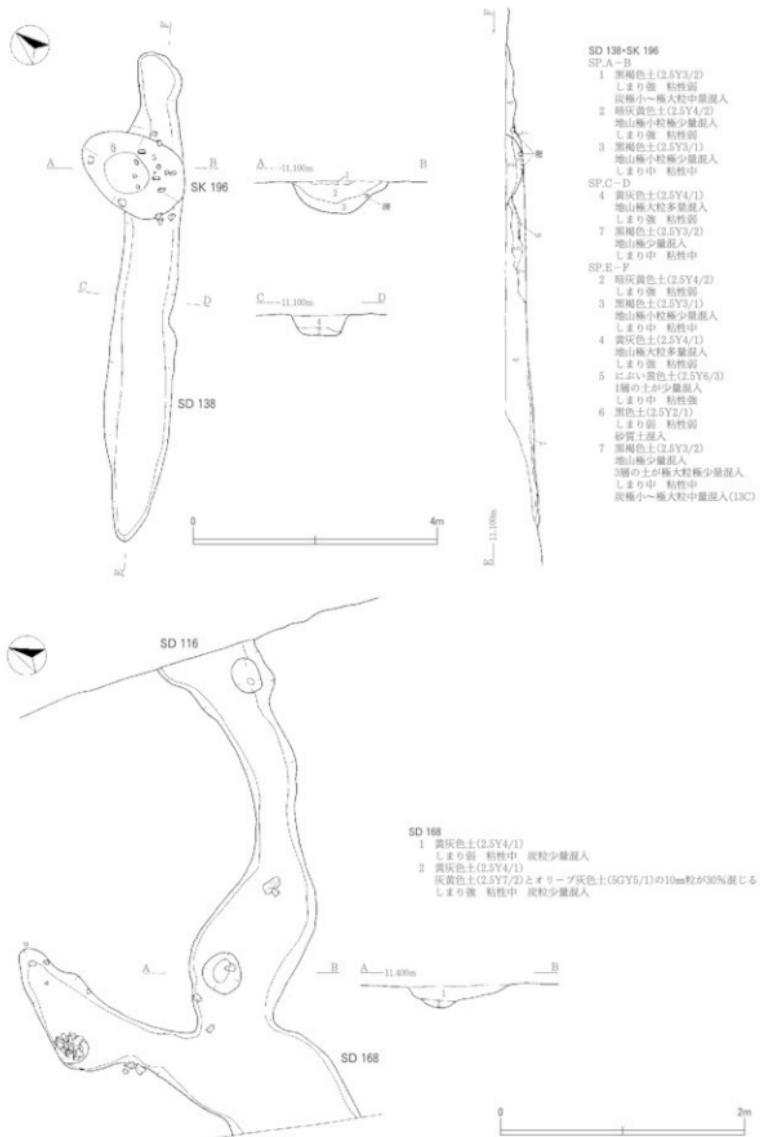
第12図 溝跡(1)



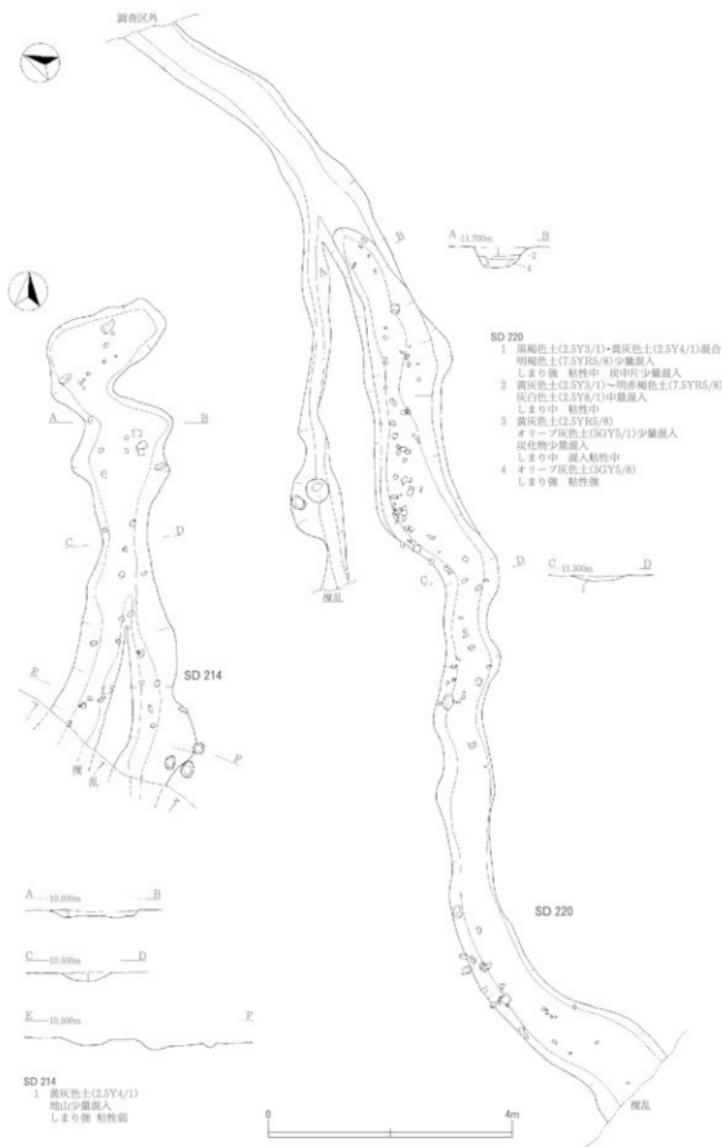
第13図 溝跡(2)



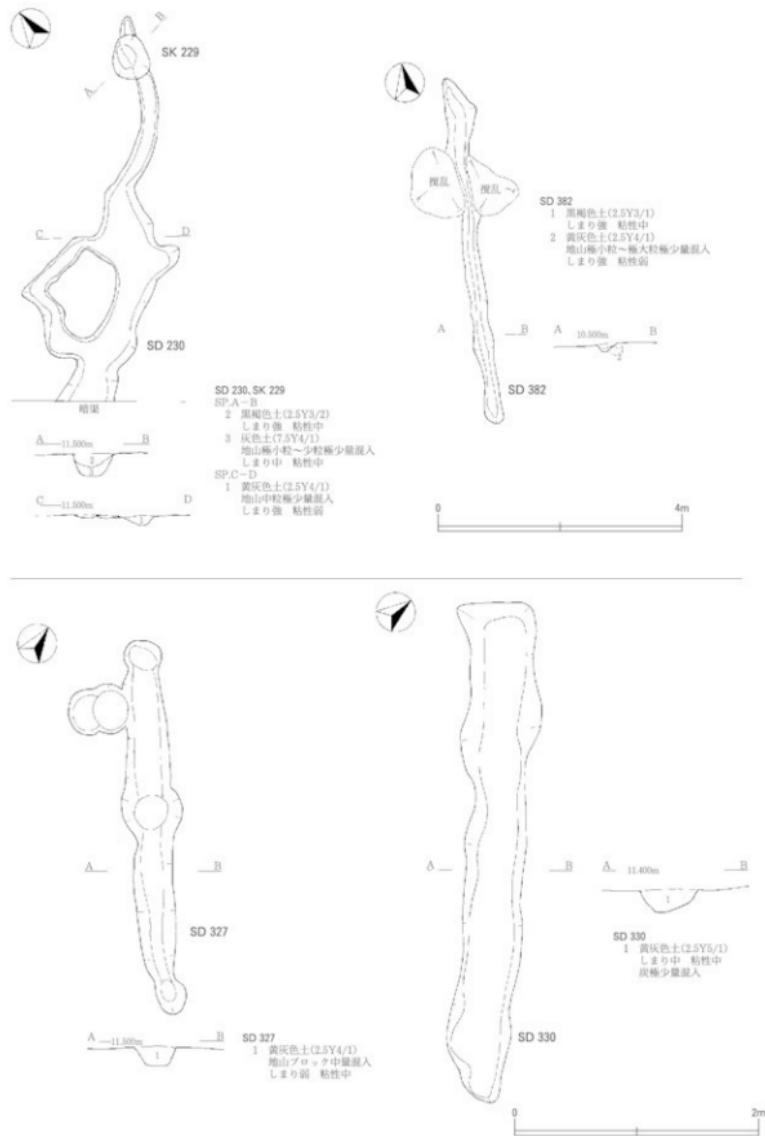
第14図 溝跡(3)



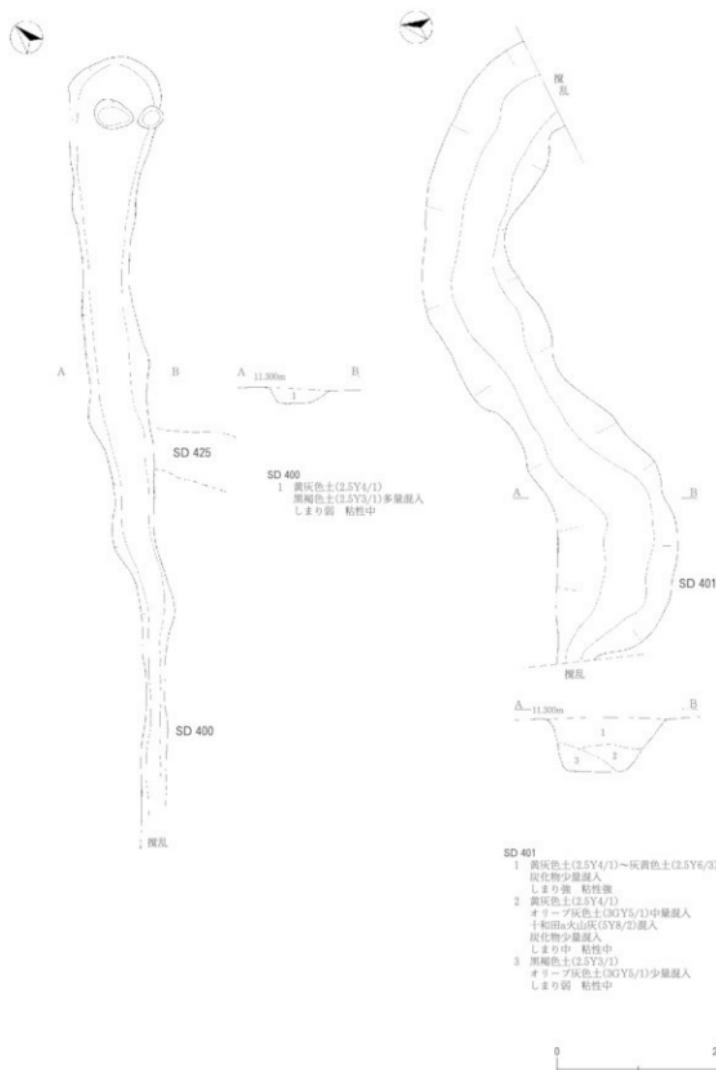
第15図 溝跡(4)・土坑(1)



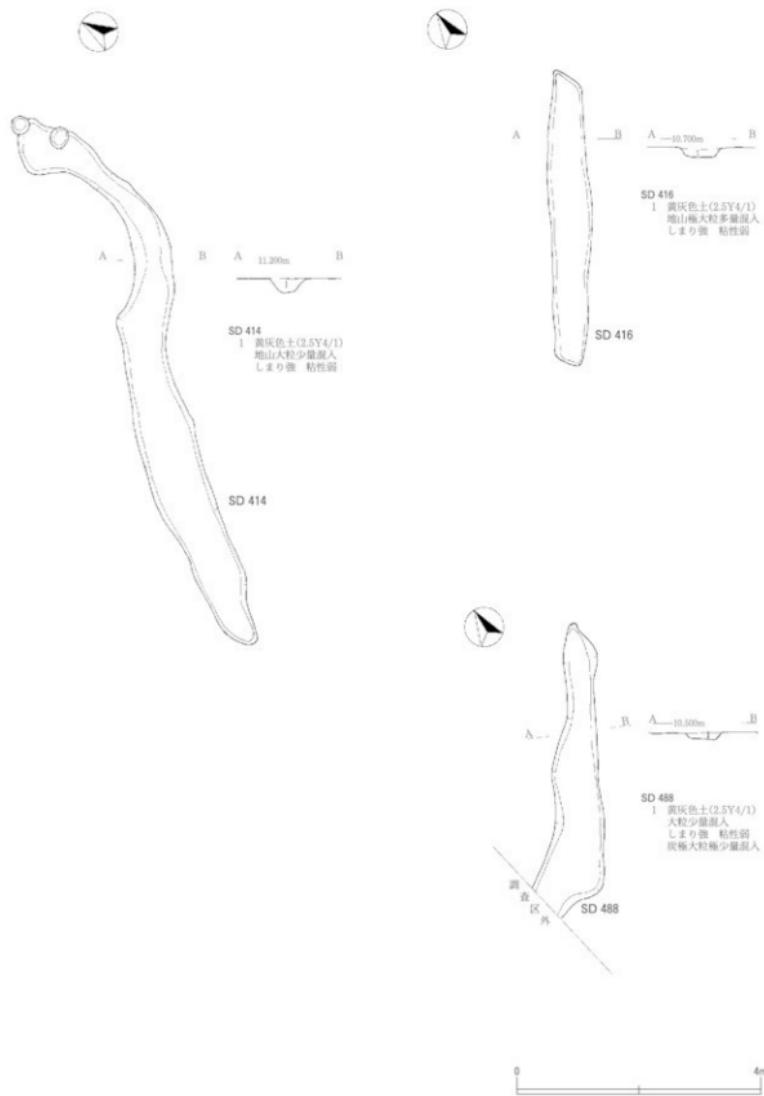
第16図 溝跡(5)



第17図 溝跡(6)・土坑(2)



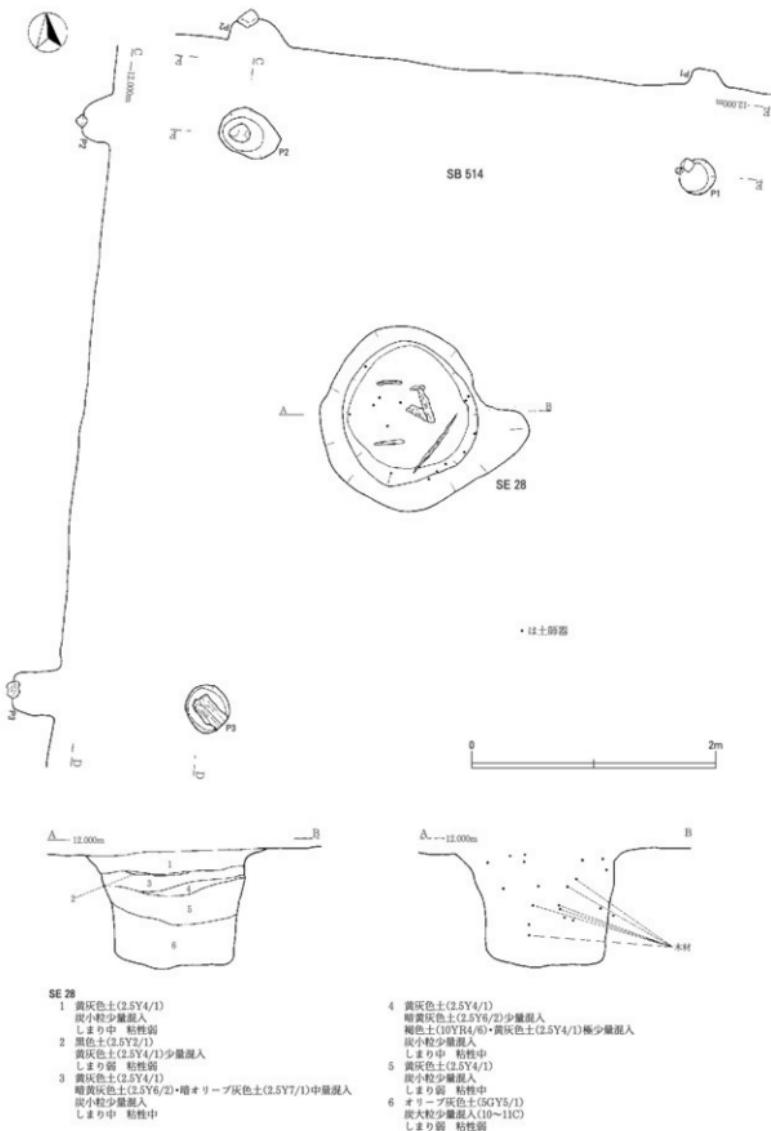
第18図 溝跡(7)



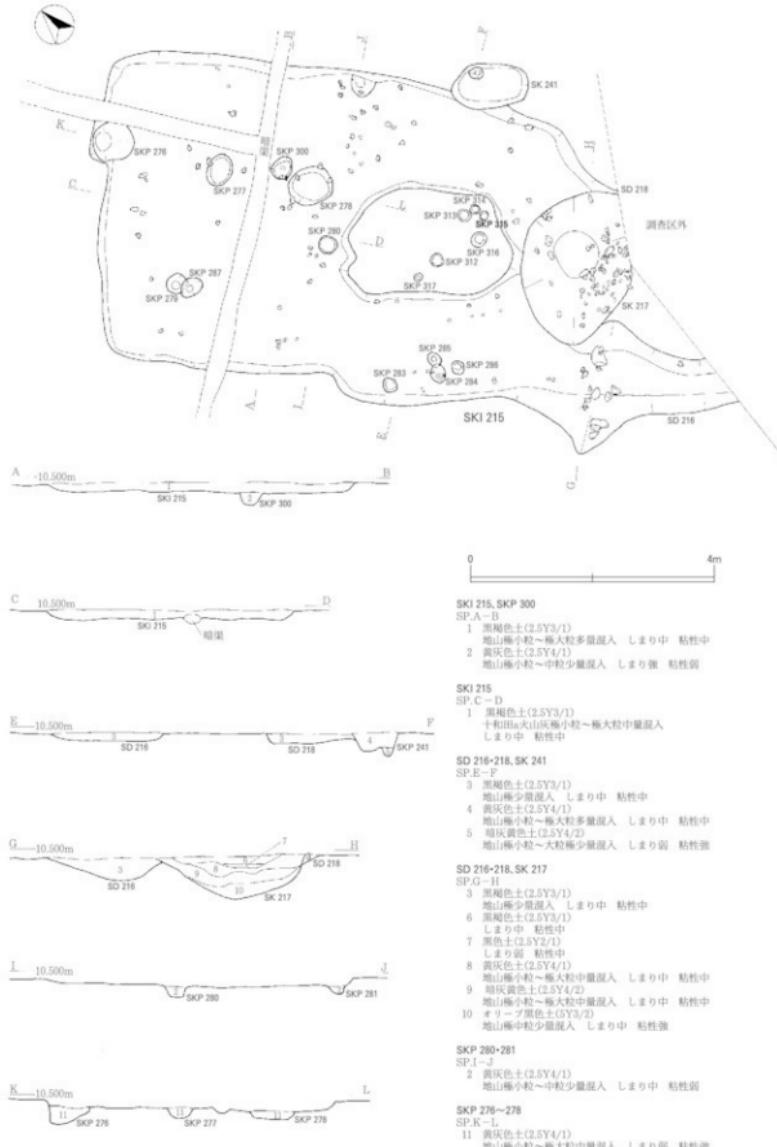
第19図 溝跡(8)



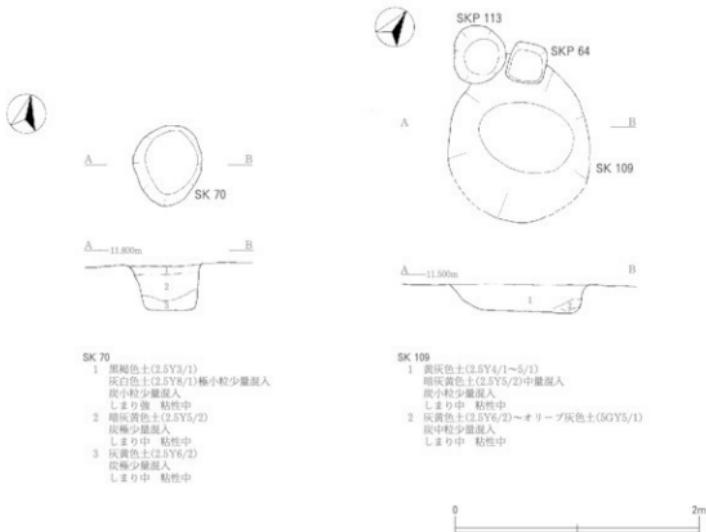
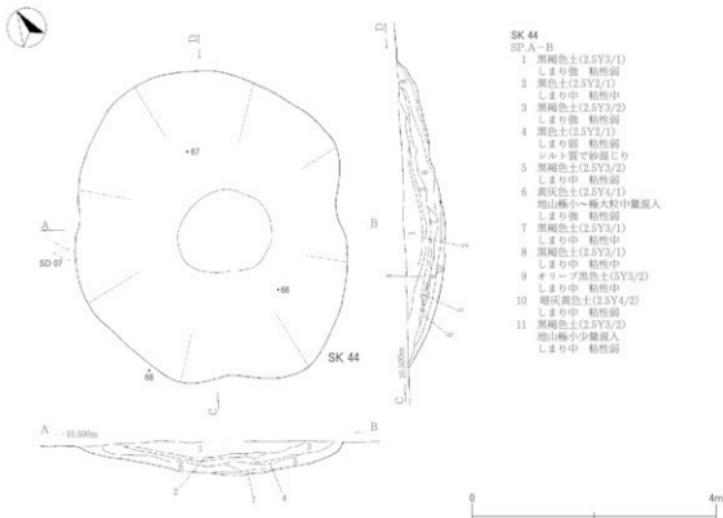
第20図 溝跡(9)



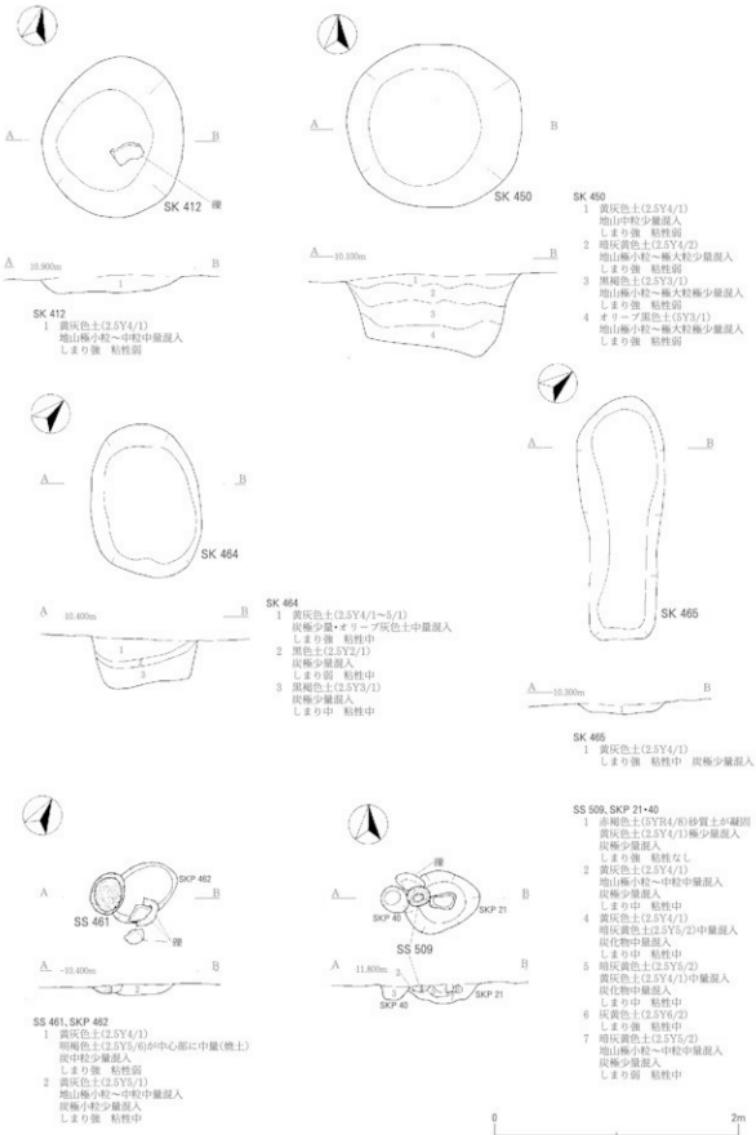
第21図 掘立柱建物跡(3)・井戸跡



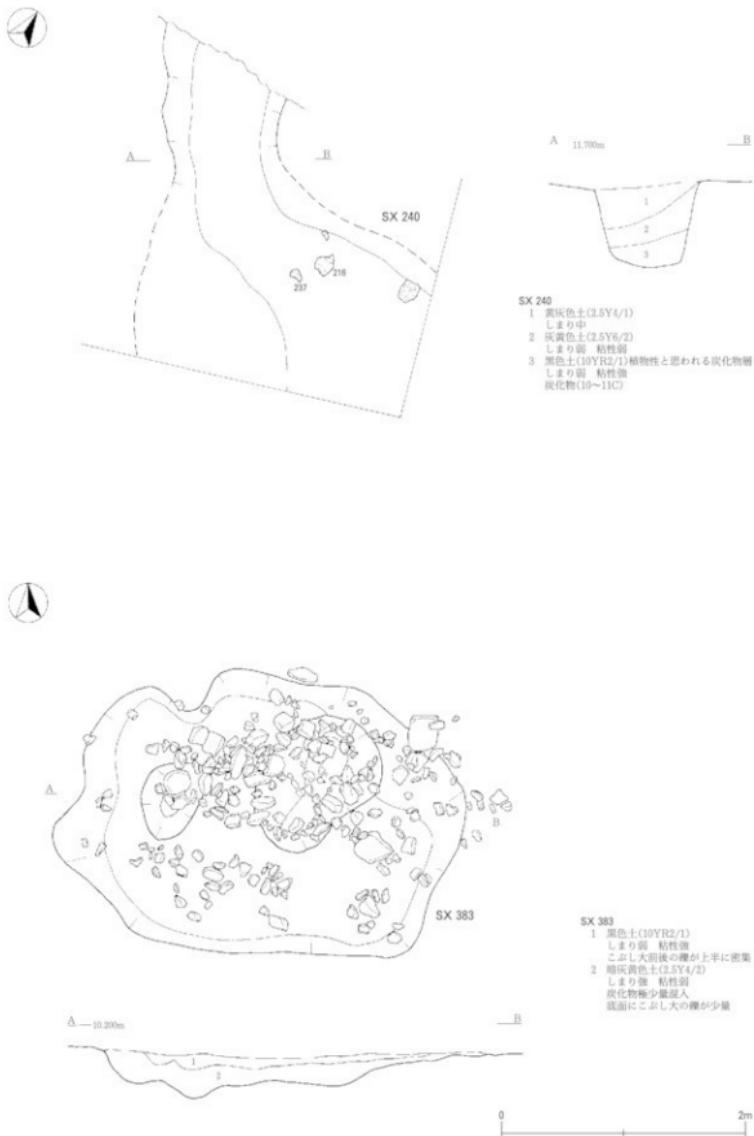
第22図 穴状遺構



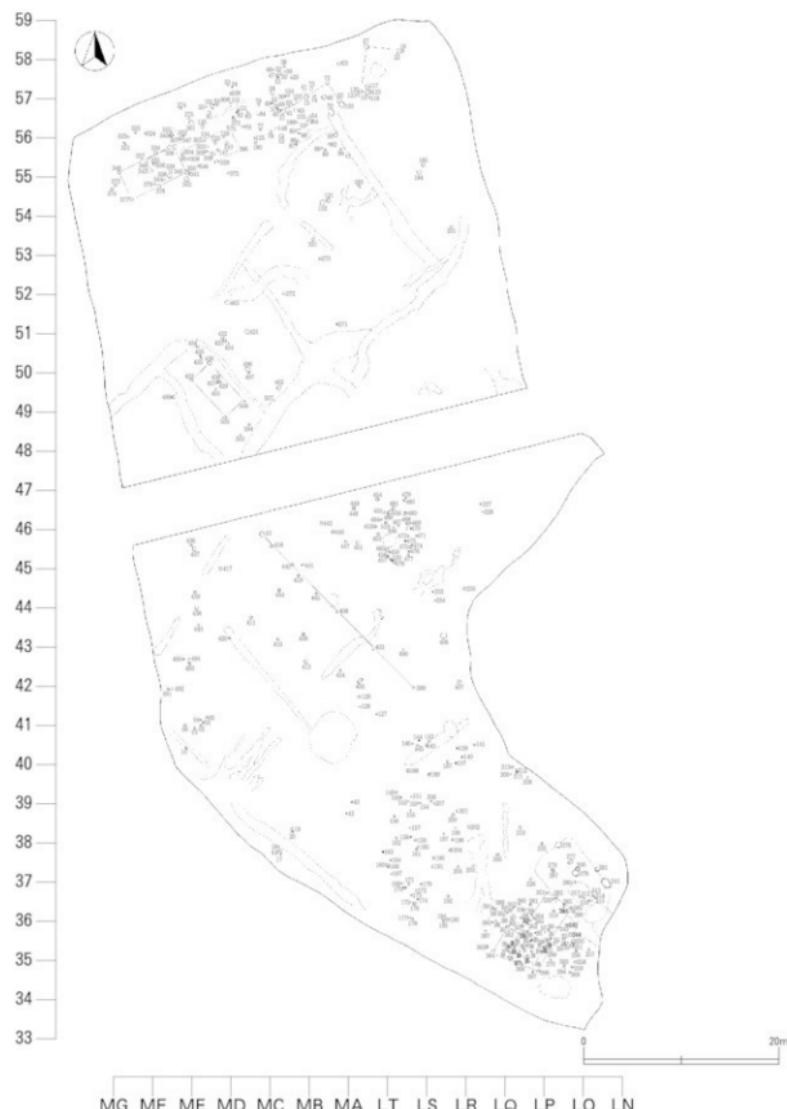
第23図 土坑(3)



第24図 土坑(4)・鍛冶炉



第25図 性格不明遺構



第26図 柱穴様ピット配置図

第2節 出土遺物

遺物は、縄文時代の土器・石器、平安時代の土師器・須恵器、中世の陶磁器・鐵冶関連遺物・硯・銭貨等で、整理用コンテナで48箱出土した。鐵冶関連の遺物については次節で述べることとする。

1 縄文時代

石器（第37図、図版8）

石器は9点出土した。縄文時代の遺構がないことや、周辺地形から、東側に隣接する丘陵からの流れ込みではないかと考えられる。

2 平安時代

土師器（第27・32図、図版4・7）

土師器は、皿・壺・甕が出土した。遺跡のほぼ全域から出土しているが、全体に摩滅したものが多く、個体を判別・復元できるものは数点のみである。4は、皿の底部としたが壺である可能性もある。また、中世のかわらけ（6～8）と同じ遺構から出土していることから、これと同類のものである可能性も多い。壺のうち、3・15・75は内湾して立ち上がり、底径が広く、切り離しはいずれも回転糸切りである。76・77は双耳壺の把手部分と考えられる。78・79は砲弾型甕の胴部で、内に当て目、外に叩き目がある。4を除く掲載品は、土師器の中でも摩滅の度合いが低いものである。摩滅度の高い土師器片は6～8と酷似しており、同類のものを含む可能性がある。

須恵器（第27・28・31～34図、図版2・4・6・7）

須恵器は、壺・高台付壺・長頸瓶・横瓶・壺・甕が出土した。壺は70・80・81で、底部は窓切りである。高台付壺は1・30・71で、このうち30は、転用硯で底部に墨の痕跡や擦り痕が残る。横瓶は72・83・84で、このうち72は側面の閉塞部分である。長頸瓶は85～88で高台の調整はそれぞれ異なる。壺は7点（5・12・13・62・89～91）である。12は、径約0.5mmの砂粒を付着させた砂底で、胎土にも径約1mmの砂粒を多く含む。13は、部分的に褐色の自然釉がかかり、90に僅かに付着した自然釉が酷似しており、胎土の状況からも同一個体である可能性が高い。甕は92・93が頸部～体部、その他は体部である。31・32・92・93・96～98は、何れも赤褐色の胎土で、当て目・叩き目の特徴からも同一個体である可能性が高い。100は内側全体に、101は外側の一部に緑色の自然釉がかかる。

灰釉陶器（第32図、図版7）

灰釉陶器は高台付壺が1点出土した。82は体部を中心に釉薬が塗られており、調整も緻密である。

3 中世

輸入陶磁器（第27・28・31・36図、巻頭図版2、図版1・2・6）

輸入陶磁器（全て中国産）は、白磁3点・青磁28点（龍泉窯22点、同安窯6点）・陶器1点が出土し、うち22点を掲載した。掲載品は大橋康二氏の指導をもとに4期に分類し、構成表を以下に示した。

白磁は、碗2点（10・138）・壺1点が出土した。10はI期に属し、口縁部が鋭角に外反し、両面に釉がかかり、内側に沈線が入る。138はII期に属し、高めの高台をもち内面にのみ釉がかかる。いずれも胎土は緻密である。

青磁は、龍泉窯の碗20点（14・16・28・29・59～61・68・129～133・135・136）・皿2点（67・134）と同安窯の碗6点（11・137）が出土した。II期のうち、龍泉窯の碗は9点で、16・60・135・136は

オリーブ色、61・130・134は緑色、59・131・133は緑灰色の釉がかかり、59・61・130・131・135・136は内面に画花文があり、133は外面に鎧蓮弁文がある。龍泉窯の皿は134で、緑灰色の釉がかかるが底面は無釉である。内面に櫛描文がある。同安窯の碗は、11が内面に画花文、外面に櫛描文があり、137は両面に櫛描文がある。ともに緑色の釉がかかるが下端は無釉であり、138がやや青色が強い。Ⅲ期は龍泉窯の碗が4点で、28・29・68は緑色の釉がかかるが、Ⅱ期のものに比べると黄色が強い。129は濃緑色の釉がかかる。全て外面に鎧蓮弁文があり、内面は無文である。Ⅳ期は龍泉窯の碗2点・皿1点で、14・132は濃緑色、67は緑色の釉がかかるが、67・132の底面は無釉である。14は外面に劍先蓮弁文がある。67は稜花皿である。胎土・調整は4期のうち最も粗い。

陶器は、西村窯の黄釉褐彩壺（139）が出土した。外面はオリーブ色の釉がかかり、内面は無釉である。肩部には鉄釉を施し、胎土は粗い。

		I期(11~12C)	II期(12~13C)	III期(13~14C)	IV期(15~16C)
白磁	碗	10	138	—	—
青磁	龍泉窯 碗・皿	—	16・59~61・130・131・133~136	28・29・68・129	14・67・132
	同安窯 碗	—	11・137	—	—
陶器		西村窯 壺	—	139	—

渥美焼（第31・36図、巻頭図版3、図版7）

渥美焼は、大甕の口縁部（56・124）が2点出土した。口縁部の形状や内外面の釉から渥美焼としたが、胎土の砂粒の少なさ、大粒の粒子が含まれていることから12・13世紀の須恵系陶器（疑似瓷器）である可能性もある。常滑焼と同じく器高70cm以上の大甕であると考えられ、これが渥美焼であった場合の搬入経路は陸上輸送では困難であったと考えられる。

常滑焼（第27・28・30~32・36図、巻頭図版3、図版1・4・6・7）

常滑焼は、大甕の胴部が17点出土した。少なくとも3個体が存在すると考えられ、いずれも器高70cm以上の大甕で、薄さから12世紀後半の赤羽・中野編年II型式と考えられるが、III型式の可能性もある。17・25・47~51・126・127は、外面に緑色の自然釉がかかり、内面は無釉の褐色で3個体のうち最も調整が粗い。押印がぼろぼろとしのために摩滅している。52は、外面は肩部と思われる部分に濃緑色の自然釉がかかり、これより下は無釉の褐色で、内面は無釉の褐色だが最下端に18・53~55・73・125・128と同様の釉が僅かにあり、これらと同一個体の可能性も考えられる。他の2個体に比べて押印の幅は狭いが、最も明瞭に見られる。18・53~55・73・125・128は外面は無釉の褐色で、内面は緑色の自然釉がかかった褐色である。いずれも胎土は緻密で輪積成形の内面調整は粗い。また1mm以下の砂粒が極僅かに含まれている。最も幅の広い押印がなされている。

須恵系陶器（第27~32・34・35図、図版1・4~7）

擂鉢は、41点を掲載した。須恵系陶器のうち最も出土が多く、A~E類に分類した。この際に底部のないものもその他の類似点を参考に分類した。A類（回転糸切りで卸目が疎らにある）は、22・26・34・37~39・43・45・63・69・102~104・111で珠洲焼のII期に相当すると考えられる。このうち34・37・39・102・103は口縁部に窪みがあり、34・37・104は片口である。出土した擂鉢のうちA類が最も緻密な調整がなされている。B類（回転糸切りで卸目無）は、19・35・36・44・105・115・116で、胎土が赤褐色で大畠窯（南外村）のものと類似するとの指摘があった。C類（静止糸切りで卸目有）

は、21・112である。D類（静止糸切りで鉢目無）は、20・27・40～42・106・113・114で、このうち20は口縁部に窪みがある。E類（鉢目が密で胎土が粗く鼠色を呈する）は、66・74・107～110で最も新しいグループと考えられる。珠洲焼ではないかと考えられるが、底部の出土がなく断定は控える。壺は、24・57・58・117～120で、このうち56・57・117～119は線刻文があり、自然釉がかかり同一個体と考えられる。24・120は肩部に波状の沈線がある。2は短頸で口縁部に炭化物が付着している。甕は、64・65・121～123で、このうち65・121は大型のものであると考えられる。須恵系陶器のうち甕の出土割合は低い。

かわらけ（第27図、図版4）

かわらけは、6～8の3点が出土した。6・8はやや外反して直線的に、7は内湾して立ち上がる。いずれもS D116からの出土で、胎土は淡橙色で径2～5mmの砂粒を含む。器形を判別できたものは3点のみだが、同質の胎土をもつ土器片は遺跡内の広い範囲から出土している。

木製品（第28図、図版4）

土錘（23）が1点出土した。遺跡周辺の環境や小型であることから、漁労よりもその他の生産活動で使用されたものと考えられる。

木製品（第38図、図版3・8）

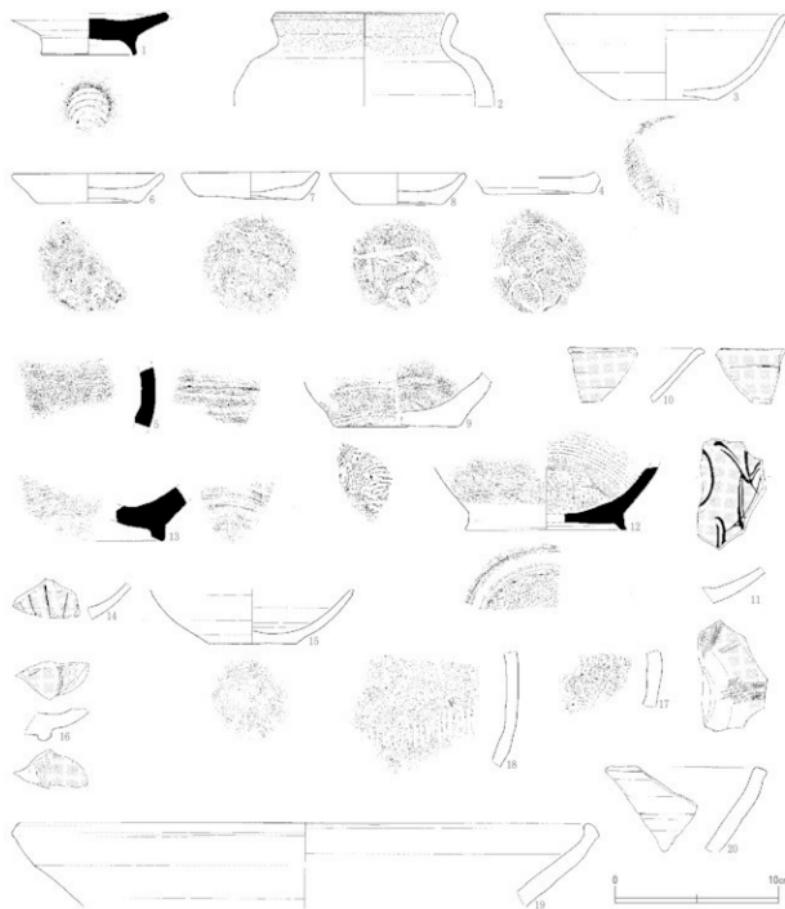
柱材（150）、曲げ物（151・152）、箸状木製品（153・154）が出土した。151は栓を差し込むためと思われる径2.5cm程の円形の穴が開いており、曲げ物の蓋と考えられる。151・152とともに、側面は栓に差し込むためにやや傾斜がついている。

銭貨・石製品（第37・38図、図版1・8）

銭貨は、元豊通宝2点（155・156）、皇宋通宝2点（157・158）、寛永通宝7点が出土した。宋銭である元豊・皇宋通宝は、中世陶磁器が最も多く出土したS D430から出土しており、同時期に搬入・使用されたものと考えられる。硯（149）は、材質は頁岩で小型の普及品と考えられる。表面には擦り痕や墨の付着等の使用痕が見られる。銭貨と同様に中世陶磁器が最も多く出土したS D430から出土しており、識字層の存在を裏付ける資料と考えられる。

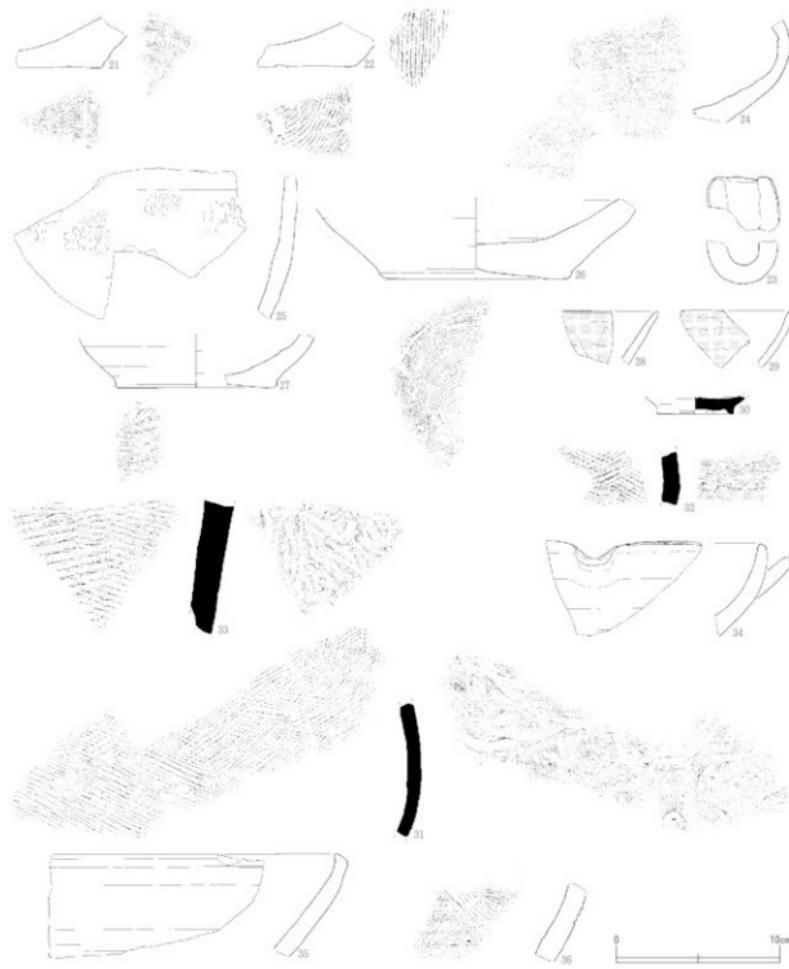
《参考文献》

- 埼玉県立博物館 「つぼ・かめ・すりばち」 展示図録 1990(平成2)年
- 工藤清泰 「北日本の中世陶磁器」 『植村彰一先生古希記念論文集』 1998(平成10)年
- 菊地徹夫・福田豈彦編 「よみがえる中世④北の中世津軽・北海道」 平凡社 1989(平成元)年
- 古岡康輔・宮内正勝 『陶磁器の世界』 山川出版社 2001(平成13)年
- 二ヶ井町教育委員会 『エヒバチ長根跡・大川口越跡・鳥野遺跡』 二ヶ井町文化財調査報告書第1集 1990(平成2)年
- 南外村教育委員会 『大畠窯跡発掘調査報告書』 1981(昭和56)年
- 南外村教育委員会 『大畠・松山窯跡発掘調査報告書』 1992(平成4)年
- 日本貿易陶磁研究会 『貿易陶磁研究No1-No5』 六一書房 1996(平成10)年
- 秋田県教育委員会 『絹崎遺跡-県営は場整備事業(浜井川地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書-』 秋田県文化財調査報告書第303集 2000(平成12)年
- 秋田県教育委員会 『鐵音寺廬寺跡-土地改良総合整備事業(緊急生産調整)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書-』 秋田県文化財調査報告書第321集 2001(平成13)年
- 秋田県埋蔵文化財センター 『研究紀要』 第7号 1992(平成4)年
- 秋田県埋蔵文化財センター 『研究紀要』 第12号 1997(平成9)年



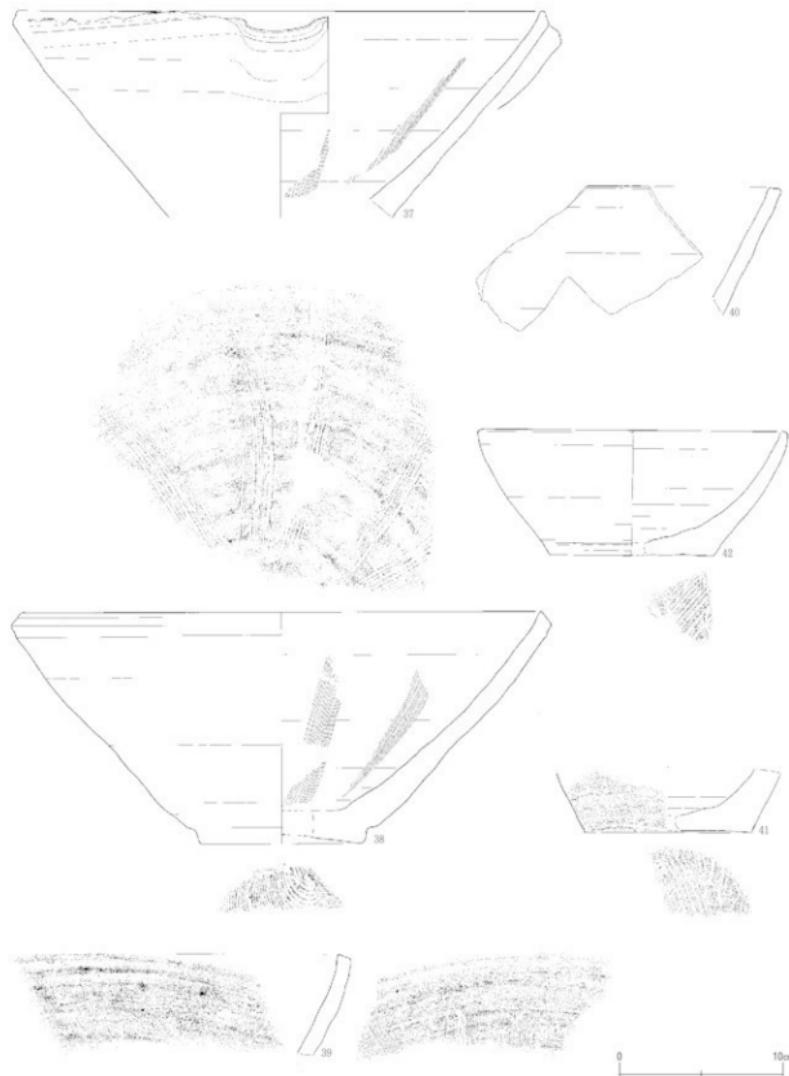
No.	回数	出土遺物	種類	時代	属性	基盤	形	底面(cm)	口径(cm)	底径(cm)	外底径	調整・歴史	その他
2	4	SD14	縁部	古代		高台付	浅腹			10.8	2.0	口付	
2	4	SD34	縁部	古代		高台付	口縁部~底部	5.2	14.9	6.0	口付, 無切	口縁部に焼化物(トコ)	
3	4	SD37	土師器	古代		底	口縁部~底部					口付	
4	4	SD116	土師器	古代		底?	底部			6.9	口付		かわらけの可能性あり
5	4	SD118	土師器	古代		底	口縁部~底部	1.8	9.3	6.3	口付, 無切	ロフロ	
6	4	SD118	土師器	古代		底	口縁部~底部	1.2	8.4	6.3	口付, 無切		
7	4	SD119	土師器	古代		底	口縁部~底部	2.0	8.3	5.3	口付, 無切		
8	4	SD118	土師器	古代		底	口縁部~底部						
9	4	SD116	土師器	古代		底	体底部下へ底部			7.7	口付, 無切	ロフロ, 古: 平行弦線	
10	SD116	土師器	古代	11-12C	底?	V型	口縁部~底部					内: 斜面, 外: 垂直	SD223
11	SD116	土師器	古代	11-12C	底?	V型	口縁部~底部					内: 斜面, 外: 垂直	
12	4	SD198	土師器	古代		底	体底部下へ底部					ロフロ, 古: 平行弦	高台村
13	4	SD218	土師器	古代		底	体底部下へ底部					内: ロフロ, 古: 口付+自然断?	高台村
14	SD116	土師器	古代	13C前-14C前	底部	底						斜先端付	
15	SD220	土師器	古代	13-14C	底部	底	体底部下へ底部					内: 突端	高台村
16	SD116	土師器	古代	13-14C	底部	底	体底部下へ底部					内: 突端	
17	4	SD401	土師器	古代	13-14C	底?	底					内: 自然断+削出	
18	4	SD401	土師器	古代	13-14C	底?	底					内: 自然断+削出	
19	4	SD401	土師器	古代	13-14C	底?	底	13.6	36.0			口付	
20	4	SD401	土師器	古代	13-14C	底?	底	13.6	36.0			ロフロ	

第27図 遺構内出土土器(1)



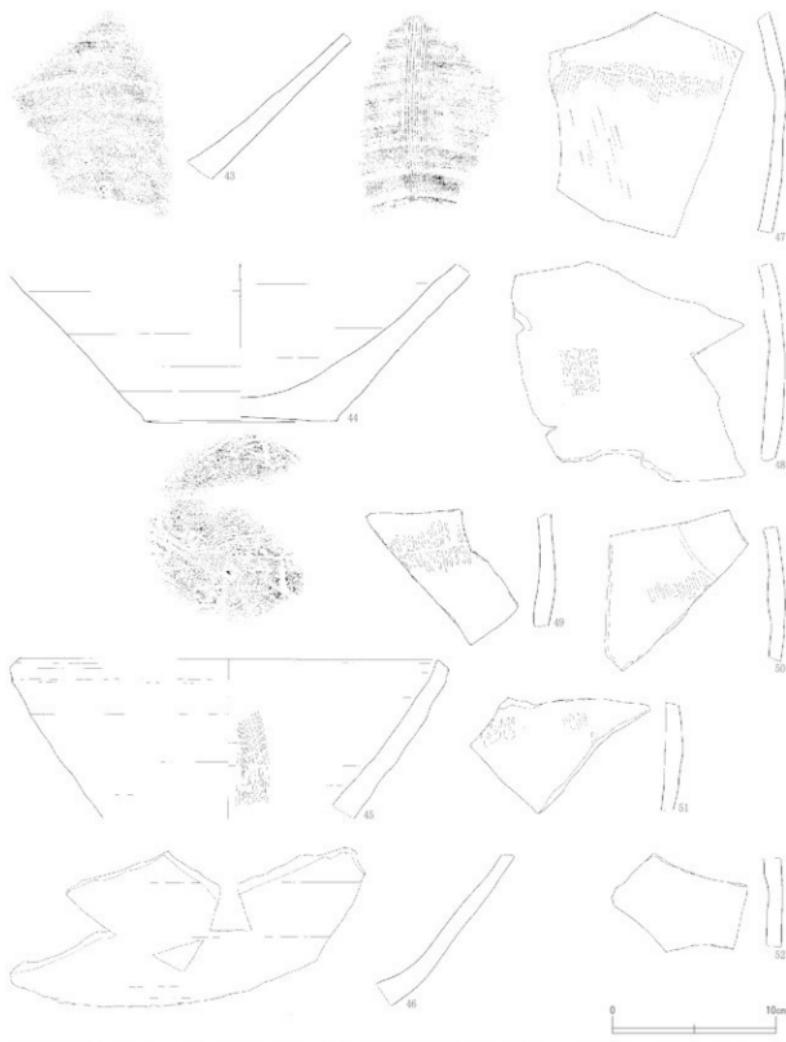
No.	形態	出土場所	種別	時期	產地	基部	断面	最高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	内底深	調整・施文	その他
21	縦縫合	SD 401	縦縫合	古代	縦縫合	縦縫	縦縫	1.5	1.5	1.5	0.5	内縫目	使用痕跡
22	縦縫合	SD 401	縦縫合	古代	縦縫合	縦縫	縦縫	1.5	1.5	1.5	0.5	内縫目	使用痕跡
23	縦縫合	SD 401	縦縫合	古代	縦縫合	縦縫	縦縫	1.5	1.5	1.5	0.5	内縫目	使用痕跡
24	縦縫合	SD 401	縦縫合	古代	縦縫合	縦縫	縦縫	1.5	1.5	1.5	0.5	内縫目	使用痕跡
25	縦縫合	SD 401	縦縫合	古代	縦縫合	縦縫	縦縫	1.5	1.5	1.5	0.5	内縫目	使用痕跡
26	縦縫合	SD 401	縦縫合	古代	縦縫合	縦縫	縦縫	1.5	1.5	1.5	0.5	内縫目	使用痕跡
27	縦縫合	SD 401	縦縫合	古代	縦縫合	縦縫	縦縫	1.5	1.5	1.5	0.5	内縫目	使用痕跡
28	縦縫合	SD 401	縦縫合	古代	縦縫合	縦縫	縦縫	1.5	1.5	1.5	0.5	内縫目	使用痕跡
29	縦縫合	SD 401	縦縫合	古代	縦縫合	縦縫	縦縫	1.5	1.5	1.5	0.5	内縫目	使用痕跡
30	縦縫合	SD 401	縦縫合	古代	縦縫合	縦縫	縦縫	1.5	1.5	1.5	0.5	内縫目	使用痕跡
31	縦縫合	SD 401	縦縫合	古代	縦縫合	縦縫	縦縫	1.5	1.5	1.5	0.5	内縫目	使用痕跡
32	縦縫合	SD 401	縦縫合	古代	縦縫合	縦縫	縦縫	1.5	1.5	1.5	0.5	内縫目	使用痕跡
33	縦縫合	SD 401	縦縫合	古代	縦縫合	縦縫	縦縫	1.5	1.5	1.5	0.5	内縫目	使用痕跡
34	縦縫合	SD 401	縦縫合	古代	縦縫合	縦縫	縦縫	1.5	1.5	1.5	0.5	内縫目	使用痕跡
35	縦縫合	SD 401	縦縫合	古代	縦縫合	縦縫	縦縫	1.5	1.5	1.5	0.5	内縫目	使用痕跡
36	縦縫合	SD 401	縦縫合	古代	縦縫合	縦縫	縦縫	1.5	1.5	1.5	0.5	内縫目	使用痕跡
37	刷	SD 401	刷	古代	刷	刷	刷	1.5	1.5	1.5	0.5	内縫目	使用痕跡
38												0	10cm

第28図 遺構内出土土器(2)



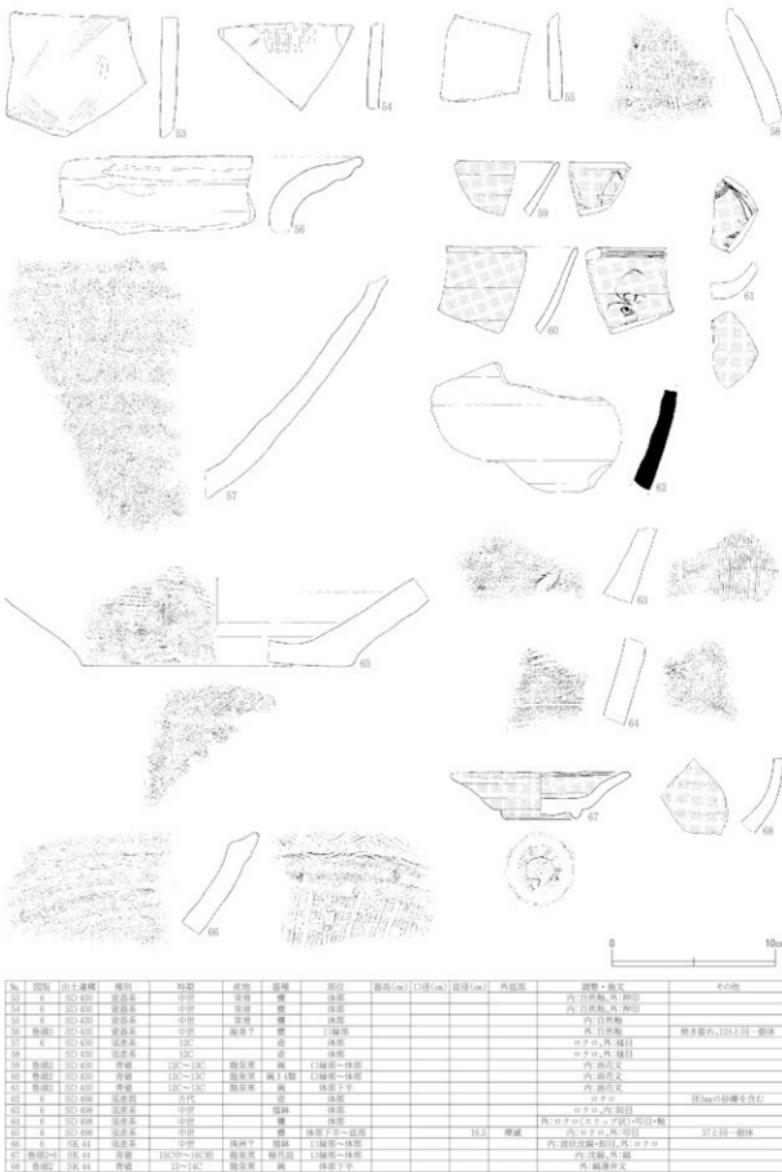
No.	探査	出土遺構	種別	時期	面積	高さ	口径(cm)	底径(cm)	外底面	調整・施文	その他
37	5	SII 430	直筒系	12C(後期Ⅱ期)	円筒形	1.5	22.0	10.0	圓形底面	ロクロ(スリット付)	使用痕跡
38	4	SII 430	直筒系	12C(後期Ⅱ期)	直筒系	14.1	30.0	10.0	圓形底面	ロクロ(スリット付), 内削	使用痕跡
39	4	SII 430	直筒系	12C(後期Ⅱ期)	直筒系	14.1	30.0	10.0	圓形底面	ロクロ(内削)	43±10mm
40	4	SII 430	直筒系	12C(後期Ⅱ期)	直筒系	14.1	30.0	10.0	圓形底面	ロクロ(スリット付)	
41	4	SII 430	直筒系	12C(後期Ⅱ期)	直筒系	15.0	30.0	10.0	圓形底面	ロクロ, 内削	
42	4	SII 430	直筒系	12C(後期Ⅱ期)	直筒系	7.0	29.0	10.0	圓形底面	ロクロ, 外, 深縫	使用痕跡

第29図 遺構内出土土器(3)



No.	形態	出土遺物	剖面	時期	產地	形態	部位	測定(cm)	口径(cm)	底径(cm)	外底面	測定・概要	その他
43	4	SD 430	變形系	中世	複数	複数	全体	10.0	—	—	—	ロクロ・内・複数	使用範囲
44	4	SD 430	變形系	中世	大底?	複数	底部下平・底盤	—	—	11.8	圓錐形	ロクロ	使用範囲, SD 430と複合
45	4	SD 430	變形系	中世	複数	複数	口縁等・底盤	26.7	—	—	—	ロクロ・内・複数	SD 90と複合
46	5	SD 430	變形系	12C(麻糬Ⅱ期)	複数	複数	全体	—	—	—	—	ロクロ	使用範囲, SD 430と複合
47	6	SD 430	變形系	中世	複数	複数	全体	—	—	—	—	ロクロ・内・複数	使用範囲, SD 430と複合
48	7	SD 430	變形系	中世	複数	複数	全体	—	—	—	—	ロクロ・内・複数	使用範囲
49	8	SD 430	變形系	中世	複数	複数	全体	—	—	—	—	ロクロ	自然軸
50	6	SD 430	變形系	中世	複数	複数	全体	—	—	—	—	ロクロ・内・複数	自然軸
51	6	SD 430	變形系	中世	複数	複数	全体	—	—	—	—	ロクロ・内・複数	自然軸
52	6	SD 430	變形系	中世	複数	複数	全体	—	—	—	—	ロクロ・内・複数	自然軸

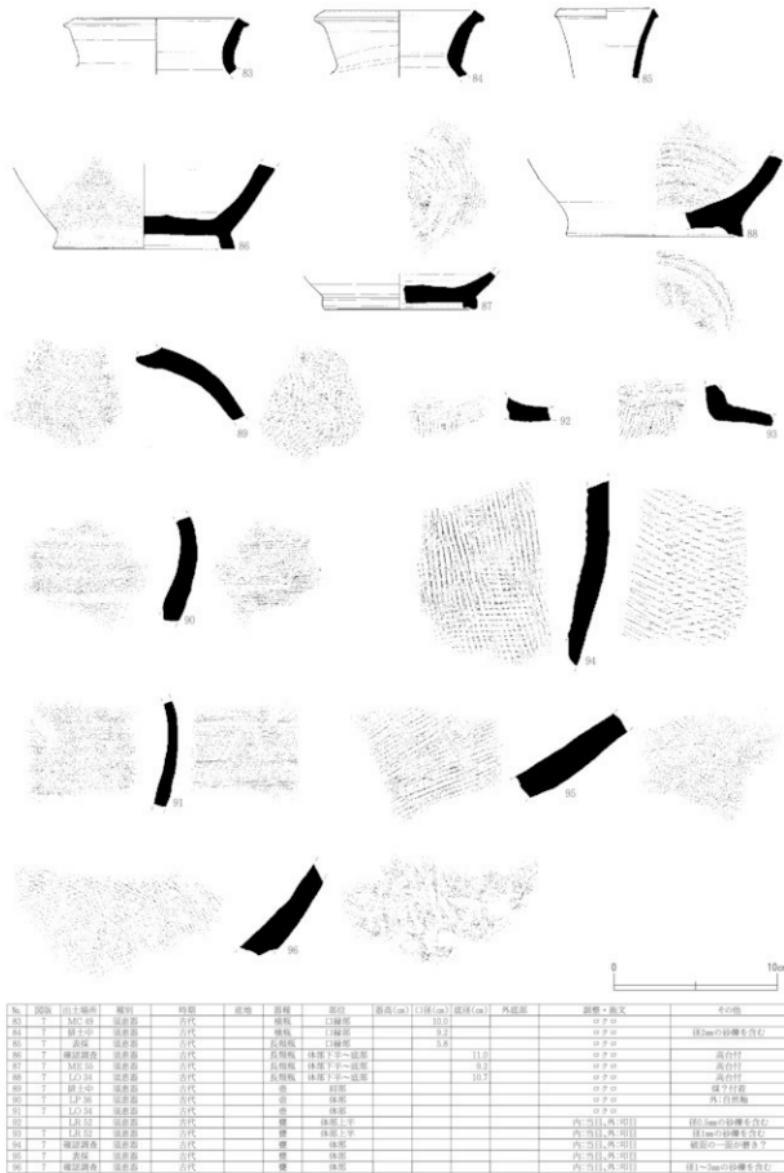
第30図 遺構内出土土器(4)



第31図 遺構内出土土器(5)

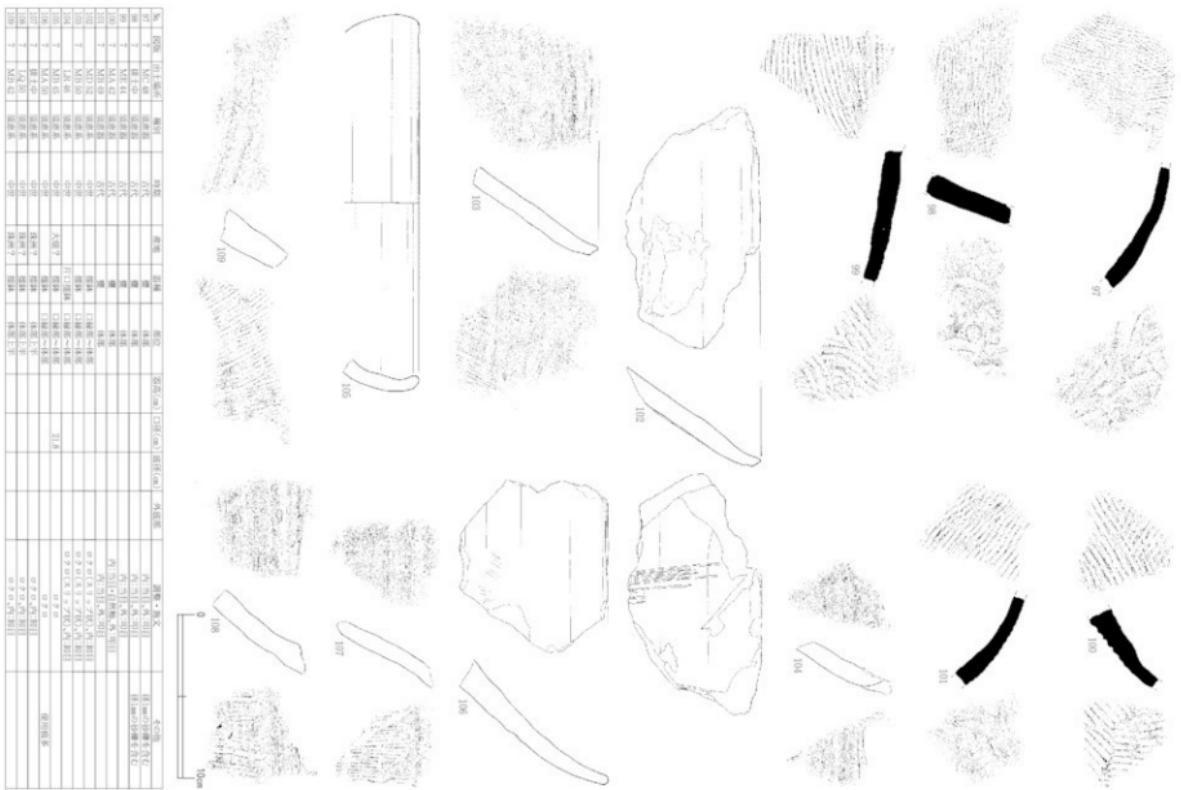


第32図 遺構内出土土器(6)・遺構外出土土器(1)



第33図 遺構外出土土器(2)

第2節 出土遺物



第34図 遺構出土土器(3)



No.	頭骨	出土場所	種別	均長	底面	長軸	面高(cm)	口徑(cm)	底径(cm)	内底面	調査・施又	その他
110	7	ME 41	鹿角系	中世	珠形?	棒状				ロクロ(スリット無)		
111	7	LS 49	鹿角系	中世	椎輪	体面下半				ロクロ(スリット有)		
112	7	表床	鹿角系	中世	椎輪	体面下半				ロクロ(スリット有)		
113	7	網羅	鹿角系	中世	椎輪	体面下半				ロクロ(スリット有)		
114	7	LS 62	鹿角系	中世	椎輪	体面下半				ロクロ(スリット有)		
115	7	LS 47	鹿角系	中世	大盤?	椎輪	体面下半-底面			ロクロ(スリット有)		
116	7	LS 44	鹿角系	中世	大盤?	椎輪	体面下半-底面			ロクロ(スリット有)	使用頻多、底面に付着物	
117	7	表床	鹿角系	120°	直	体面				ロクロ(スリット有)	使用頻多	
118	7	MA 32	鹿角系	120°	直	体面				ロクロ(スリット有)		
119	7	LS 53	鹿角系	120°	直	体面				ロクロ(スリット有)		
120	7	MD 55	鹿角系	中世	直	直面				ロクロ(スリット有)		
121	7	MD 55	鹿角系	中世	直	直面				ロクロ(スリット有)		
122	7	MB 49	鹿角系	中世	直	直面				ロクロ(スリット有)		
123	7	MB 58	鹿角系	中世	直	体面下半				ロクロ(スリット有)		

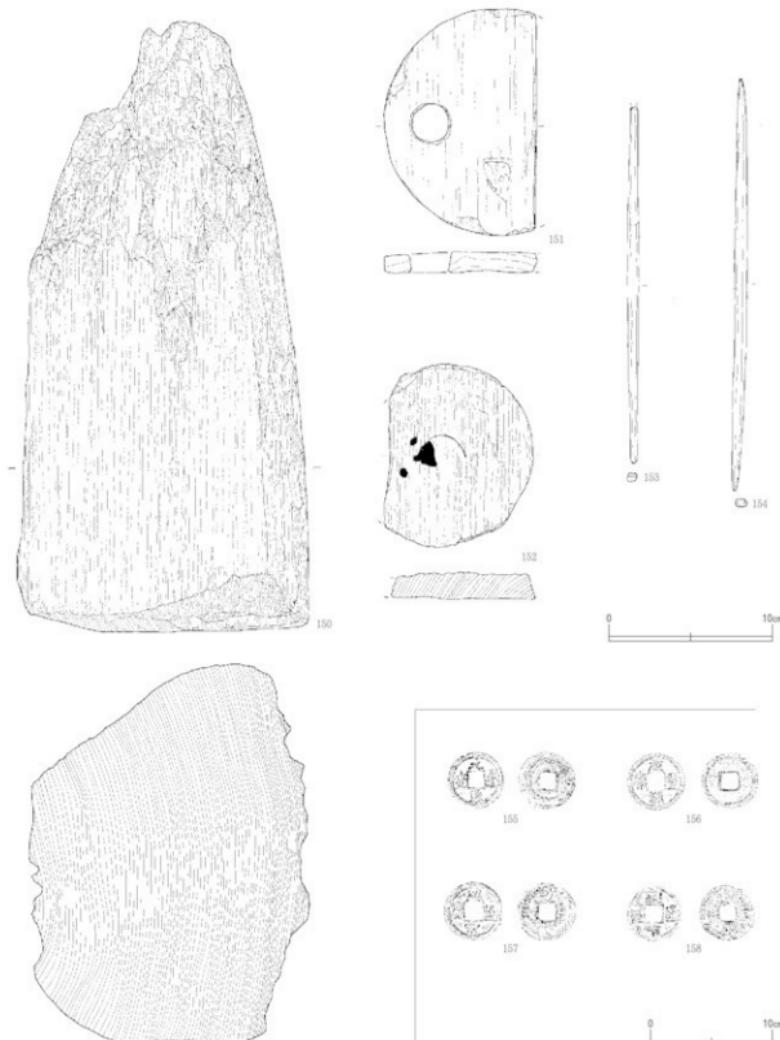
第35図 遺構外出土土器(4)



第36図 遺構外出土土器(5)



第37図 石器・石製品



No.	出土地	出土遺物	形態	径(φ)(cm)	幅(φ)(cm)	厚さ(φ)(cm)
150	ME 407	木製	板状	17.3	20.3	1.0
151	8	ME 36	圓形物(圓)	13.8	—	1.3
152	8	MA 41	圓形物(圓)	11.1	—	1.7
153	8	SD 218	圓形	21.7	0.6	0.5
154	8	LR 46	圓形	26.1	0.5	0.7

No.	出土地	出土遺物	形態	外径(cm)	厚さ(cm)	重積(g)	年代
155	8	SD 430	元豐通宝(圓)	2.4	0.15	2.2	初期1078年-北宋
156	8	SD 430	元豐通宝(圓)	2.4	0.15	2.2	初期1078年-北宋
157	8	SD 430	宣和通宝(圓)	2.4	0.15	2.6	初期1100年-北宋
158	8	SD 430	宣和通宝(圓)	2.3	0.15	2.0	初期1100年-北宋

第38図 木製品・錢貨

第3節 鍛冶関連遺物

本遺跡からは、溝跡を中心に総重量88621.2gの鍛冶関連遺物が出土している。これらは、形状・法量から中世（14～15C）のものと判断した。全ての遺物について重量を計測したものが第2表である。そのうち、114点は構成図を作成し、これをもとに実測図を作成した。実測図を掲載した遺物の大きさ・重量・磁着度・メタル度を計測したものが、各頁毎に添付した観察表である。磁着度は、方眼台紙に6mmを1単位とする同心円を10本以上描き、標準磁石（フェライト磁石）を糸につり下げて、広い側面側を台紙の中心に合わせる。遺物を手に持ち外側のランクから順次接近させて、磁石が急激に動き始める瞬間の数字を記録したものである。メタル度は、埋蔵文化財用特殊金属探知機MR-50B（基準値設定者穴澤義功）を用いた。金属の残留度の高い方から「特L（☆）」・「L（●）」・「M（◎）」・「H（○）」、鉄を含んでいるものの既に酸化したものについては「鈍化（△）」と表示した。

本遺跡で検出された鍛冶関連遺構は、SS461と SS509の2基のみである。出土遺物の86.67%を椀形鍛冶溝が占めるが、このうち44.03%が SS461に隣接する SD430からの出土である。椀形鍛冶溝は、最大5450.0 g のもの（245）をはじめ、大きさは多様である。また、形状も二段になっているもの（170・196・248）等が含まれている。このことから検出された2基以外にも鍛冶炉があった可能性が高い。このほか炉壁の中には製錬炉のものと考えられるものがあり、溝にも同様のものがあることから、付近にこの種の施設があったと考えられる。鋳造品は出土しなかった。



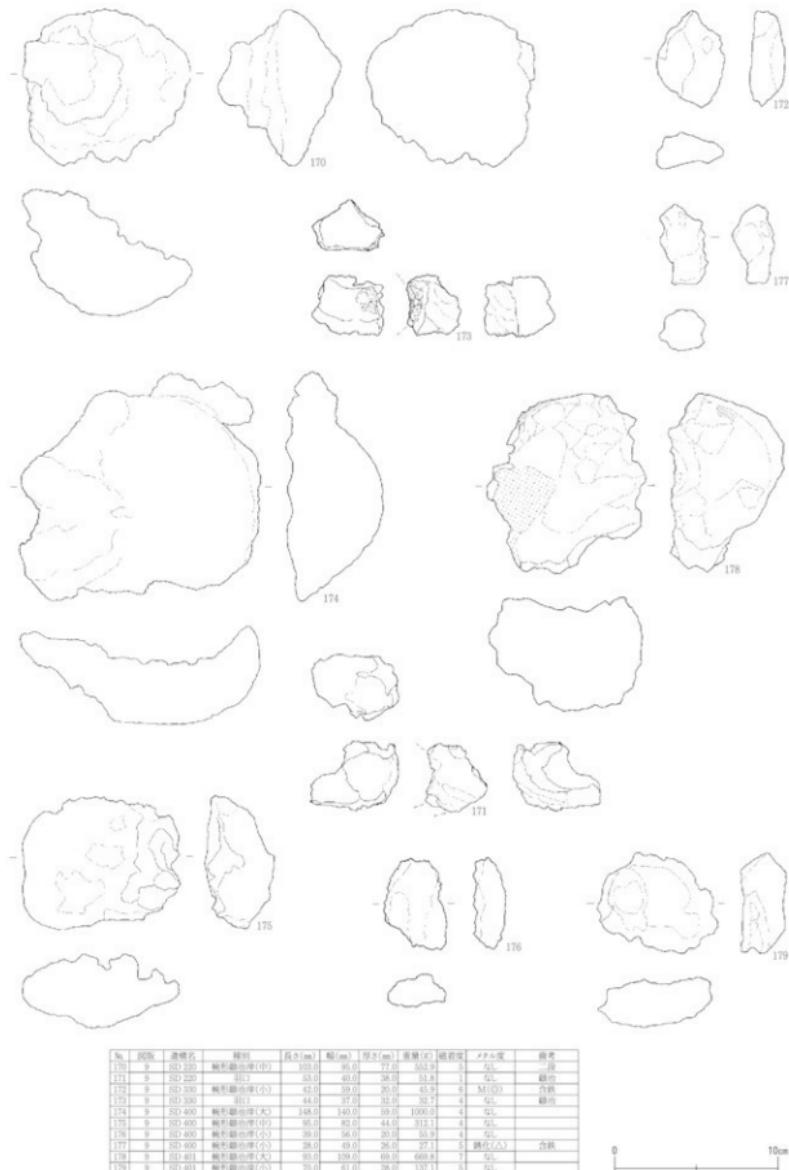
第39図 鍛冶関連遺物凡例

第2表 鍛冶関連遺物構成比

SD 14	SD 90	SD 116		SD 220	SD 330	SD 400		SD 401		SD 425		SD 430	
羽口	羽口	楕形鍛治津(中)	楕形鍛治津(小)	鍛治津	楕形鍛治津(中)	楕形鍛治津(小)	楕形鍛治津(大)	楕形鍛治津(小)	楕形鍛治津(大)	楕形鍛治津(小)	楕形鍛治津(大)	羽口	不明津
(鍛治)なし	(鑄治)なし (鉢床土付)なし	なし	(粘土質)	(二段)なし	なし	(合鉄)M(◎)	なし	なし	なし	(合鉄)H(○)	なし	(鍛治)なし (製鍊炉?)	なし
													
													
													
													
													
													
													
													
													
													
													
													
													
													
													
													
													
													
													
													
													
													
					<img alt="Drawing of a small elliptical vessel base fragment from SD 90." data-bbox="130 330 180 3								



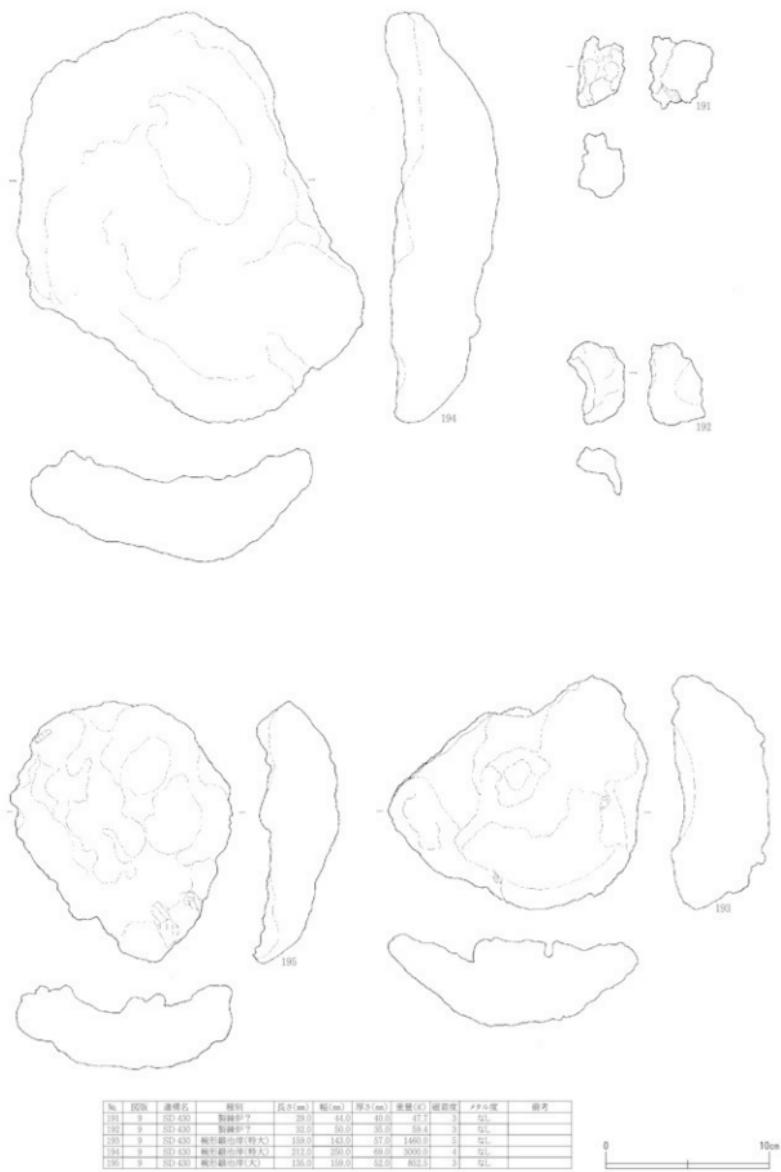
第41図 遺構内出土鍛冶関連遺物(1)



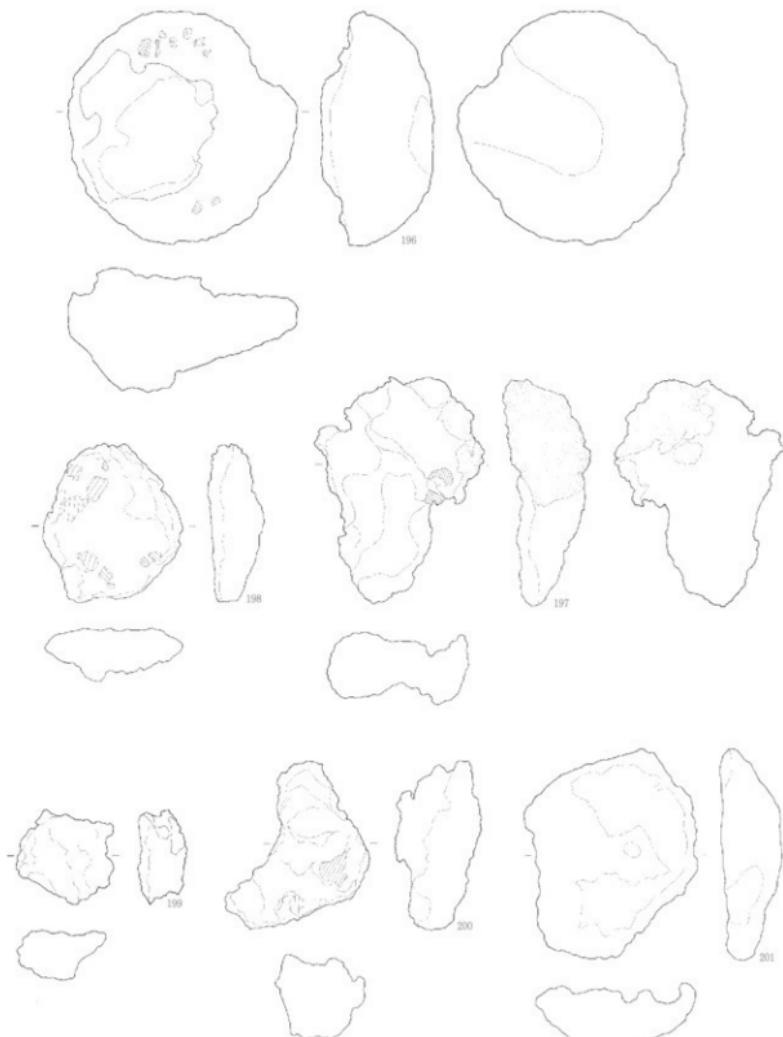
第42図 遺構内出土鍛冶関連遺物(2)



第43図 遺構内出土鍛冶関連遺物(3)



第44図 造構内出土鍛冶関連遺物(4)



第45図 造構内出土錫冶関連遺物(5)

No.	回復	遺構名	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	鉛質度	XRF度	備考
196	0	SDI 430	錫不純物質(大)	134.0	130.0	44.0	695.7	3	22	
197	0	SDI 430	錫不純物質(大)	134.0	130.0	44.0	695.7	3	22	鉛球不純
198	0	SDI 430	錫不純物質(中)	90.0	98.0	33.0	246.9	6	42	
199	0	SDI 430	錫不純物質(中)	60.0	58.0	31.0	111.7	12	50	含鉛
200	0	SDI 430	錫不純物質(中)	90.0	130.0	32.0	355.4	5	50	含鉛
201	0	SDI 430	錫不純物質(中)	134.0	129.0	36.0	526.7	41	50	含鉛

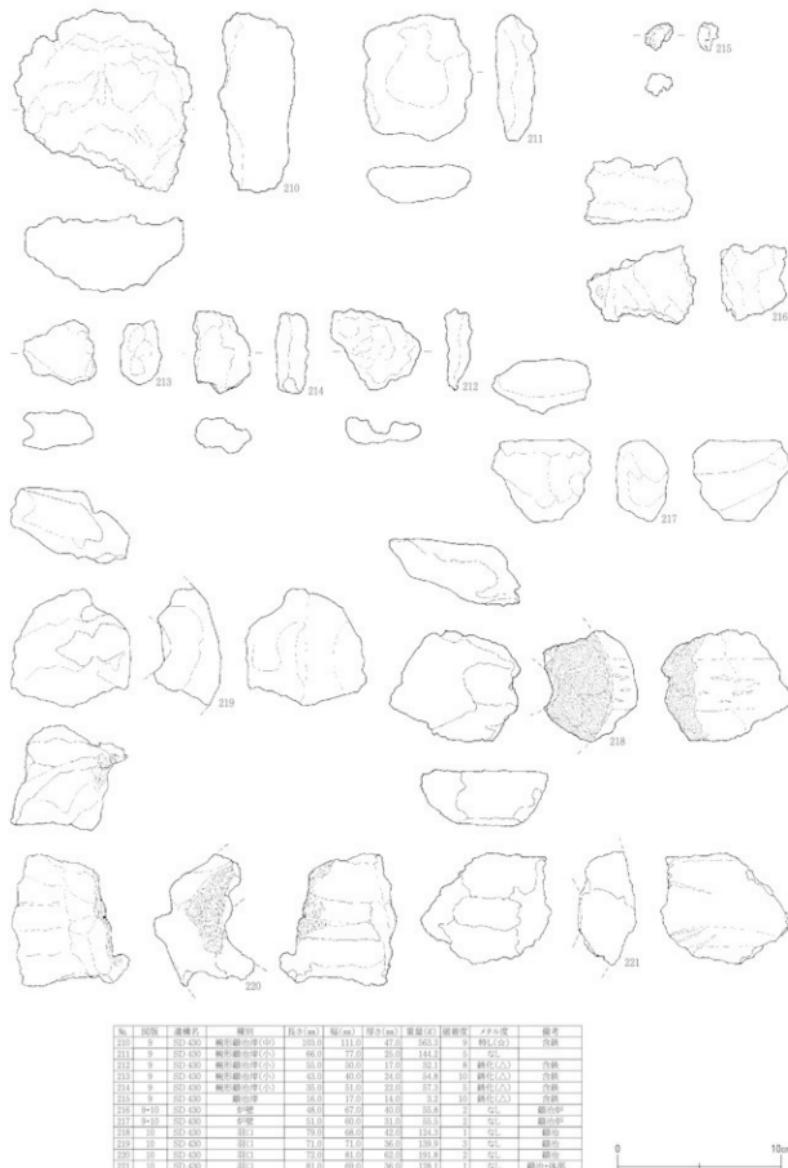




%	回数	遺構名	種別	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	鉄品位	メタル度	備考
202	9	SD 430	鍛冶鋸切削(大)	134.0	165.0	52.0	1650.0	6	なし	
203	9	SD 430	鍛冶鋸切削(大)	236.0	156.0	52.0	1140.0	9	純化(△)	古鉄
204	9	SD 430	鍛冶鋸切削(中)	98.0	138.0	38.0	580.0	2	純化(△)	古鉄
205	9	SD 430	鍛冶鋸切削(中)	100.0	113.0	34.0	530.0	3	H(C)	古鉄
206	9	SD 430	鍛冶鋸切削(中)	96.0	98.0	37.0	398.3	6	H(C)	古鉄
207	9	SD 430	鍛冶鋸切削(中)	94.0	119.0	37.0	441.1	4	H(C)	古鉄
208	9	SD 430	鍛冶鋸切削(小)	62.0	87.0	25.0	121.1	3	なし	
209	9	SD 430	鍛冶鋸切削(小)	73.0	83.0	26.0	90.5	5	なし	



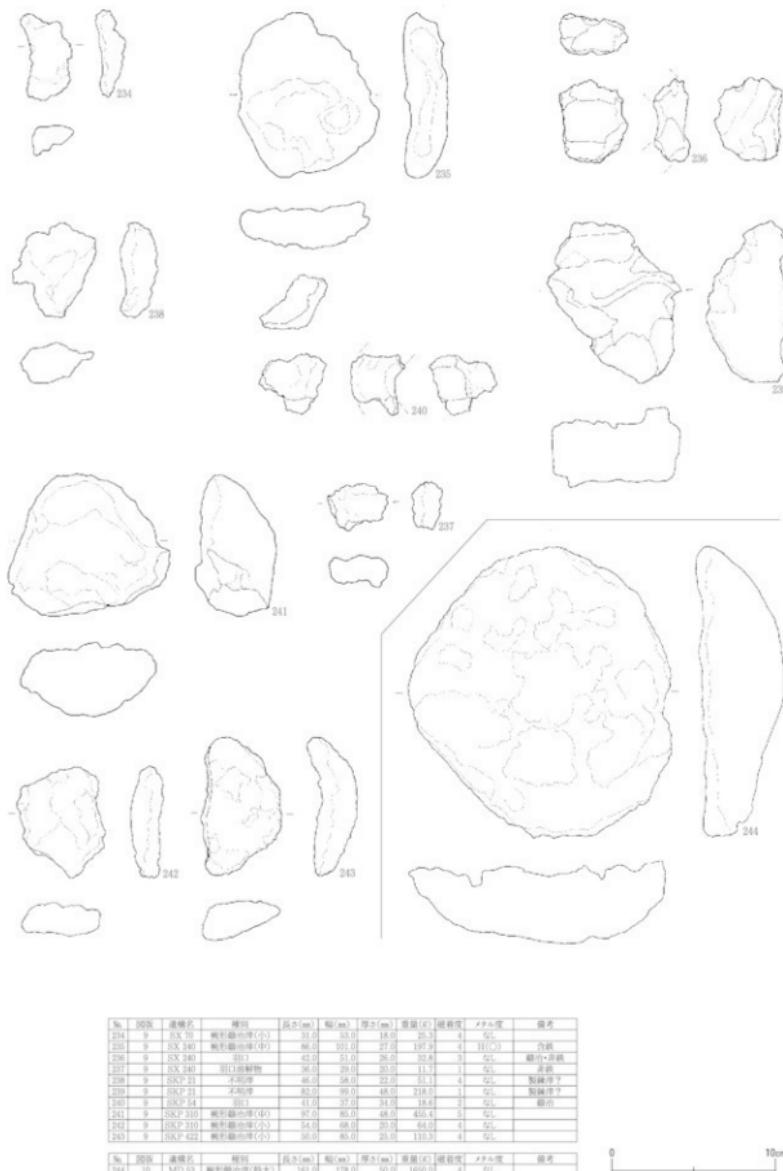
第46図 造構内出土鍛冶関連遺物(6)



第47図 遺構内出土錫冶関連遺物(7)



第48図 遺構内出土鍛冶関連遺物(8)



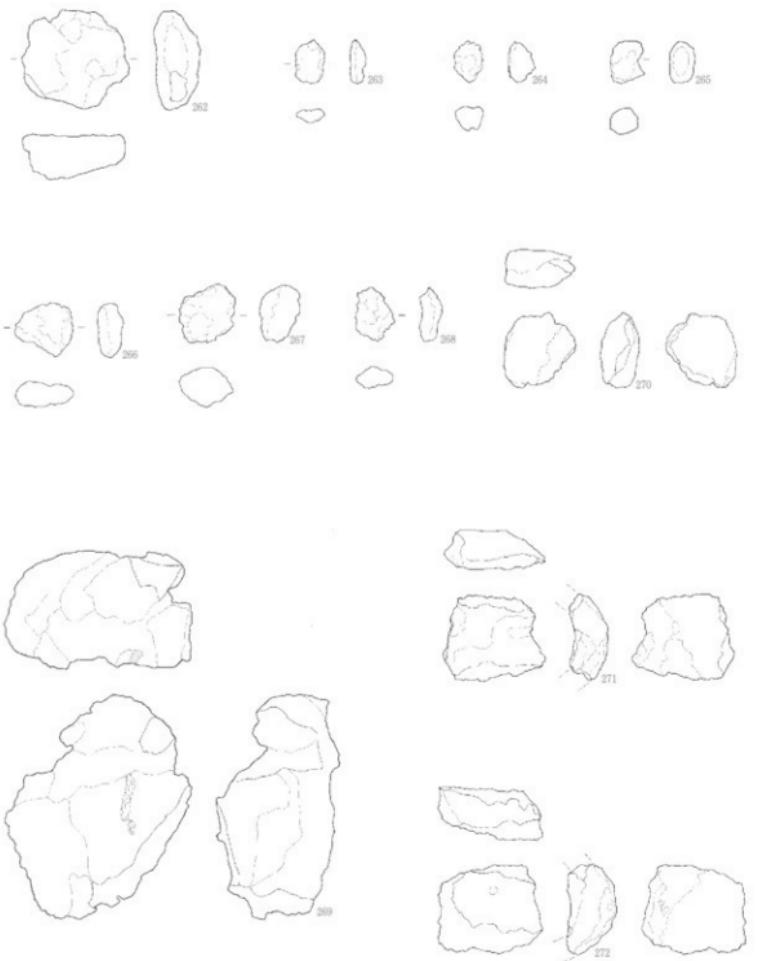
第49図 遺構内出土錫冶関連遺物(9)・遺構外出土錫冶関連遺物(1)



第50図 造構外出土鍛冶関連遺物(2)



第51図 造構外出土鍛冶関連遺物(3)



No.	回復	出土場所	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	破損度	参考文	通考
261	10	ME 54	側面打削石(小)	19.0	27.0	9.0	177.6	無	鶴岡(2)	古鉄
262	10	ME 40	側面打削	18.0	27.0	9.0	4.6	有	鶴岡(2)	古鉄
264	10	MB 41	側面打削	18.0	25.0	15.0	6.3	有	鶴岡(2)	古鉄
265	10	MC 52	側面打削	21.0	26.0	16.0	11.9	有	鶴岡(2)	古鉄
266	10	夷隅	側面打削	36.0	30.0	16.0	19.2	無	鶴岡(2)	古鉄
267	10	ME 40	側面打削	34.0	34.0	16.0	9.9	無	鶴岡(2)	古鉄
269	10	夷隅	側面打削	34.0	35.0	14.0	9.1	有	鶴岡(2)	古鉄
270	9+10	櫛状鋸齒	側面打削	137.0	115.0	15.0	209.0	有	鶴岡(2)	古鉄
271	10	MF 43	刃口	44.0	46.0	34.0	31.6	2	なし	鶴岡
272	10	夷隅	刃口	60.0	53.0	35.0	63.2	1	なし	鶴岡
273	10	MC 53	刃口	64.0	55.0	30.0	87.0	2	なし	鶴岡



第52図 遺構外出土鍛冶関連遺物(4)

第5章 自然科学的分析

第1節 放射性炭素年代測定

山形 秀樹（パレオ・ラボ）

1 はじめに

大坪遺跡より検出された炭化物の加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を実施した。

2 試料と方法

試料は、SK130から出土した炭化物1点、SKP30から出土した炭化物1点、SD37から出土した炭化物1点、SB514(P2)から出土した炭化物1点、SD24から出土した炭化物1点、SE28から出土した炭化物1点、SKP23から出土した炭化物1点、SD138から出土した炭化物1点、SX240から出土した炭化物1点の合せて9点である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨(グラファイト)に調整した後、加速器質量分析計(AMS)にて測定した。測定された¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した¹⁴C濃度を用いて¹⁴C年代を算出した。

3 結果

表1に、各試料の同位体分別効果の補正值(基準値-25.0%)、同位体分別効果による測定誤差を補正した¹⁴C年代、¹⁴C年代を曆年代に較正した年代を示す。

¹⁴C年代値(yrBP)の算出は、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。これは、試料の¹⁴C年代が、その¹⁴C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

なお、曆年代較正の詳細は、以下の通りである。

曆年代較正

曆年代較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5,730±40年)を較正し、より正確な年代を求めるために、¹⁴C年代を曆年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と¹⁴C年代の比較、及び海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて¹⁴C年代と曆年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて¹⁴C年代を曆年代に較正した年代を算出する。

¹⁴C年代を曆年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3(CALIB 3.0のバージョンアップ版)を使用した。なお、曆年代較正値は¹⁴C年代値に対応する較正曲線上の曆年代値であり、 1σ 曆年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその 1σ 曆年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。 1σ 曆年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

4 考察

各試料は、同位体分別効果の補正及び暦年代較正を行なった。暦年代較正した 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それより確かな年代値の範囲として示された。

引用文献

- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎 日本先史時代の ^{14}C 年代、p.3-20.Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1990) Extended ^{14}C Database and Revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.Stuiver,M., Reimer,P.J., Bard, E., Beck,J.W., Burr,G.S., Hughen,K.A., Kromer,B., McCormac,F.G., v.d. Plicht,J., and Spurk,M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{CPDB}$ (‰)	14C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C 年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	1σ 暦年代範囲
PLD-1855 (AMS)	炭化物 No.1 SK130 3層	-22.6	1710 \pm 70	cal AD 265 cal AD 340 cal AD 375	cal AD 250 - 305 (34.5%) cal AD 315 - 410 (65.5%)
PLD-1856 (AMS)	炭化物 No.2 SKP30	-26.3	1020 \pm 60	cal AD 1020	cal AD 965 - 1040 (71.5%) cal AD 1095 - 1120 (14.2%)
PLD-1857 (AMS)	炭化物 No.3 SD37	-25.1	1140 \pm 60	cal AD 895 cal AD 925 cal AD 935	cal AD 860 - 980 (87.8%)
PLD-1858 (AMS)	炭化物 No.4 SB514(P2)	-25.4	1010 \pm 60	cal AD 1020	cal AD 975 - 1045 (69.7%) cal AD 1090 - 1120 (18.7%) cal AD 1140 - 1155 (11.2%)
PLD-1859 (AMS)	炭化物 No.5 SD24	-25.0	450 \pm 50	cal AD 1440	cal AD 1415 - 1485 (100%)
PLD-1860 (AMS)	炭化物 No.6 SE28	-26.3	980 \pm 60	cal AD 1025	cal AD 1000 - 1065 (53.1%) cal AD 1085 - 1125 (30.9%) cal AD 1135 - 1155 (16.0%)
PLD-1861 (AMS)	炭化物 No.7 SKP23	-28.0	840 \pm 100	cal AD 1215	cal AD 1045 - 1090 (21.5%) cal AD 1155 - 1275 (69.5%)
PLD-1862 (AMS)	炭化物 No.8 SD138	-25.4	780 \pm 60	cal AD 1260	cal AD 1210 - 1285 (96.3%)
PLD-1863 (AMS)	炭化物 No.9 SX240 サンプル II	-24.8	1000 \pm 60	cal AD 1020	cal AD 985 - 1060 (61.2%) cal AD 1085 - 1120 (25.2%) cal AD 1140 - 1155(13.6%)

第3表 放射性炭素年代測定及び暦年代較正

1 試料と分析方法

分析試料は大坪遺跡の SD07から採取されたNa10、SKI215から採取されたNa11、SD401から採取されたNa11の計3試料である。

(1)鉱物組成分析

①各試料は20～35g程度秤量し、40度に設定した恒温乾燥機でよく乾燥した後、乾燥重量を秤量し含水比を求めた。

②1φ(0.5mm)、2φ(0.25mm)、3φ(0.125mm)、4φ(0.063mm)のふるいを重ね、湿式ふるいを行なった。各ふるいの残渣について乾燥後秤量し粒度組成とした。また4φ以上の残渣の乾燥重量より含砂率を求めた。

③4φの残渣について重液(テトラブロモエタン：比重2.90～2.96)を用いて重液分離を行ない、軽鉱物と重鉱物の乾燥重量を秤量した。分離した各試料の乾燥重量を秤量し重・軽鉱物比とした。

④重液分離をした軽鉱物と重鉱物について封入剤(レーキサイトセメント)を用いてプレパラートを作成した。

⑤軽鉱物は石英(Qt)、長石(Pl)、火山ガラス(Gl)に分類し、重鉱物はかんらん石(Ol)、イデュングサイト(In)、單斜輝石(Cpx)、斜方輝石(Opx)、角閃石(Hor)、磁鐵鉱(Mag)に分類し、風化粒子などの不明鉱物以外の鉱物が200以上になるまで分類・計数を行なった。なお火山ガラスの形態は、町田・新井(1992)の分類基準に基づき、バブル型平板状(b1)、バブル型Y字状(b2)、軽石型織維状(p1)、軽石型スponジ状(p2)、急冷破碎型(c0:塊状・フレーク状)の5形態に分類した。

(2)屈折率測定

ガラスの屈折率については横山(1986)ほかの方法に従って、温度変化型屈折率測定装置(RIMS86)を用いて屈折率(n)を測定し、その結果を範囲(range)であらわした。

2 結果

(1)テフラの鉱物組成分析(表4、第53図)

砂粒分の粒度組成は全ての試料において4φ残渣が80～90%を占め、1～3φ残渣が非常に少ない組成となる。

重・軽鉱物比は、全ての試料において軽鉱物の割合が98%以上となり、高い割合を示す。

軽鉱物の鉱物組成は、Na10、Na11、Na12では火山ガラスがそれぞれ36%、45%、59%を占める。

ガラスの形態分類は軽石型スponジ状(p2)が多く、特にNa12では45%と高い値となる。ついで平板型Y字状(b1)と軽石型織維状(p1)が多く、いずれの試料でも3～8%の含有量がある。また、その他の形態は4%未満である。

重鉱物の鉱物組成は斜方輝石と單斜輝石、磁鐵鉱を主体とする組成で、いずれの試料も40～50%を斜方輝石が占めている。單斜輝石はNa12では29%と高い割合で含まれているが、Na10とNa11では18%、16%とやや低い値を示す。磁鐵鉱はNa10、Na11、Na12でそれぞれ27%、36%、16%を占める。また、角閃石は全ての試料において少なく、Na10では12%の値を示すがNa11、Na12では10%未満となる。

(2)屈折率測定(第5表、第54図)

いずれの試料も、最も含有率の高い軽石型火山ガラスについて屈折率測定を行なった。その結果No.10の屈折率は範囲1.4978-1.5021、平均値1.4996、No.11の屈折率は範囲1.4991-1.5032、平均値1.5015、No.12の屈折率は範囲1.4983-1.5019、平均値1.4999となり、およそ範囲1.498-1.503、平均値1.500-1.501と近似した値を示す。

3 堆積物中のテフラ【十和田a:T o-a】

No.10、No.11、No.12に見られる火山ガラスは、その形態的特徴及び火山ガラスの屈折率の値から十和田a(大池1972)と推定される。町田ほか(1984)によると十和田aの降下テフラは白色軽石と火山ガラス片であり、斜方輝石と単斜輝石を含むことが特徴としてあげられている。今回の試料中にも軽石型の火山ガラスは多く含まれ、重鉱物の組成分析でも斜方輝石と単斜輝石が観察される。また、軽石型火山ガラスを用いた屈折率測定結果は、範囲がおよそ1.498-1.503となり、十和田aの従来値の範囲1.496-1.504(町田・新井、1992)に重なる。これらのことから、分析を行なった3試料中に含まれる火山ガラスなどのテフラは、十和田aと同定される。

十和田カルデラを供給源とする十和田aの分布域は南方に300km、西方に80kmにおよび、東北地方一帯を覆うことが報告されている(町田・新井、1992)。また、噴出年代は915年と推定されている(町田ほか、1984)。

4まとめ

大坪遺跡から採取された3試料(No.10、No.11、No.12)を分析した結果、これらの堆積物中に含まれる火山ガラスは915年に噴出したとされる十和田aを起源とする火山ガラスであると同定される。

参考文献

- 町田洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス—日本列島とその周辺。財團法人東京大学出版会、276p.
 町田洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984)テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログー、渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」、865-928。
 大池昭二(1972)十和田火山東麓における完新世テフラの編年、第四紀研究、11、228-235

横山卓雄・檀原徹・山下透(1986)温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定、第四紀研究、25、21-30

番号	含水率 (重量%)		含率 (重量%)		砂粒分の粒度組成 (重量%)		重・軽石型物質組成 (重量%)	
	10	9.1	2.4	2.9	1.7	0.8	0.9	99.4
No.10	8.0	9.1	2.4	2.9	1.7	0.8	0.9	99.4
No.11	61.5	1.5	7.0	5.6	3.0	77.6	0.9	99.1
No.12	47.9	9.0	4.0	2.1	1.6	85.2	1.3	98.5

番号	軽石型物質組成(%)		重石型物質組成(%)		火山ガラス(火成岩分離)(%)		火成岩分離(%)	
	斜方 輝石	大斜方 輝石	重石	火成岩	火成岩	火成岩	火成岩	火成岩
No.10	65	—	31	34	41	65	4	0
No.11	117	99	7	15	8	69	—	—
No.12	88	130	—	13	30	100	1	—

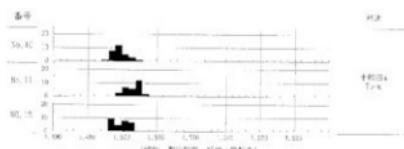
番号	堆積物組成(%)								
	オシラン石 Ct	イドニアイト Id	輝開石 Opx	角閃石 Mg	斜方輝石 Cpx	重石 Rho	火成岩 Vol	火成岩 Mag	火成岩 Rho
No.10	—	—	38	91	26	67	—	—	—
No.11	—	2	32	80	13	71	—	—	—
No.12	—	—	60	255	5	34	—	—	—

第4表 堆積物の砂粒分析と試料分析

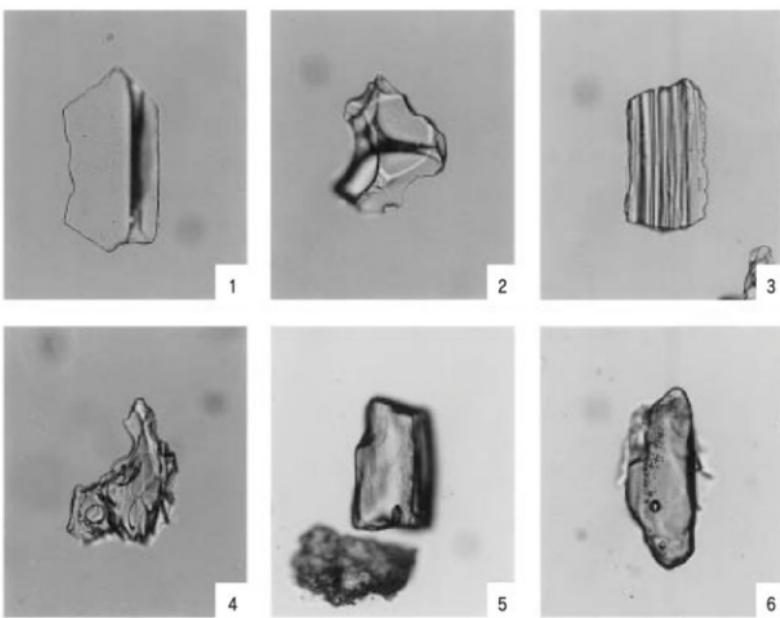
第53図 堆積物の試料組成

番号	測定対象	範囲(range)	平均(mean)
No.10	軽石型火山ガラス	1.4978 - 1.5021	1.4996
No.11	軽石型火山ガラス	1.4991 - 1.5032	1.5015
No.12	軽石型火山ガラス	1.4983 - 1.5019	1.4999

第5表 火山ガラスの屈折率



第54図 火山ガラスの屈折率とそのタイプ



1.バブル型V字状火山ガラス【b1】(No.12)

2.軽石型スponジ状火山ガラス【p2】(No.10)

3.軽石型纖維状火山ガラス【p1】(No.12)

4.軽石型スponジ状火山ガラス【p2】(No.12)

5.单斜輝石(No.12)

6.斜方輝石(No.10)

(スケール: 1~6. 100 μm)

第55図 堆積物中鉱物類の顕微鏡写真

第6章　まとめ

今回の調査では、柱穴列1列、掘立柱建物跡7棟、溝跡31条、井戸跡1基、竪穴状遺構1基、土坑11基、鍛冶炉2基、性格不明遺構2基、柱穴様ピット417基を検出した。これらは遺物の出土状況・埋土の特徴から古代～中世に帰属するものと考えられる。遺物は、縄文土器・石器・古代の土師器・須恵器・灰釉陶器、中世の陶器・磁器・鍛冶関連遺物等が出土した。遺跡の時期は、縄文土器を除く土器の年代から10～16世紀と考えられる。

遺構は、全て第V層で確認された。第II～IV層は耕作等による影響から遺構の検出は困難であり、検出した遺構は古代と中世に帰属するが、層位による区分は困難であった。古代の遺構には、柱穴列・掘立柱建物跡・溝跡・井戸跡・竪穴状遺構・土坑があり、集落が営まれていたと考えられるが、住居跡は検出されなかった。科学的分析の結果からも9～10世紀の成果が得られた。中世の遺構には、溝跡・土坑・鍛冶炉がある。遺構の検出状況や遺物の出土状況から、鍛冶生産と溝跡を利用した活動の2つの生産活動が想定される。鍛冶生産では、鍛冶炉が2基検出され、鍛冶津等は広い範囲から出土しており、周辺にも鍛冶関連遺構が存在する可能性が高い。一方、北東から南西に延びる数条の溝跡は、これに直交する数条の溝跡とで区画を作り、その内側は平坦面になっている。これらは農業生産に関連したものと考えられ、溝跡は灌漑用水路としての機能を想定したが、根拠は検討を要する。

遺物は、その多くが第V層を掘り込んだ遺構から出土した。古代の遺物には、土師器・須恵器・灰釉陶器がある。土師器は全体に摩滅したものが多く、出土量に対して復元できたものは微々たるものである。須恵器は横瓶・長頸瓶等の出土頻度の低い製品を含み、灰釉陶器の出土と併せて有力者の存在を示唆している。中世の遺物には、中国産の陶磁器・東海産の陶器・珠洲焼もしくはこの影響を受けた須恵系陶器・鍛冶関連遺物・硯・錢貨がある。中国産の陶磁器は11～16世紀と生産された時期に幅があり、大坪遺跡が断続的に営まれた遺跡であることを示唆している。東海産の陶器は渥美焼と常滑焼で、県内の出土例は極めて少ない。本報告書で渥美焼として扱った2点については様々な意見があり、今後の調査による類例の蓄積を期待したい。これらはいずれも大壺であり、搬入路は海上輸送の可能性が高いと考えられる。本荘由利地域は日本海に面しており、早くから交易港であった可能性がある。須恵系陶器は擂鉢・壺・甕の3器種が出土しており、特に擂鉢が多く出土した。擂鉢の中には、仙北郡南外村の大畠窯跡から出土した製品と類似したものも含まれている。近年、本荘市からは複数の須恵系陶器が出土しており、近隣に須恵器窯跡の葛法窯跡も存在することから未発見の中世窯跡の存在も考慮される。

大坪遺跡の周辺からは、縄文時代から古代の集落跡が多く発見されている。特に、古代においては由理柵の擬定地である上谷地遺跡との関連が考えられる。また、岩倉館跡をはじめとする中世城館が点在し、中世において周辺一帯の丘陵地とそれに続く低地が、当時の本荘由利地域の中核地であったと考えられる。陶磁器や鍛冶関連遺物がこれを裏付けているものと考えられる。南西2.3kmには鋳造を中心とした一大生産遺跡である堤沢山遺跡があり、鍛冶に関連した職能集団の存在もうかがえる。

大坪遺跡の調査成果は断片的なものが多いものの、本荘由利地域の歴史を解き明かすための資料として重要である。今後は周辺遺跡の調査結果と併せて考察していかなければならない。

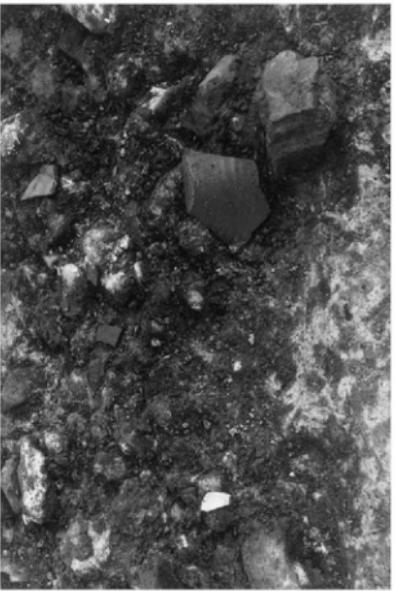
図版1 遺跡遺景・遺物出土状況(1)



遺跡遺景(西→)



SD430出土遺物(1)
(北→)



SD430出土遺物(2)
(北→)



SD116出土遺物(南→)

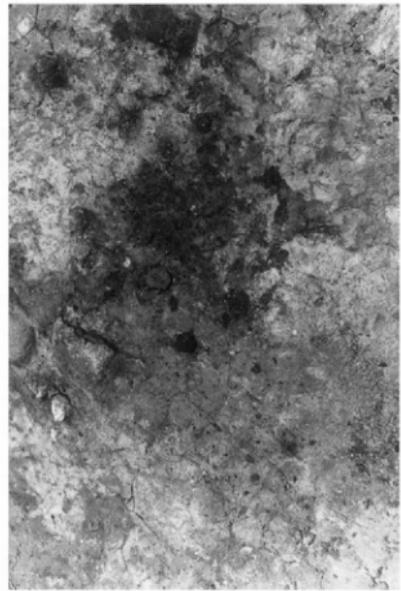


SD168出土遺物(西→)



SD24出土遺物(南→)

図版3 條出遺構



SS461條出狀況(北→)

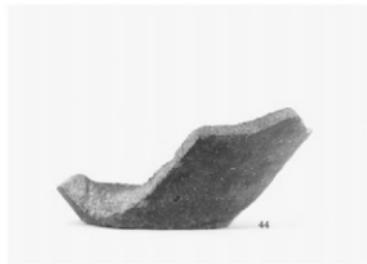
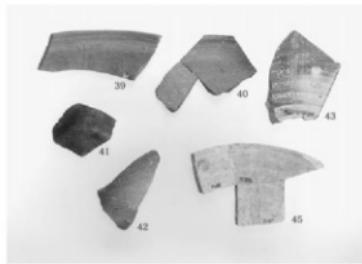
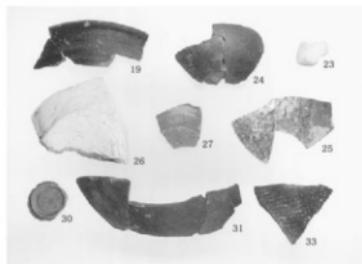
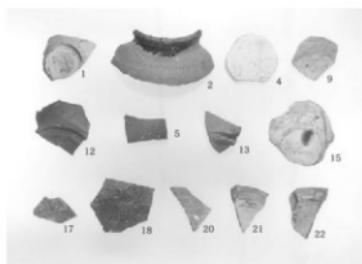


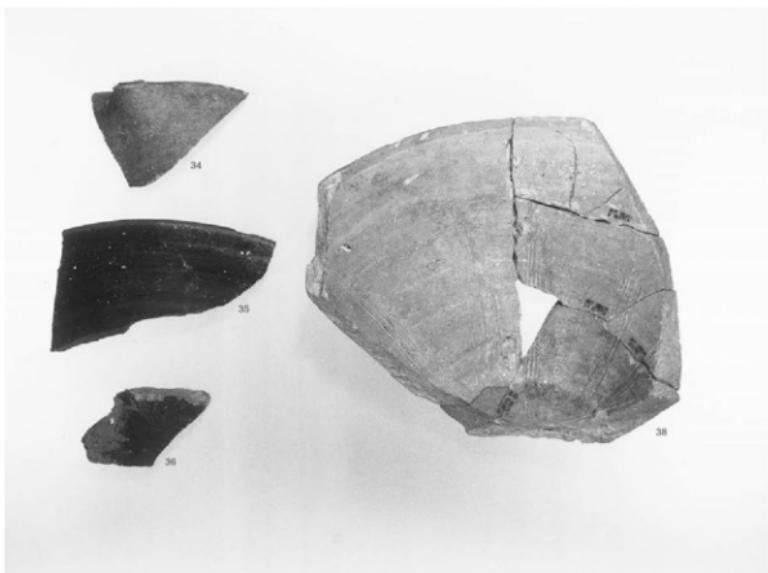
SK1215完掘(南東→)



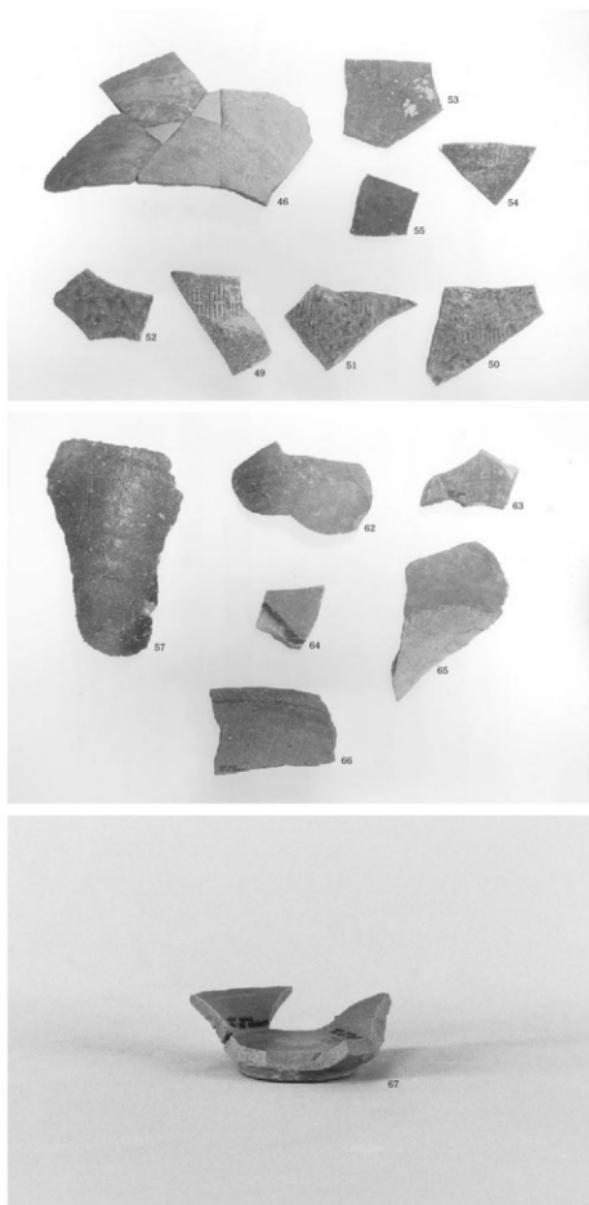
SKP407柱材(東→)

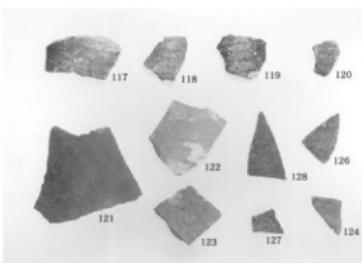
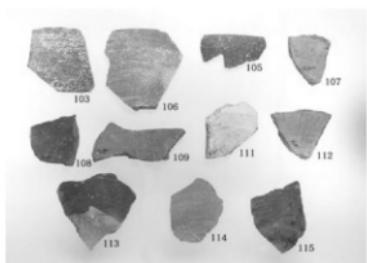
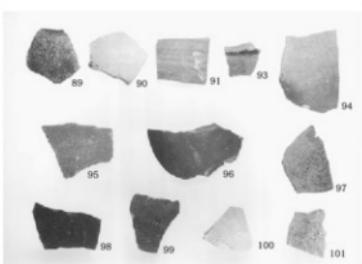
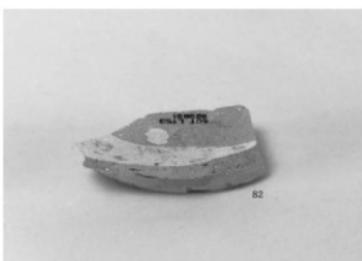
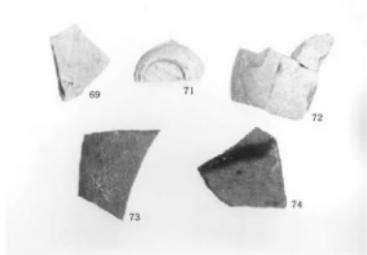
図版4
出土土器(1)



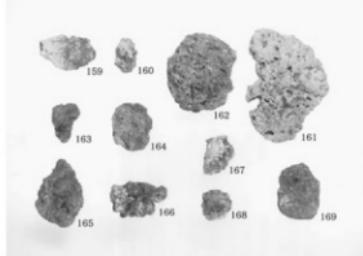
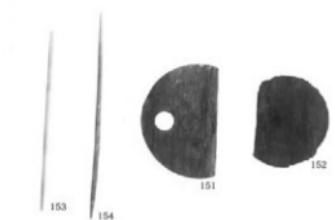
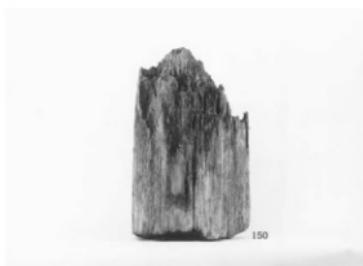
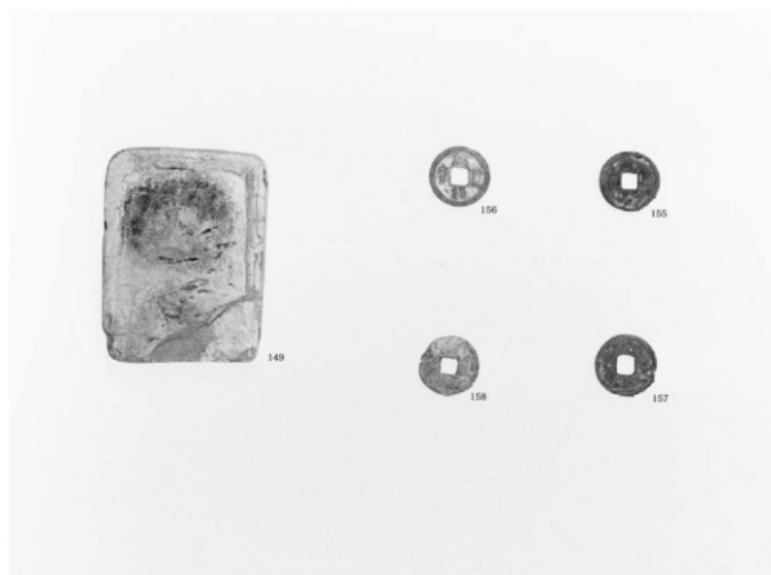


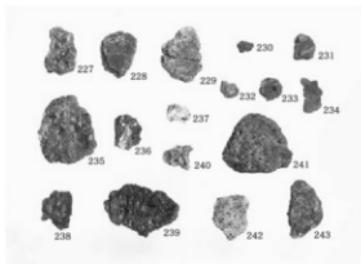
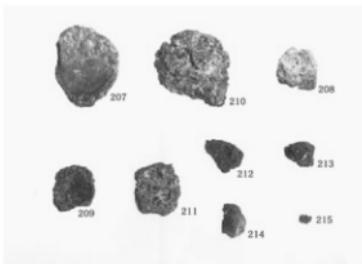
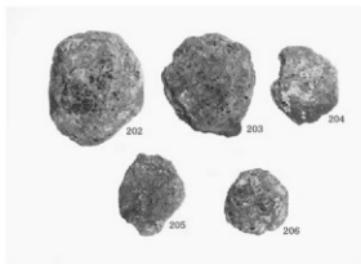
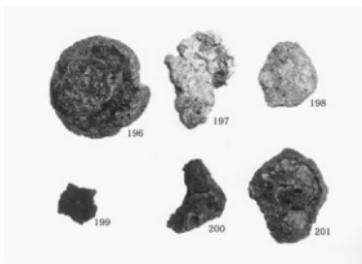
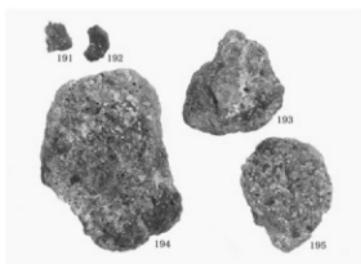
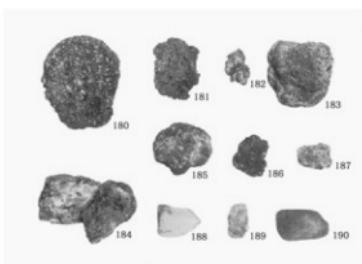
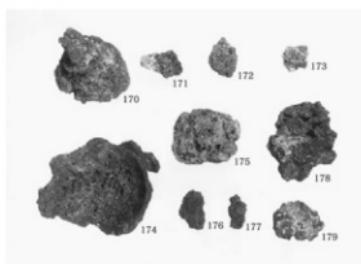
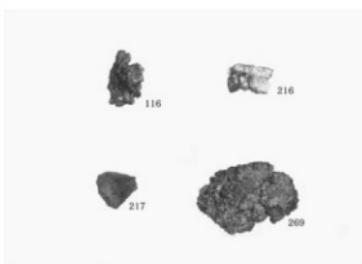
図版6
出土土器(3)

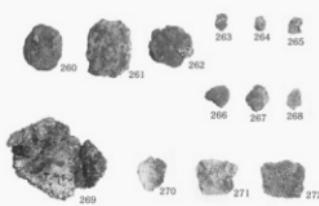
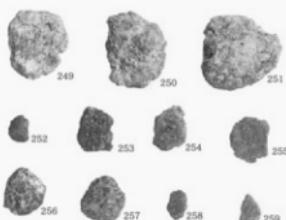
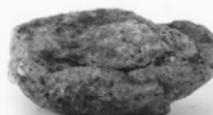
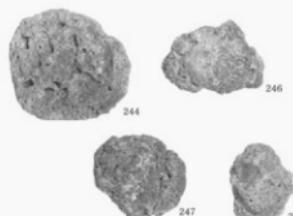
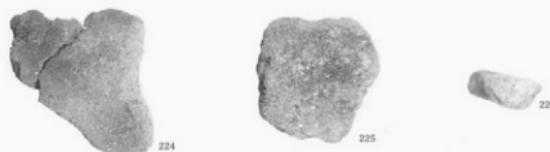
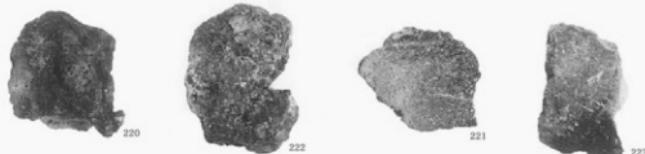




圖版 8
錢貨・石製品・石器・木製品・鑄冶関連遺物(1)







報告書抄録

ふりがな	おおつぼいせき						
書名	大坪遺跡						
副書名	日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次	XVII						
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第375集						
編著者名	進藤紀						
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター						
所在地	〒014-0802 秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地 TEL 0187-69-3331						
発行機関	秋田県教育委員会						
所在地	〒010-8580 秋田県秋田市山王3丁目1番1号 TEL 018-860-3193						
発行年月日	西暦2004年3月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ○○° ○○'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
大坪遺跡	秋田県 本荘市 烟谷 字大坪300外	05205		39° 140° 24' 15' 47" 15"	20020520 ~ 20020802	3,600m ²	日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財事前発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
大坪遺跡	散布地	縄文時代		縄文土器 石器	中世陶磁器が大量に出土。特に、常滑・渥美焼など、これまで県内で出土例が数少ない東海産の陶器が出土した。		
	集落跡	古代	掘立柱建物跡 井戸跡 土坑 竪穴状遺構 柱穴様ピット	土師器 須恵器 灰釉陶器			
	生産遺跡	中世	溝跡 鍛冶炉	陶磁器 鍛冶滓・羽口 炉壁・硯・銭貨			

秋田県文化財調査報告書第 375 集

大 坪 遺 跡

—日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XVII—

印刷・発行 平成16年 3月

編 集 秋田県埋蔵文化財センター

〒014-0802 仙北郡仙北町払田字牛鳩 20 番地

電話 (0187) 69-3331 FAX (0187) 69-3330

発 行 秋田県教育委員会

〒010-8580 秋田市山王三丁目 1 番 1 号

電話 (018) 860-5193

印 刷 株式会社 佐 藤 印 刷

